

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 12

東京大学本郷構内の遺跡

# 医学部附属病院受変電設備棟地点

2012

東京大学埋蔵文化財調査室



東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 12

東京大学本郷構内の遺跡

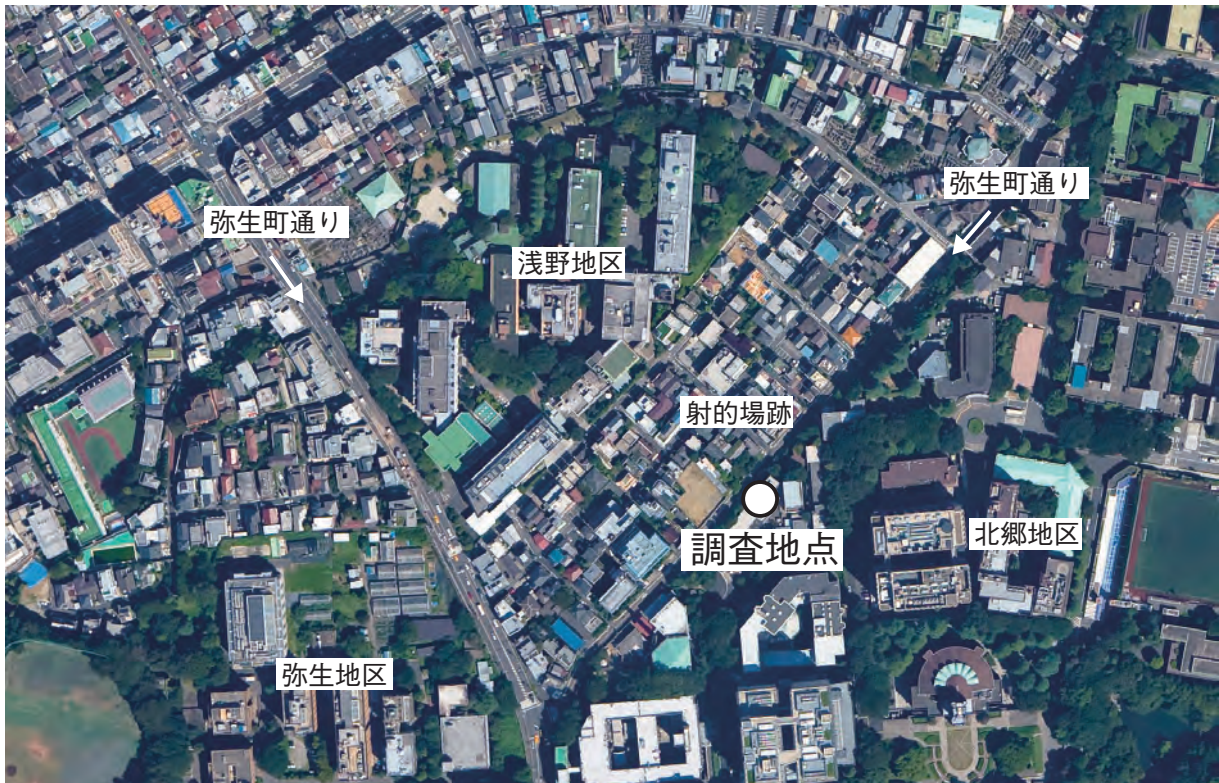
# 医学部附属病院受変電設備棟地点

2012

東京大学埋蔵文化財調査室







航空写真 東京大学北郷地区・浅野地区・弥生地区 調査地点周辺  
 (2007年9月8日撮影 東京大学保全グループ提供)



調査地点遠景



SB1 検出状況



弥生町通り



## 例 言

1. 本報告は、医学部附属病院受変電設備棟建設に伴う埋蔵文化財発掘報告である。
2. 本地点の略称は「YM」とする。
3. 調査地点は東京都文京区本郷7丁目3番1号東京大学本郷構内に所在している。
4. 試掘調査を2000年2月4日、事前調査を2000年2月5日から3月31日まで行った。調査面積は300㎡である。
5. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、原祐一が担当した。
6. 本報告の編集は原祐一、小林照子が行った。
7. 執筆分担は以下の通りである。

第I章・第II章第1節・第III章 原祐一

第II章第2節・第III章 石井龍太（瓦）、大貫浩子（近代遺物）、阿部常樹（動物遺体）

8. 遺物写真は青山正昭が撮影した（CD-ROM所収）。
9. 遺物実測は今井雅子、坂野貞子、北島くりかが行い、加藤理香によってデジタル化を行った。
10. 銭貨の分類・鑑定は流山市立博物館の川根正教氏にご教示いただいた。
11. 石材鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社の石岡友武氏にご教示いただいた。
12. 本調査の資料は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場Ⅱリサーチキャンパス、工学部工学系研究科柿岡教育研究施設にて保管、活用を行っている。
13. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。（敬称略、五十音順）

阿部常樹、文京区教育委員会、文京ふるさと歴史館、東京大学医学部附属病院、東京大学施設部、東京大学広報センター、東京大学タンDEM加速器研究施設

### 発掘調査・整理作業参加者

香取祐一、北島くりか、小林照子、坂野貞子、田中美奈子、渡邊法彦（埋蔵文化財調査室）  
加藤建設株式会社、文化財COM

## 凡 例

1. 本報告の遺構図版の縮尺は個別に記した。遺物図版の縮尺は基本的に1/3である。
2. 図版掲載遺物は残存率80%以上（完形）を中心に掲載した。
3. 遺物実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
  - ・▲は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
  - ・中心線上下端の破線は、推定口径及び底径を表している。
  - ・┆┆は、口唇部の口銹を表している。
  - ・—は断面を表している。
  - ・播鉢の┆┆は体部播目範囲を表している。
  - ・口唇部の┆┆は敲打痕を表している。
4. 本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に、遺構一括資料の段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1に基づいている。
5. 本文中に記載した瓦は加藤晃・金子智「第2章 御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』に基づいている。
6. 本文中に記載した人形は安芸毬子・小林照子「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8に基づいている。



○胎質

J (磁器)      T (陶器)      D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器	E - 備前系
A1 景德鎮窯系	F - 志戸呂系
A2 漳州窯系	G - 常滑系
A3 徳化窯系	H - 萩系
A4 龍泉窯系	I - 萬古系
A5 宜興窯系	J - 大堀・相馬系
A6 朝鮮	K - 丹波系
A7 ベトナム	L - 堺系
A8 ヨーロッパ	M - 益子・笠間系
B - 肥前系	N - 九谷系
C - 瀬戸・美濃系	O - 壺屋系
D - 京都・信楽系	P - 淡路系
	Z - 不明

○器種

1. 碗	2. 皿	3. 大皿	4. 爛徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉・火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺・甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 澁瓶	29. 搦鉢	30. 餌入
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	00. 蓋

○胎質

J:磁器(磁質) T:陶器(陶質) D:土器(土師質) R:瓦(瓦質)

○産地

A:輸入陶磁 B:肥前系 C:瀬戸・美濃系 D:京都・信楽系 E:備前系 Q:江戸在地系 Z:不明

○器種

1000 人形

1100 ひと形

1101 天神	1102 恵比寿	1103 大黒	1104 福祿寿・寿老人	1105 布袋
1106 不動明王	1107 地藏菩薩	1108 狸々	1109 西行	1110 袴人形
1111 力士	1112 朝鮮通信使	1113 蹴鞠人形	1114 坊主人形	1115 虚無僧
1116 狛師	1117 猿曳き	1118 福助	1119 笛吹き	1120 若衆
1121 姉様	1122 太夫・花魁	1123 お多福	1124 三味線弾き	1125 裸婦
1126 おぼこ・禿	1127 唐子	1128 ぶら人形	1129 這子	1130 狛抱き童子
1131 亀乗り童子	1132 狛乗り童子	1133 面持ち童子	1134 金太郎	1135 桃持ち童子
1136 獅子舞	1137 鯛抱き童子			

1200 動物形

1201 狛犬	1202 獅子	1203 猿	1204 犬	1205 馬
1206 狐	1207 牛	1208 猫	1209 兎	1210 鼠
1211 狸	1212 虎	1213 象	1214 鳩	1215 鶏
1216 鶯鶯	1217 木菟	1218 亀	1219 蛙	1220 鯉
1221 鯛・鯛車	1222 金魚	1223 蟬		

1300 その他(1100・1200以外)

1301 達磨	1302 首人形	1303 獅子頭	1304 面	1305 陽物
---------	----------	----------	--------	---------

2000 器物

2001 碗	2002 皿	2003 鉢	2004 銚子	2005 瓶
2006 壺	2007 片口鉢	2008 急須	2009 土瓶	2010 鍋
2011 釜・茶釜	2012 搦鉢	2013 蓋	2014 七厘・焔炉	2015 石臼
2016 竈	2017 器台	2018 硯	2019 水滴	2020 銭貨
2021 五銚鈴	2022 袖でんぼ	2023 香炉・風炉		

3000 建造物

3001 祠	3002 塔	3003 城郭	3004 橋	3005 塀・袖垣・石段
3006 民家・庵	3007 灯籠	3008 鳥居	3009 御輿	3010 舟
3011 庭園・背景	3012 仕切り盤			

4000 遊具

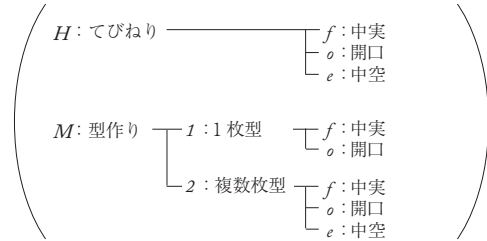
4001 土鈴	4002 独楽	4003 笛	4004 基石状製品	4005 面模
4006 泥面子・芥子面	4007 土玉	4008 円盤状製品	4009 車輪状製品	

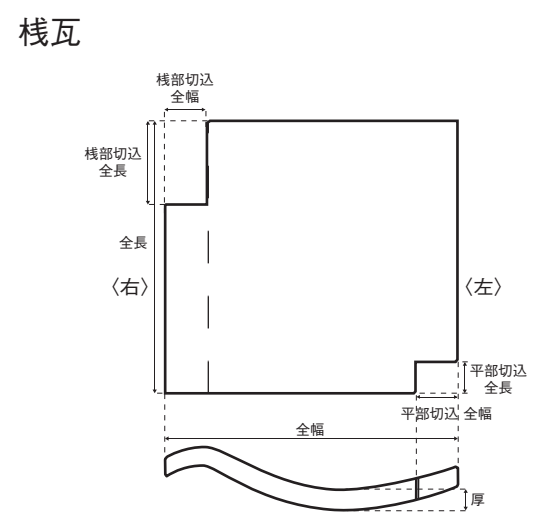
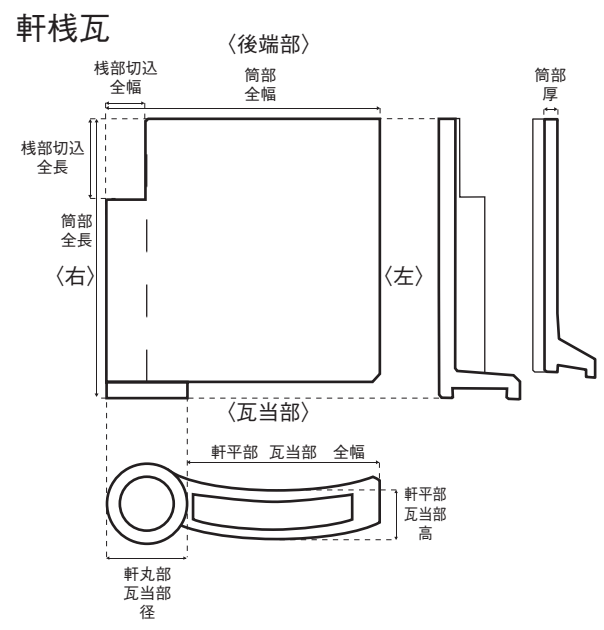
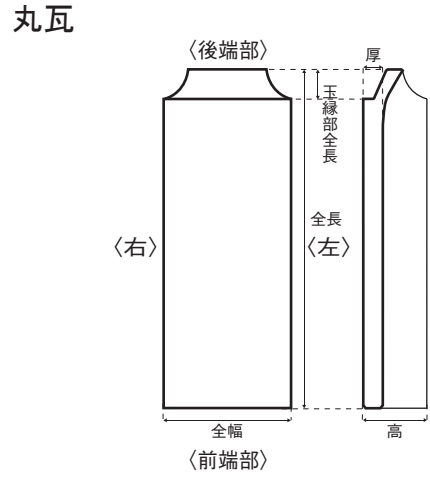
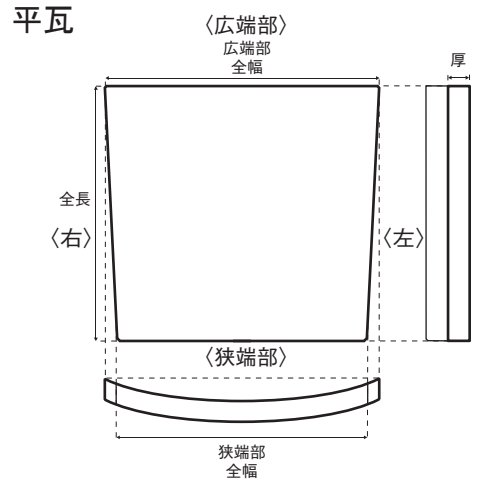
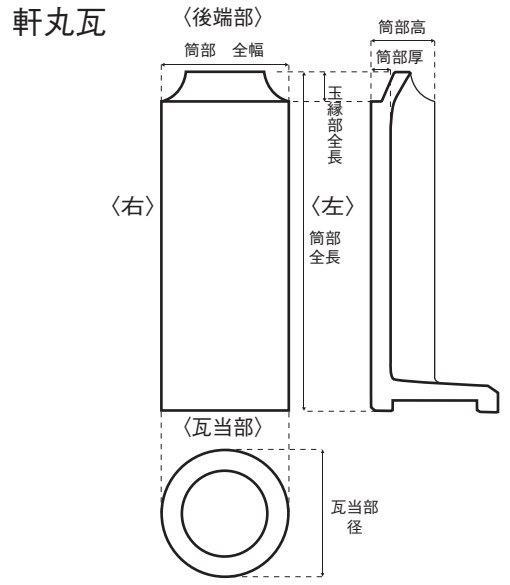
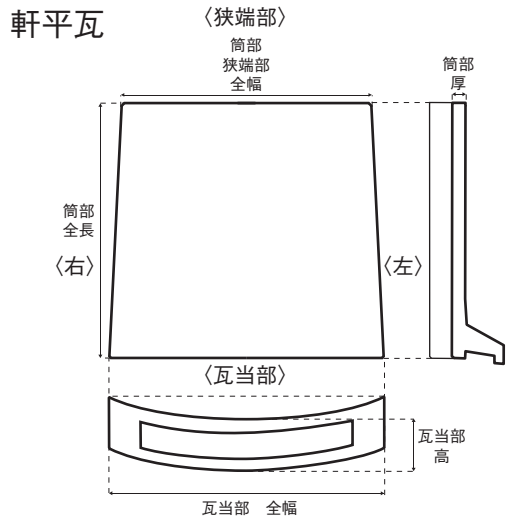
9000 不明

○技法

H:てびねり  
M:型作り  
W:ろくろ  
B:板作り  
A:加撃

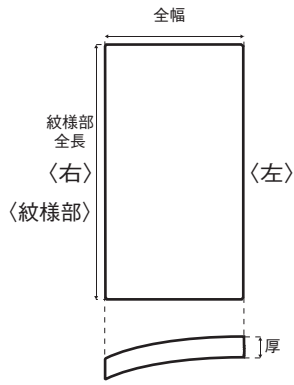
\*1000:人形



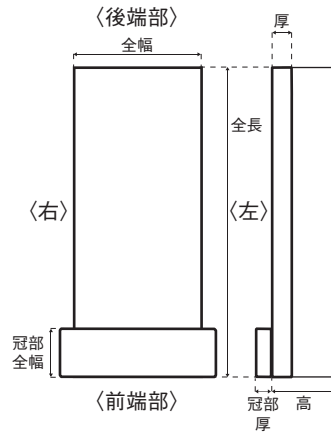


瓦凡例 (1) 軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦、

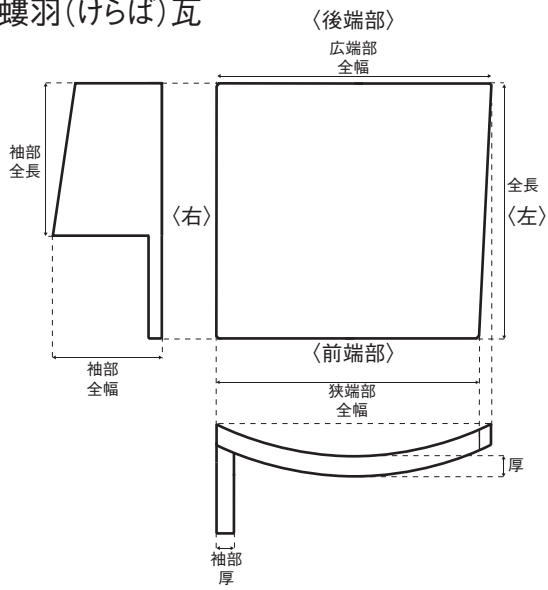
熨斗瓦



冠瓦



螻羽(けらば)瓦



瓦凡例 (2) 熨斗瓦、冠瓦、螻羽 (けらば) 瓦



東京大学本郷構内の遺跡  
医学部附属病院受変電設備棟地点発掘調査報告

目 次

例 言  
凡 例  
目 次

第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 調査の経緯と経過	1
第 2 節 遺跡の地理・歴史的環境	2

第 II 章 遺構と遺物

第 1 節 検出された遺構	6
第 2 節 出土した遺物	22
第 3 節 動物遺体	80

第 III 章 医学部附属病院受変電設備棟地点の成果

医学部附属病院受変電設備棟地点出土の瓦についての一考察 石井龍太	89
医学部附属病院受変電設備棟地点 SK6 の数量分析について 大貫浩子	96
医学部附属病院受変電設備棟地点と確認された低地の 土地利用状況と江戸時代以降の造成と雨水処理 原 祐一	101
報告書抄録	

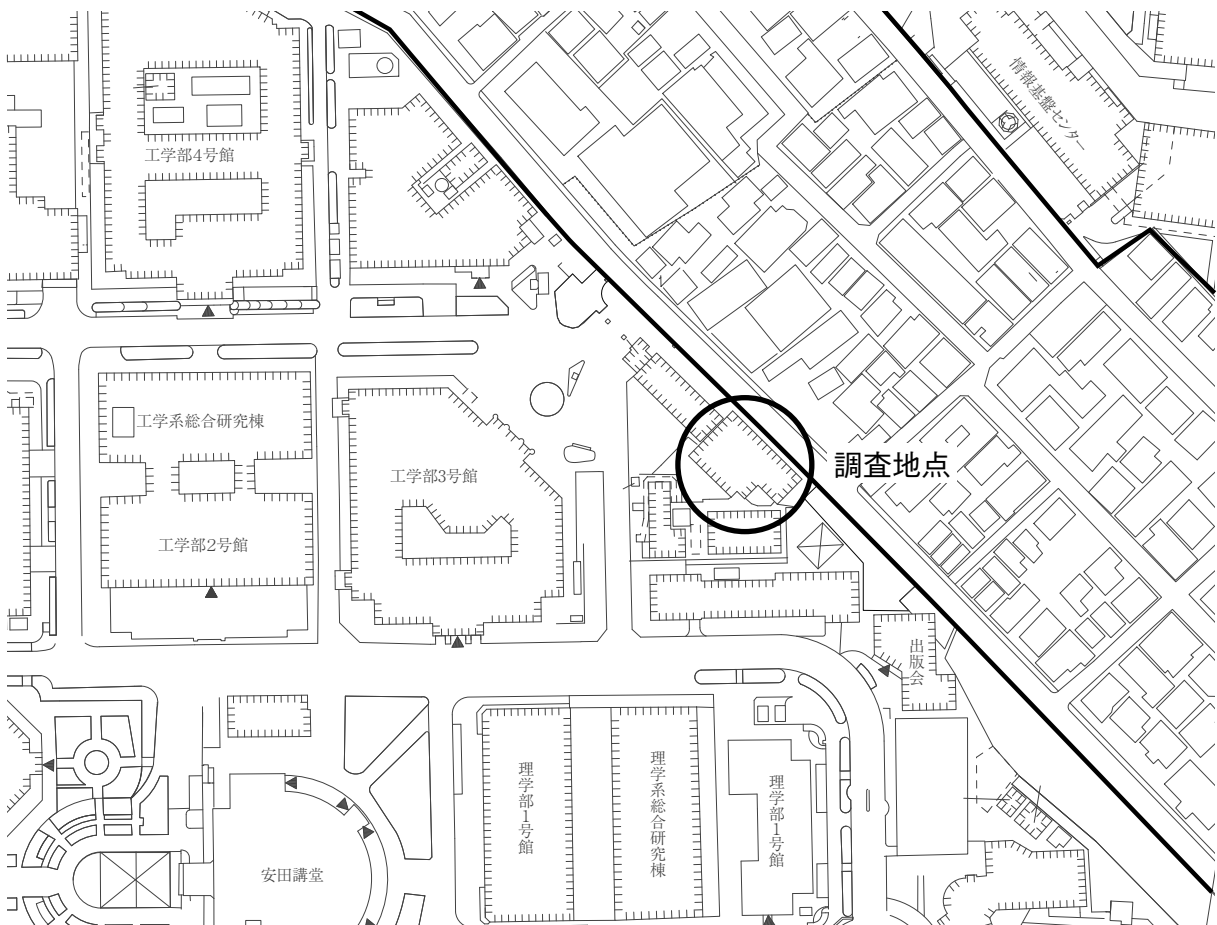


## 第 I 章 遺跡の位置と環境

### 第 1 節 調査の経緯と経過

東京大学は 2001 年度、本郷地区弥生門南側の敷地に医学部附属病院受変電設備棟の建設を計画、埋蔵文化財調査室に対して建設予定地の遺跡の存否について照会があった。建設予定地は加賀藩邸と水戸藩邸の地境部分に位置すると推定されていたこと、遺跡が遺存されている可能性があることから協議の結果、試掘調査が必要であると回答した。試掘調査は 2000 年 2 月 4 日に行った。調査は 3 箇所トレンチを設定し (2 m × 1.4 m、3 m × 1.2 m、5 m × 4 m)、各トレンチを深さ約 2 m 掘削し埋蔵文化財の確認を行った。調査の結果、江戸時代の遺跡を確認したことから事前調査を行うことになった。

事前調査は 2000 年 2 月 5 日から 3 月 31 日まで行った。調査面積は 300㎡、遺構数 41 基を検出、119 箱 (整理作業開始時) の遺物が出土した。整理作業は 2008 年 5 月から 2011 年度まで、工学部武田先端知ビル地点をはじめとする浅野地区の遺跡と同時に進めた。遺構図面のデジタルトレースは文化財 COM が行った。



I-1 図 調査地点位置図

## 第2節 遺跡の地理・歴史的環境

調査地点は東京大学本郷地区と文京区弥生の境界部分、弥生門の南側に位置する。「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立図書館清水文庫 特 18.6-27-1 1804-1845年）、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（個人蔵 文政9（1826）年墨書）によれば、調査地点は加賀藩と駒込邸の地境部分で加賀藩「御歩町」の並ぶ台地崖（絵図の表現方法と明治時代以降の地図、現在の地形から崖と判断）、育徳園の池（現三四郎池）の排水溝に囲まれた三日月状の敷地に位置する。敷地南側の崖には「御歩町」の敷地から低地に至る道が4本描かれている。敷地内には2棟の建物が弧状の地境に沿って「く」の字に配置される。東側の建物は「谷御仲間小屋」西側の建物は「谷御境目小屋」でそれぞれ6部屋に区画され各部屋に間口間数が記載されている。「江戸御上屋敷絵図」（尊経閣文庫 無番 1688年？）では2棟の建物は描かれていないが「前田本郷御屋屋舗図」（財団法人三井文庫蔵 C827-18 1761-1771年）以降継続して描かれている。2棟が直行して配置された絵図、他に2棟の建物、「射場」が描かれた絵図もある。立地から建物名に付いている「谷」は加賀藩邸と駒込邸の殿舎（現浅野地区）に挟まれた谷地形を反映したものである。陸軍参謀本部測量元図（明治16（1883）年）（I-3図）では江戸時代の加賀藩邸と駒込邸の地境が直線に変更されている。「弥生町通り」（東京帝國大學平面圖より）を挟んで駒込邸側は「向ヶ岡弥生町」で「東京共同射的公司」射的場（宮内庁用地）、「弥生舎」（警視庁用地）、「東京府癲狂院」「東京府避病院」（東京府用地）などの施設がある。加賀藩側は「元富士町」で「前田邸」「東京大醫學学部」の施設が描かれている。旧育徳園から北側は「文部省用地」で加賀藩の施設は撤去されている。「文部省用地」は現在の弥生門から旧育徳園に延びる道によって東西に区画され、西側敷地には建物が建設されている。調査地点周辺には施設はなく「荒」と記載されている。「弥生町通り」と文部省用地の地境は、南側が土手、三日月状の敷地部分が柵で区画されている。

明治16（1883）年文部省用地を東西に区画していた道は、「弥生町通り」から現在の安田講堂、三四郎池へ向かって伸びている。明治39-40（1906-1907）年の「東京帝國大學平面圖」では門の位置は変わらず道が現在の理学部1号館へ向かって延びる道に変更されるのに伴い三日月状の敷地西側が削平される。明治43-44（1910-1911）年以降、施設が建てられるようになる。昭和2（1927）年から昭和5年の間に三日月状の敷地に盛土が行われ「弥生通り」側の地境に石垣が設置され現在に至る。

調査の結果、「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」敷地の土地利用状況を示す遺構、明治時代以降の土地利用状況を反映する盛土を確認した。遺物は江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代の遺物で近現代の遺物の中には内面に「m l」（ミリリットル）表示がある取手付き注口磁器、埴埴などの実験道具、病院で使用された医療用具を出土した。これらの遺物は当地点周辺の土地利用状況の変遷と合わせて東京大学史の観点から遺物として掲載した。



「江戸御上屋敷絵図」(金沢市立図書館清水文庫 特 18.6-27-1) 1804-1845 年より作成

I-2 図 江戸時代の調査地点周辺



建設省国土地理院所蔵・(財)日本地図センター複製1984「明治16年第一測期第二測図参謀本部陸軍部測量五千文之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍測量局五千分一東京図測量原図』より作成

I-3 図 江戸時代の調査地点周辺



「東京帝國大学略図」より作成

I-4 図 明治 31-32 (1898-1899) 年



「東京帝國大学略図」より作成

I-5 図 明治 38-39 (1905-1906) 年



「東京帝國大学略図」より作成

I-6 図 明治 44-45 (1911-1912) 年



「東京帝國大学略図」より作成

I-7 図 昭和 5 (1930) 年

## 第Ⅱ章 遺構と遺物

### 第1節 検出された遺構

調査の結果、41 遺構を検出した（Ⅱ-1 表）。遺構の種別は石垣、礎石、小穴、土坑、溝状遺構、井戸、地下室である。調査区は調査地点の大部分がSK6によって削平されているため、南側に分布する遺構と北側に分布する遺構の関連が分かりにくくなっている。生活面は、A～E面、5枚の生活面、各面の盛土A～E層を検出した。各層の年代は遺物の製造年代からA層：19世紀初頭頃、B層：18世紀前葉から18世紀中葉、C層：17世紀後半頃、D面：17世紀中葉頃、E層：17世紀中葉である。北西壁セクションで確認された生活面はやや東側に傾斜している。一方北東壁セクションで確認された生活面はほぼ水平に堆積している（Ⅱ-3 図）。「盛土」とした堆積は昭和2（1927）年から昭和5年の間に調査地点を含む崖下で行われた造成に伴うものが主体を占め、江戸時代から昭和期以降の遺物が含まれている。

#### SB1（遺構Ⅱ-4・5 図、遺物Ⅱ-12 図）

遺構性格は石垣である。確認された範囲で長軸5m、短軸1.15mを測る。生活面A面（断面図11層（A層））に伴う遺構。石垣の間知石は2段で面は南向きある。周辺に裏込めの石と考えられる石が散乱している。掘り方は溝状で方形、長方形の小穴が多く確認された。間知石と下層掘り方の範囲が異なることから2段階にわたって石垣が造成された可能性がある。

#### SX2（遺構Ⅱ-6 図）

遺構性格は不明。遺構底部に漆喰が盛られている。平面形は凸形で長軸7m、短軸4.1m、深さ0.5mを測る。

#### SK5（遺構Ⅱ-6 図、遺物Ⅱ-12～14 図）

遺構は土坑である。平面形は長方形で長軸1.56m、短軸1.4m以上、深さ1.3m以上を測る。

#### SK6（遺構Ⅱ-7 図、遺物Ⅱ-15～29 図）

遺構性格は採土坑と考えられ、掘削後ごみが廃棄されている。土層断面から数回の掘削が行われており、土層には焼土層がある。平面形は不整形で長軸15.3m、短軸7.8m以上、深さ2.63mを測る。

#### SB8-1・2（遺構Ⅱ-8 図）

遺構性格は石組列。2列の石組が約2m間隔で平行に並んでいる。

#### SK9（遺構Ⅱ-8 図、遺物Ⅱ-30・31 図）

遺構は土坑である。平面形は不整形、断面形は台形。長軸2.3m、短軸1.9m、深さ0.44mを測る。



SB10 (遺構Ⅱ-8 図)

遺構性格は基礎で石列が南北に並ぶ。掘り方は確認できず石を配置、盛土で埋めている。周辺に石が散乱している。

SD11 (遺構Ⅱ-9 図、遺物Ⅱ-32 図)

遺構性格は溝状遺構。平面形は長方形、断面形は台形。確認された範囲で長軸 4.3 m 以上、短軸 1.14 m、深さ 0.86 m を測る。

SU14 (遺構Ⅱ-9 図、遺物Ⅱ-32 ~ 38 図)

遺構性格は地下室。室の入口部分の平面形は隅丸方形、断面形は凸形を呈する。入口の長軸 1.27 m、短軸 1.2 m、深さ 1.3 m 以上を測る。

SK15 (遺構Ⅱ-9 図、遺物Ⅱ-38 図)

遺構は土坑である。平面形は不整形、断面形は方形を呈する。確認された範囲で長軸 2 m、短軸 1.1 m、深さ 2 m を測る。

SK16 (遺構Ⅱ-9 図、遺物Ⅱ-39 図)

遺構は土坑である。平面形は不整形、断面形は台形を呈する。確認された範囲で長軸 0.72 m、短軸 0.34 m、深さ 0.3 m を測る。

SK26 (遺構Ⅱ-9 図)

遺構は土坑である。平面形は隅丸長方形、断面形は長方形を呈する。長軸 0.87 m、短軸 0.56 m、深さ 0.55 m を測る。

SK29 (遺構Ⅱ-9 図)

遺構は土坑である。平面形は不整形、断面形は逆凹形を呈する長軸 0.68 m、短軸 0.5 m、深さ 0.56 m を測る。

SB30 (遺構Ⅱ-9 図)

遺構性格は基礎。平面形は不整形、断面は台形を呈する。長軸 0.7 m、短軸 0.6 m、深さ 0.34 m を測る。

SK36 (遺構Ⅱ-10 図)

遺構は土坑である。平面形は不整形、断面は台形を呈する。長軸 0.72 m、短軸 0.7 m、深さ 0.71 m を測る。

SD38 (遺構Ⅱ-10 図、遺物Ⅱ-39 図)

遺構性格は溝状遺構。平面形は長方形、平面形は不整形を呈する。確認された範囲で長軸 3.07 m、短軸 0.86 m、深さ 0.55 m を測る。

SD39 (遺構Ⅱ-10 図)

遺構性格は溝状遺構。平面形は長方形、断面形はレンズ状を呈する。確認された範囲で長軸 3.5 m、短軸 0.4 m、深さ 0.5 mを測る。

**SB40**（遺構Ⅱ-10 図）

遺構性格は基礎。平面形は長方形、断面は逆凸状を呈する。長軸 0.59 m、短軸 0.5 m、深さ 0.77 mを測る。礎石が確認されている。

**SK43**（遺構Ⅱ-11 図、遺物Ⅱ-39 図）

遺構は土坑である。平面形は長方形、断面径は長方形を呈する。確認された範囲で長軸 2.25 m、短軸 2.15 m、深さ 1.07 mを測る。

**SE45**（遺構Ⅱ-11 図）

遺構性格は井戸。平面形は円形を呈する。遺構の径は 1.4 m、確認面から 0.75 mまで掘削した。

**SD47**（遺構Ⅱ-11 図）

遺構性格は溝状遺構。弧状の溝に東西の溝が接続している。断面形は台形を呈する。確認された範囲で長軸 4.4 m、短軸 0.38 m、深さ 0.26 mを測る。

**SK55**（遺構Ⅱ-11 図）

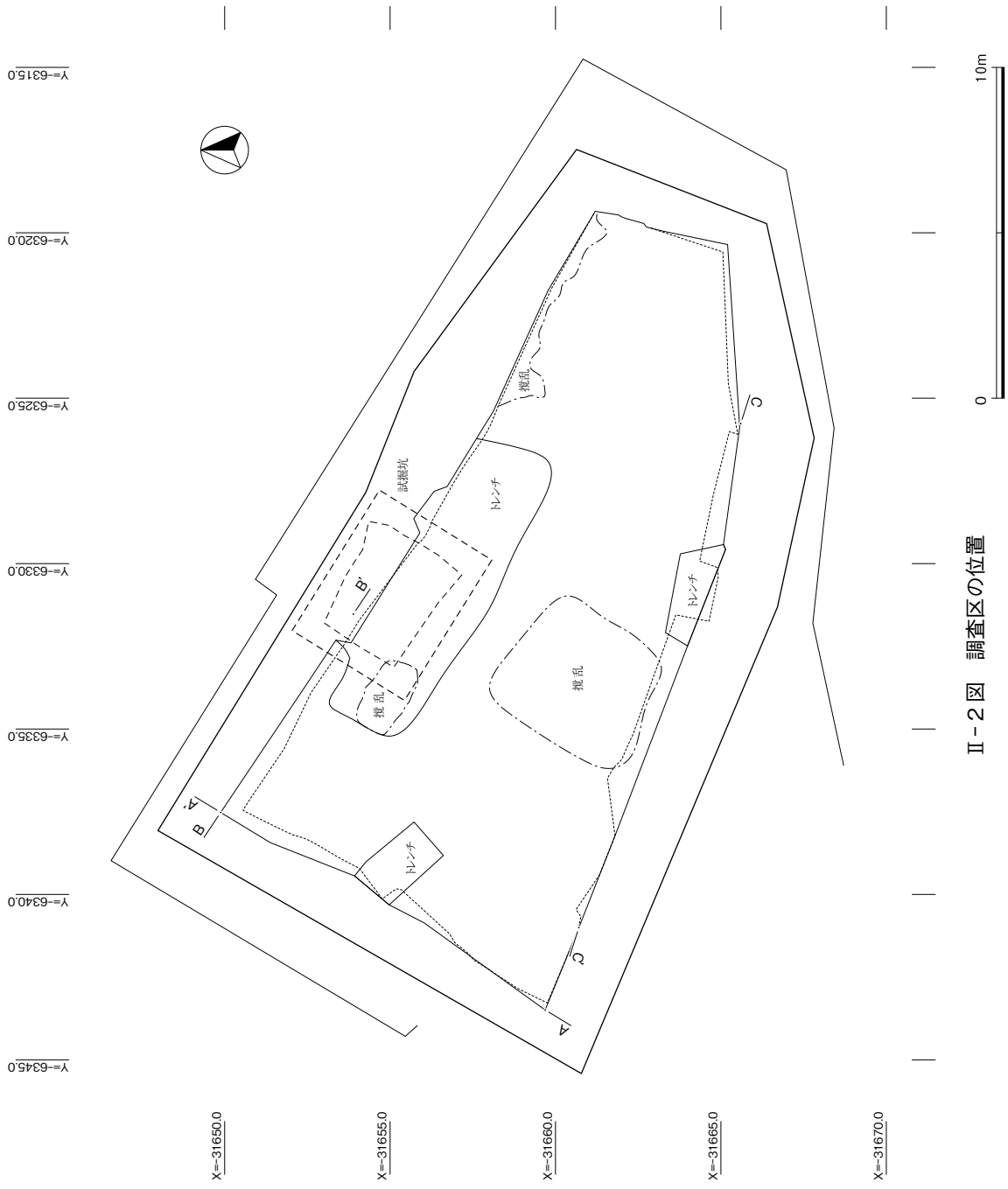
遺構は土坑である。平面形は不整形、断面は不整形を呈する。

**SK56**（遺構Ⅱ-10 図）

遺構は土坑である。確認された範囲で長軸 2.25 m、短軸 0.75 m、深さ 7.5 mを測る。

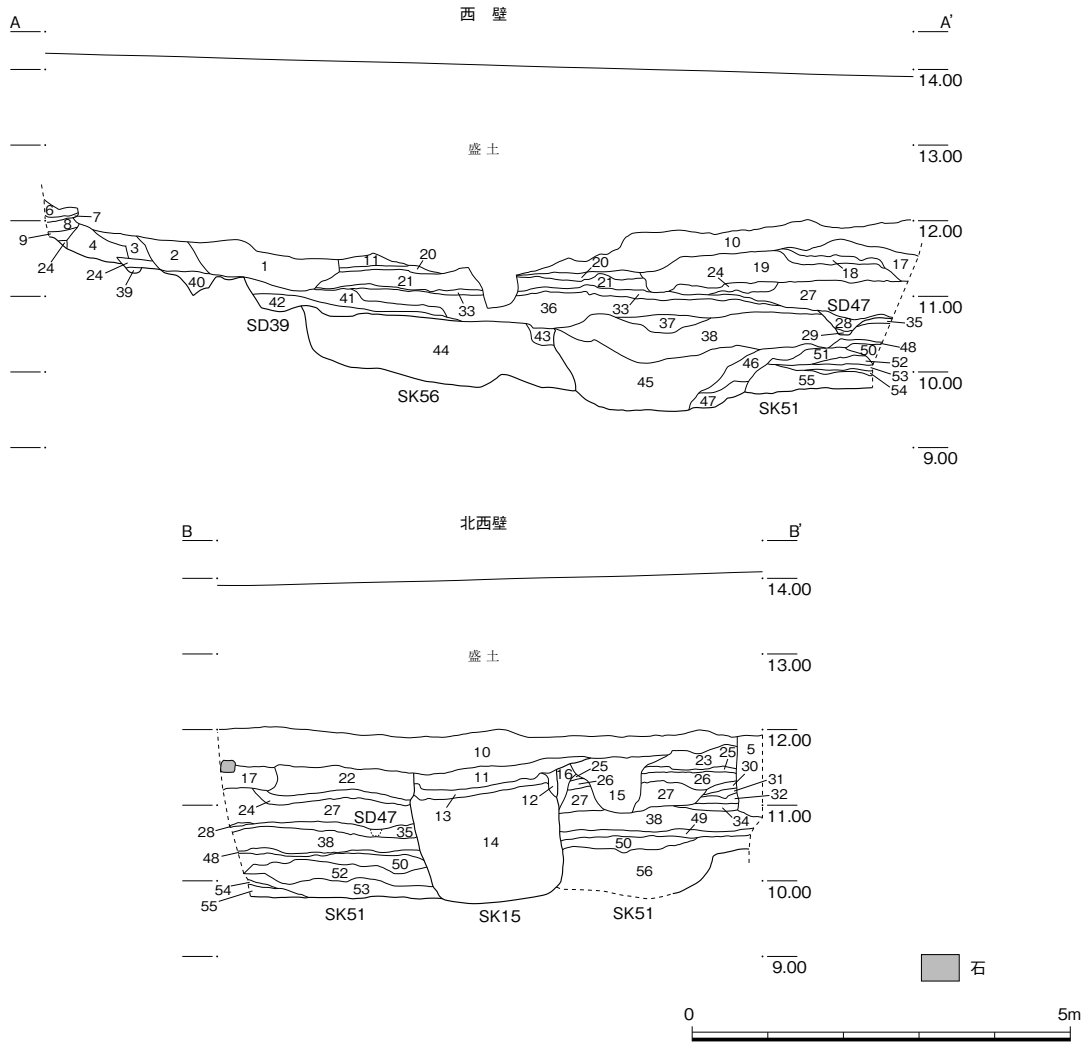


II-1図 遺構配置図



II-2 図 調査区の位置

報告編

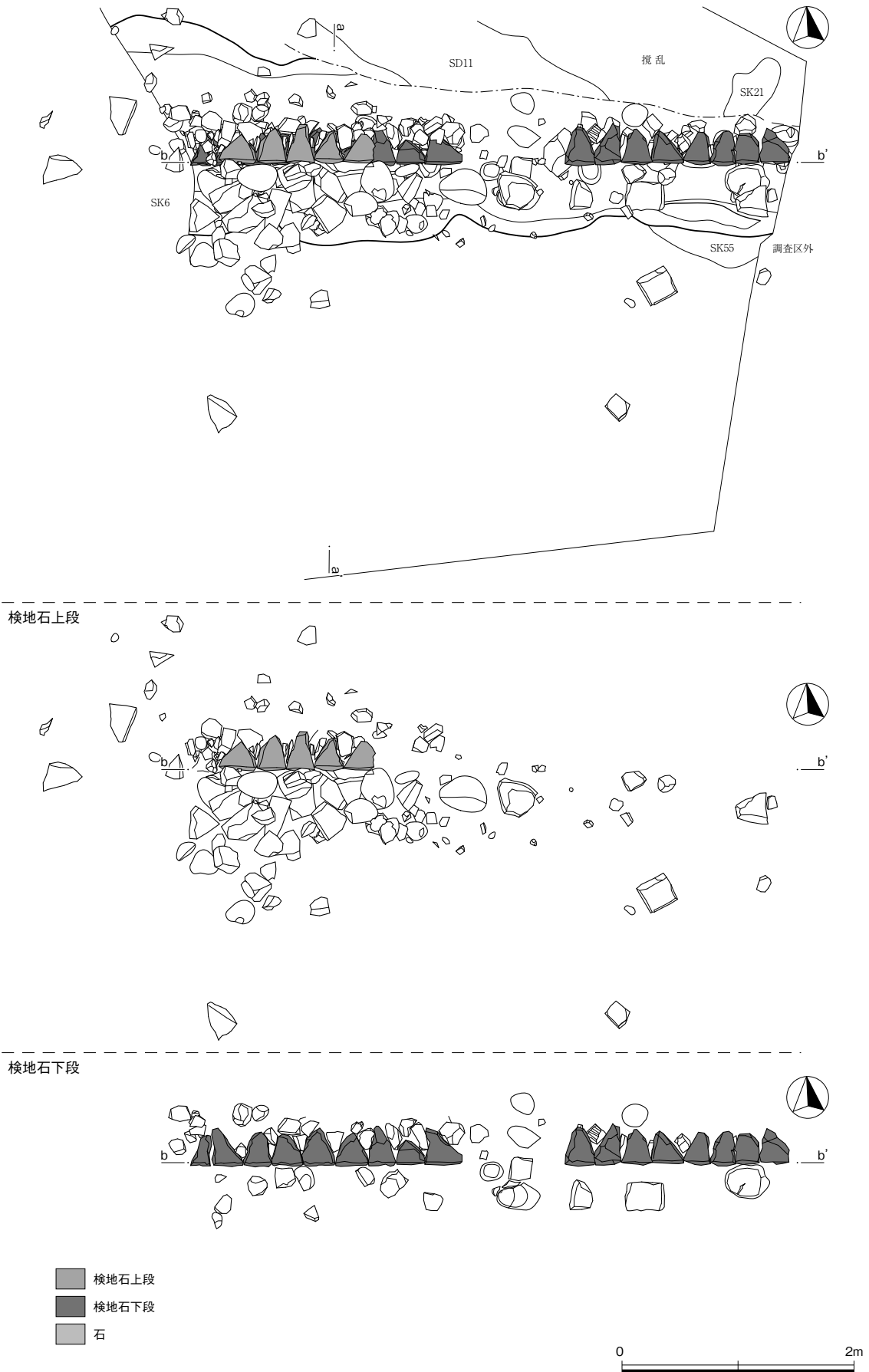


調査区北西壁・西壁

- |                                    |           |                                      |           |
|------------------------------------|-----------|--------------------------------------|-----------|
| 1 灰褐色土 (灰色粘土主体、ローム土含む、締りあり、粘性強い)   | [A面上層遺構]  | 34 茶褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締り硬質、粘性あり)     | [D層、硬化面]  |
| 2 暗褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)    | [A面上層遺構]  | 35 暗褐色土 (黒色土主体、砂利含む、締り硬質、粘性あり)       | [D層、硬化面]  |
| 3 茶褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締り硬質、粘性あり)    | [A面上層遺構]  | 36 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)     | [D層]      |
| 4 茶褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締り硬質、粘性あり)    | [A面上層遺構]  | 37 黒色土 (黒色土主体、炭化物含む、締りあり、粘性あり)       | [D層]      |
| 5 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)    | [A面上層遺構]  | 38 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、遺構]   |
| 6 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)    | [A面上層遺構]  | 39 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、遺構]   |
| 7 灰褐色土 (砂利主体、黒色土・粘土含む、締り硬質、粘性あり)   | [A層、硬化面]  | 40 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、遺構]   |
| 8 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)    | [A層]      | 41 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)     | [E面、SD39] |
| 9 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)    | [A層]      | 42 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)     | [E面、SD39] |
| 10 茶褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)   | [A層]      | 43 黒色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)      | [E面、SK56] |
| 11 茶褐色土 (ローム土主体、砂・黒色土含む、締り硬質、粘性あり) | [B面、SK15] | 44 明褐色土 (ローム土主体、粘土含む、締りあり、粘性あり)      | [E面、SK56] |
| 12 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)   | [B面、SK15] | 45 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、SK51] |
| 13 灰色土 (灰色粘土主体、硬質、粘性強い)            | [B面、SK15] | 46 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、SK51] |
| 14 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)   | [B面、SK15] | 47 明褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、SK51] |
| 15 茶褐色土 (黒色土主体、焼土多い、締りあり、粘性あり)     | [B面上層遺構]  | 48 暗褐色土 (黒色土主体、砂利含む、締り硬質、粘性あり)       | [E面、硬化面]  |
| 16 茶褐色土 (黒色土主体、締りあり、粘性あり)          | [B面、遺構]   | 49 明褐色土 (ローム土主体、砂・砂利・ローム土含む、硬質、粘性あり) | [E面、硬化面]  |
| 17 黒褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)   | [B面、遺構]   | 50 暗褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、SK51] |
| 18 茶褐色土 (ローム土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)  | [B層、硬化面]  | 51 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、SK51] |
| 19 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土・砂含む、締り硬質、粘性あり) | [B層]      | 52 明褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)     | [E面、SK51] |
| 20 暗褐色土 (砂・砂利主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)   | [B層、硬化面]  | 53 明褐色土 (ローム土・粘土主体、締りあり、粘性強い)        | [E面、SK51] |
| 21 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)   | [B層]      | 54 明褐色土 (ローム土・粘土主体、締りあり、粘性強い)        | [E面、SK51] |
| 22 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)   | [B層]      | 55 明褐色土 (ローム土・粘土主体、締りあり、粘性強い)        | [E面、SK51] |
| 23 茶褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)   | [B層]      | 56 明褐色土 (ローム土・粘土主体、締りあり、粘性強い)        | [E面、SK51] |
| 24 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)   | [D層、遺構]   |                                      |           |
| 25 灰色土 (灰色粘土主体、硬質、粘性強い)            | [C層、硬化面]  |                                      |           |
| 26 暗褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)   | [C層]      |                                      |           |
| 27 茶褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)   | [C層]      |                                      |           |
| 28 赤褐色土 (焼土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)    | [D面、SD47] |                                      |           |
| 29 灰色土 (灰色粘土主体、締りあり、粘性強い)          | [D面、SD47] |                                      |           |
| 30 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締り硬質、粘性あり)   | [C層]      |                                      |           |
| 31 暗褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締り硬質、粘性あり)   | [C層]      |                                      |           |
| 32 明褐色土 (ローム土主体、締り硬質、粘性あり)         | [C層]      |                                      |           |
| 33 茶褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締り硬質、粘性あり)   | [D層、硬化面]  |                                      |           |

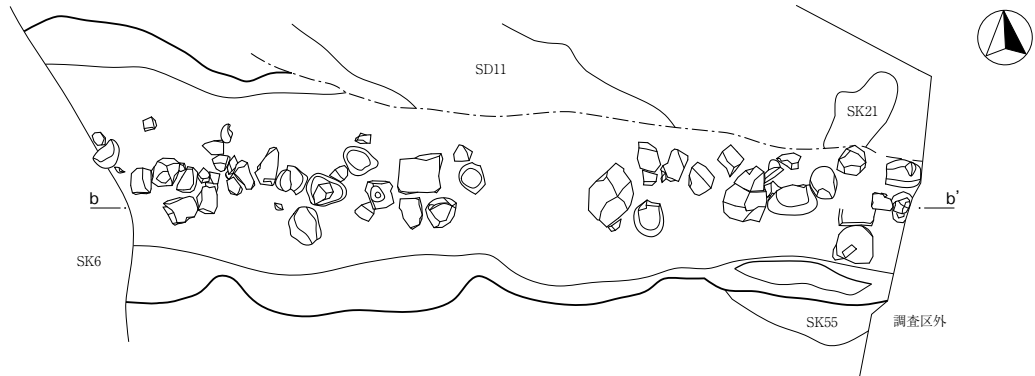
II-3図 北壁・西壁セクション図

第II章 遺構と遺物

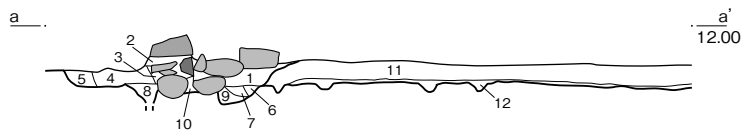


II-4図 SB 1 (1)

根石・掘り方

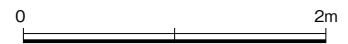
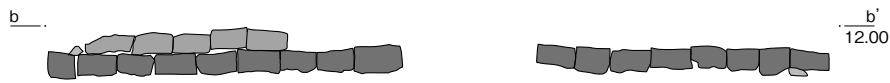


検地石下ピット群

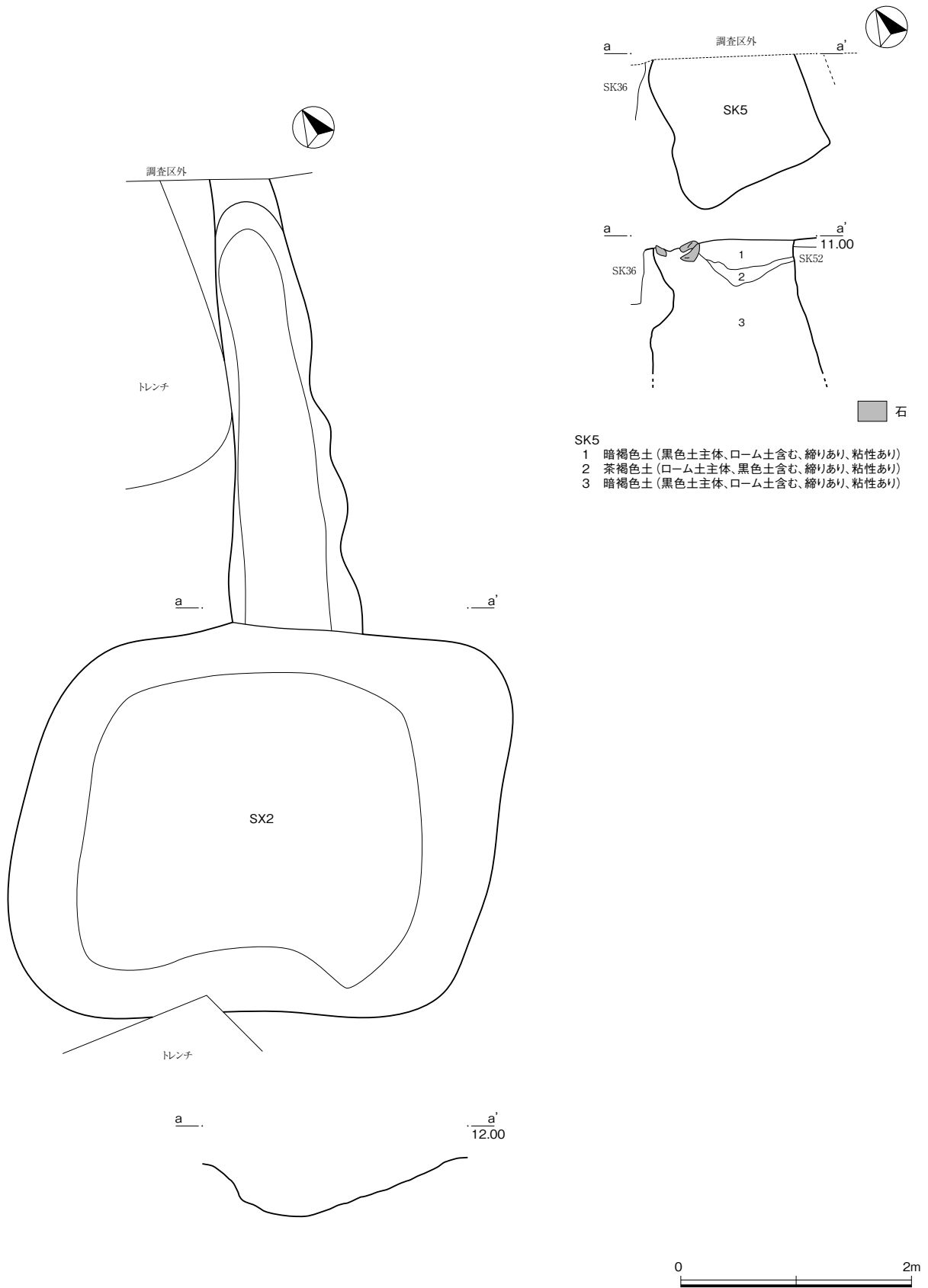


SB1

- |                                    |                                  |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土・砂含む、締りあり、粘性あり)  | 7 黒褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)  |
| 2 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りなし、粘性あり)    | 8 明褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)  |
| 3 黒褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りなし、粘性あり)    | 9 黒色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)   |
| 4 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土・焼土含む、締りあり、粘性あり) | 10 明褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり) |
| 5 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)    | 11 暗黒褐色土 (黒色土主体、やや硬質、粘性あり 硬化面A層) |
| 6 明褐色土 (ローム土主体、黒色土含む、締りあり、粘性あり)    | 12 暗褐色土 (ローム土主体、黒色土含む 硬化面B層)     |

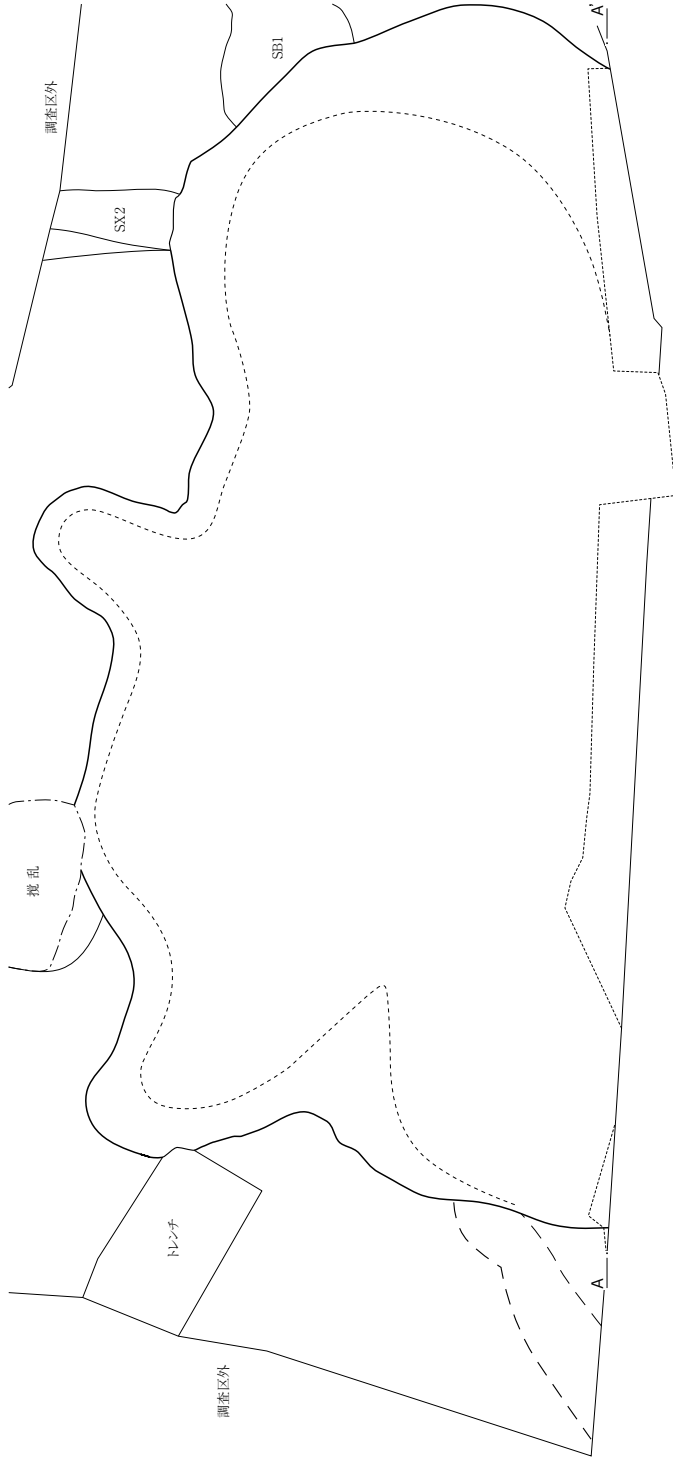


II-5図 SB1(2)



II-6 図 SX2・SK5

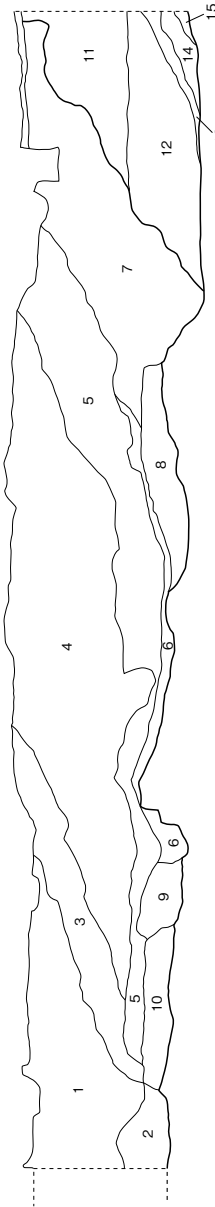




SK6

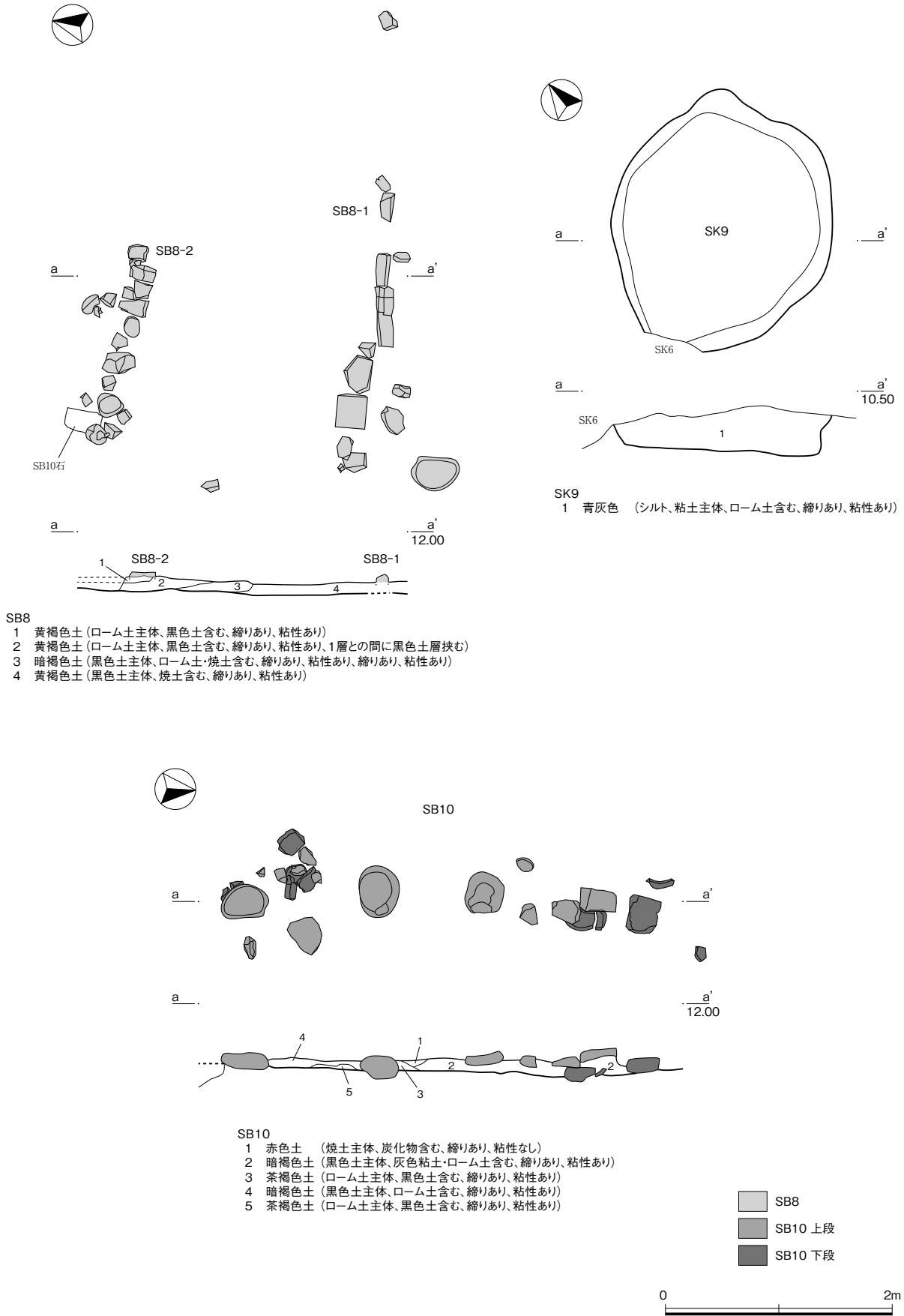
- 1 灰褐色土 (砂利主体、締め硬質、粘性なし)  
[A面覆土]
- 2 明褐色土 (ローム土(ブロック)主体、黒色土  
含む、締めあり、粘性あり)
- 3 黒色土 (シルト主体、締めあり、粘性強い)
- 4 暗褐色土 (黒色土主体、焼土含む、締めあり、  
粘性あり)
- 5 暗褐色土 (黒色土主体、焼土多い、締めあり、  
粘性あり)
- 6 黒色土 (黒色粘土主体、締めあり、粘性強  
い)
- 7 緑色土 (砂主体、粘土含む、締めあり、粘性  
強い)
- 8 黒色土 (黒色粘土主体、焼土、砂含む、締  
めあり、粘性強い)
- 9 黒色土 (黒色土主体、締めあり、粘性あり)
- 10 緑色土 (砂主体、粘土含む、締めあり、粘性  
強い)
- 11 赤色土 (焼土主体、瓦を多く含む、締めあり、  
粘性なし)
- 12 黒色土 (黒色粘土主体、締めあり、粘性強  
い)
- 13 緑色土 (緑色砂主体、粘土含む、締めあり、  
粘性強い)
- 14 明褐色土 (ローム土主体、締めあり、粘性あり  
砂含む、締めあり、粘性あり)
- 15 明褐色土 (ローム土主体、砂含む、締めあり、  
粘性あり)

盛土

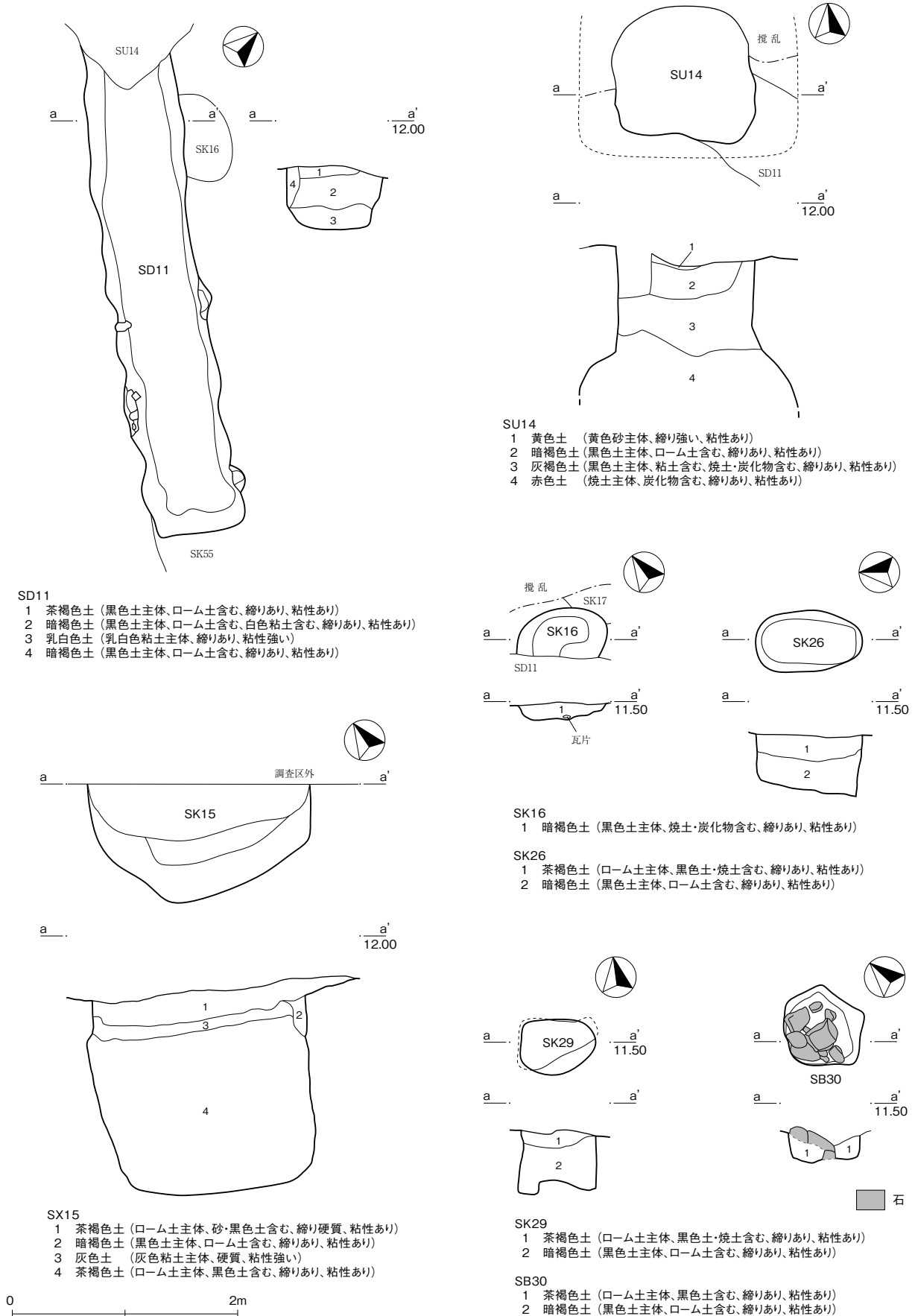


II-7 図 SK6

第II章 遺構と遺物

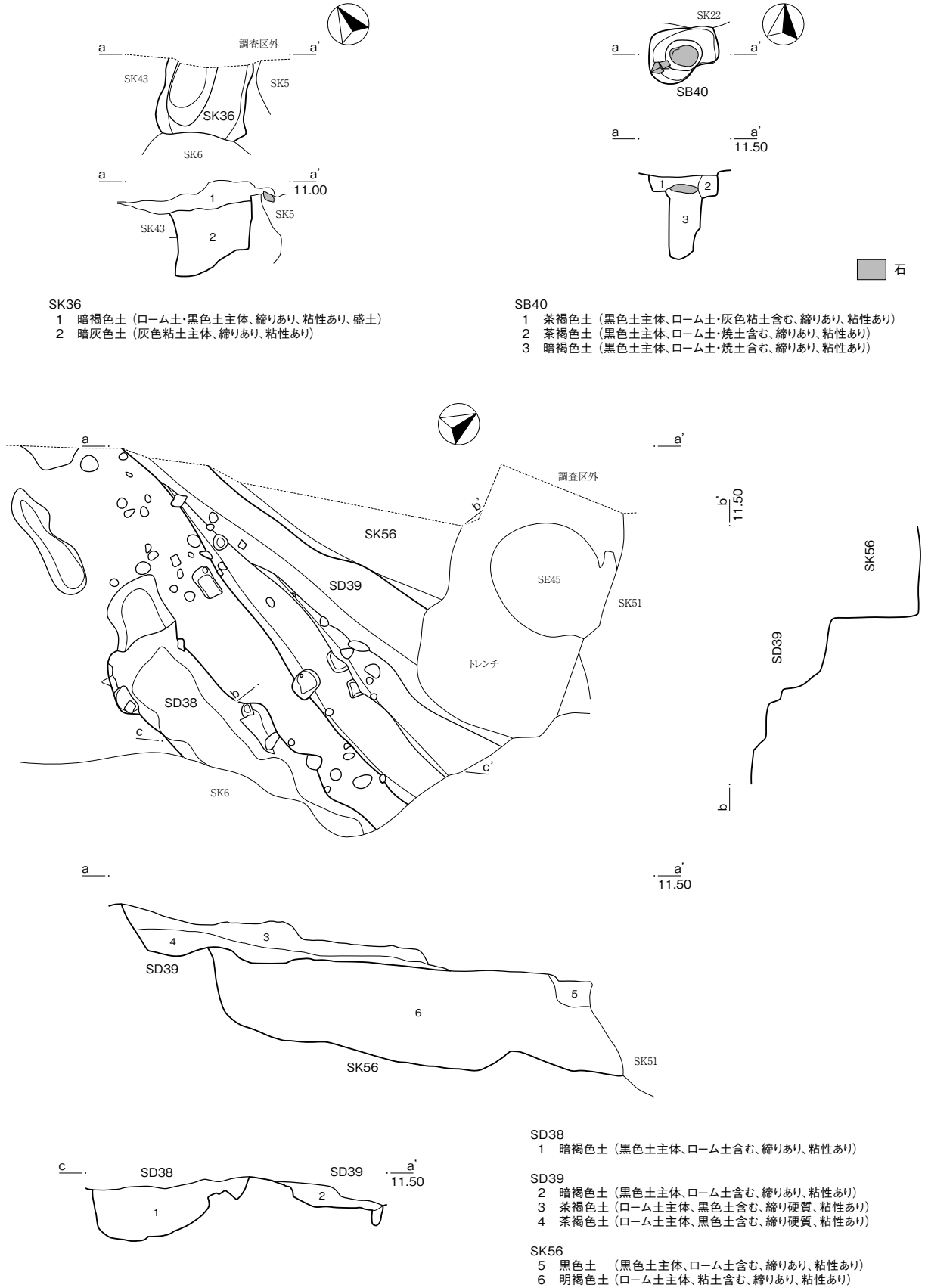


II-8図 SB8・SK9・SB10

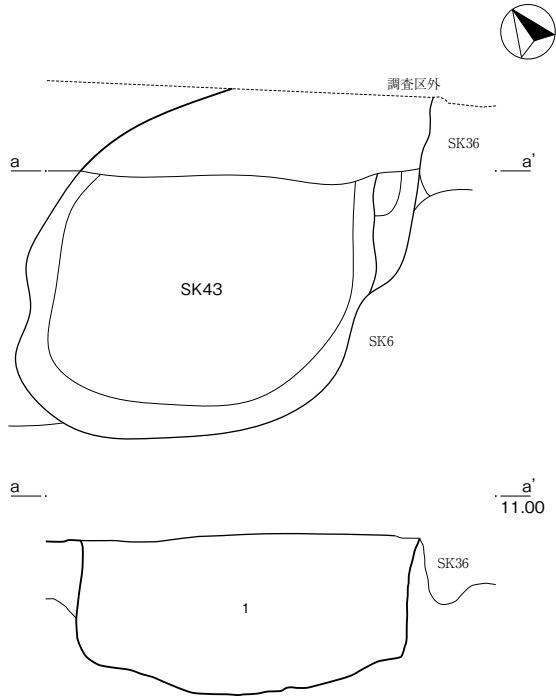


II-9 図 SD11・SU14・SK15・SK16・SK26・SK29・SB30

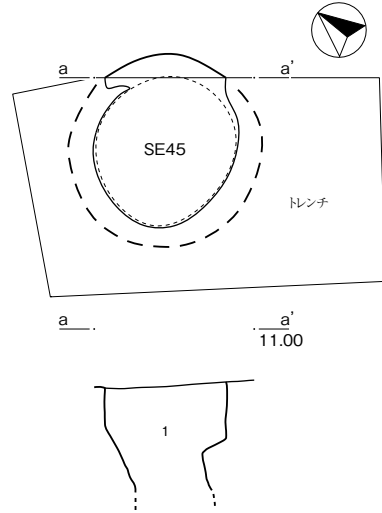
第II章 遺構と遺物



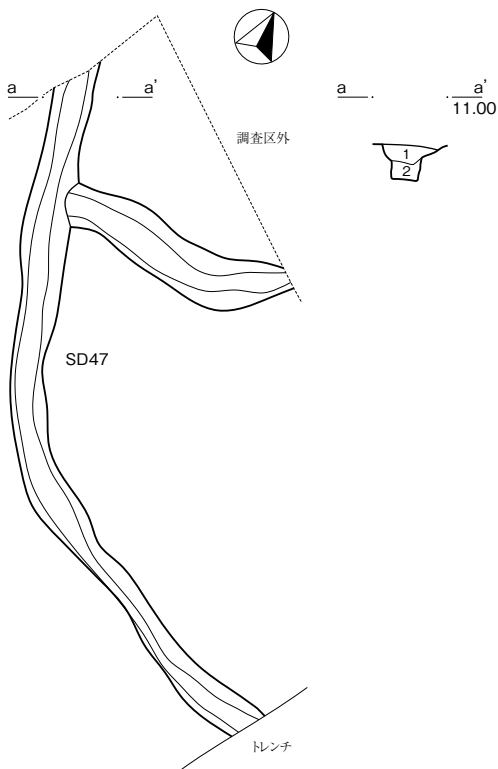
II-10 図 SK36・SD38・SD39・SB40・SK56



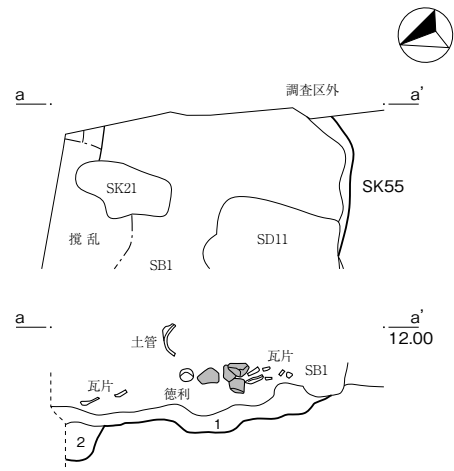
SK43  
1 茶褐色土 (黒色土主体、ローム、焼土含む、締りあり、粘性あり)



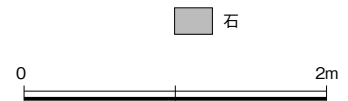
SE45  
1 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含む、締りあり、粘性あり)



SD47  
1 赤色土 (焼土主体、炭化物含む、締りなし、粘性なし)  
2 灰褐色土 (灰色粘土主体、締りあり、粘性あり)



SK55  
1 暗褐色土 (黒色土主体、締りあり、粘性あり)  
2 黄褐色土 (ローム土主体、締りあり、粘性あり)



II-11 図 SK43・SE45・SD47・SK55

第Ⅱ章 遺構と遺物

遺構NO.	面	遺構性格	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
SB1	A	石垣	長方形	長方形	(5.0)	1.15	0.45
SX2	A	不明	凸形	台形、溝部分は西側に傾斜	7.0	4.1	0.5
SK5		土坑	方形	台形	1.56	(1.4)	(1.3)
SK6	A	土坑	不整形	台形	15.3	(7.8)	2.63
SB8-1・2	A	石組			(4.4)	(3.5)	0.2
SK9	B	土坑	不整形	台形	2.3	1.9	0.44
SB10	B	礎石			(2.0)	1.25	0.35
SD11	C	溝	長方形	長方形	(4.3)	0.86	1.14
SP12	B	小穴	不整形	台形	0.19	0.22	0.24
SP13	B	小穴	不整形	台形	0.6	0.2	0.29
SU14	B	地下室	隅丸方形	凸形	1.27	(1.2)	(1.3)
SK15	B	不明	不整形	方形	2.0	(1.05)	1.9
SK16	B	土坑	不整形	台形	0.72	0.34	0.3
SK17	B	土坑	不整形	不整形	0.76	0.4	0.14
SK19	B	土坑	不整形	台形	0.5	0.32	0.32
SK20	B	土坑	不整形	台形	0.42	(0.18)	0.36
SK21	B	土坑	不整形		0.64	0.38	0.6
SK22	C	土坑	不整形	レンズ状	1.93	-	0.5
SK26	C	土坑	隅丸長方形	長方形	0.87	0.56	0.55
SK28	C	土坑	不整形	台形	0.56	0.37	0.06
SK29	C	土坑	不整形	逆凹形	0.68	0.5	0.56
SB30	C	礎石	不整形	長方形	1.0	0.6	0.34
SK32	C	土坑	長方形	台形	-	1.08	0.2
SK33	C	土坑	円形	台形	0.42	0.37	0.4
SP34	C	小穴	不整形	長方形	0.24	0.2	0.47
SK36	D	土坑	方形	方形	0.72	(0.7)	0.71
SD38	C	溝状遺構	長方形	レンズ状	(3.07)	0.86	0.55
SD39	C～D	溝状遺構	長方形		(4.25)	(1.25)	(0.4)
SB40	D	礎石	隅丸長形	逆凸形	0.59	0.5	0.77
SK41	B	土坑	不整形		(2.4)	(0.5)	
SK43	D	土坑	不整形	長方形	(2.25)	2.15	1.07
SK44	E	土坑	不整形		2.3	1.0	
SE45	C	井戸	円形		1.4	1.1	(0.75)
SK46	D	土坑	不整形		1.3	0.8	
SD47	D	溝状遺構		逆凸形	(4.4)	0.38	0.26
SK48	D	土坑	不整形	方形	1.3		
SK51	D	土坑			(6.4)	(5.4)	1.2
SK52	D	土坑			5.3	2.8	
SK54	C	基礎			0.65	0.6	
SK55	C	土坑	不整形		(1.7)	(0.9)	(1.5)
SK56	E	土坑		方形	(3.5)	(0.25)	1.1

( ) の計測値は残存部の値

Ⅱ-1 表

## 第2節 出土した遺物

### 出土遺物の概要

医学部附属病院受変電設備棟地点（YM）からはコンテナ総数、119箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」(東京大学埋蔵文化財調査室 1999)によった。瓦の分類は加藤晃・金子智 1990「第2章 御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学埋蔵文化財調査室調査報告書4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』に準拠している。人形玩具の分類基準は「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」(東京大学埋蔵文化財調査室 2012)によった。遺跡における数量分析は様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（ここでは推定個体数100個体以上を対象とした）を必要とする。本地点においては、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構はSK6の1遺構のみであった。

#### SB1（遺構Ⅱ-4・5図、遺物Ⅱ-12図）

1～3は磁器。1は瀬戸・美濃系端反形碗JC-1-dに分類される。大振り。外面、見込み、内面口縁部に文様。2は肥前系皿で高台断面がU字状で輪花に成形。JB-2-qに分類される。焼成が悪く発色も不鮮明。3は円盤状製品。皿の破片の周辺を打ち欠いて、おはじき状に2次加工している。厚さは1～0.7cm。東京大学構内遺跡山上会館・御殿下記念館地点などで出土しているが、1箇所からまとまって出土しておらず、用途は不明。JB-4008-Aに分類される。4は銭。「寛永通宝」。新寛永。5は煙管の雁首。火皿は欠損している。継ぎ目の蠟付けは左側である。全面に毛彫りで唐草文が施されている。内側に羅字の一部が残存している。6は砥石。粗砥。粘板岩。

#### SK5（第Ⅱ-6図、遺物Ⅱ-12～14図）

17世紀中葉から後葉の遺物である。

1～5は磁器である。1は高台断面がシャープなU字状の染付皿でJB-2-eに分類される。呉須摺絵。高台内にカナ削り痕が残る。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎのやや透明な青磁皿で底部無釉。JB-2-kに分類される。蛇ノ目釉剥ぎの部分は細かい砂粒が付着している。3は鉢でJB-5に分類される。上絵付け。幅広高台。見込みに模様あり。4は染付の丸碗形坏でJB-6-aに分類される。全体に二次焼成を受けて釉が発泡している。5はミニチュアの碗でJB-2001-Wに分類される。白磁、丸碗形。高台内無釉。6～18は陶器である。6～11は肥前系陶器である。6、7は大振りの灰釉丸碗でTB-1-aに分類される。呉器手碗。6の胎土は黄白色で、貫入はあまりみられない。7は貫入が多く入り、6よりやや茶色味があった胎土である。6と7では6の方がやや古手の様相を示している。8は外面に主文様がくる碗でTB-1-bに分類される。文様部はほとんどが欠損している。京焼風陶器。9は青緑釉丸碗で、TB-1-iに分類される。内野山窯製品。底部無釉。内面に付着物あり。付着物の表面の錆を一部除去したところ淡赤銅色の金属が検出された。おそらく銅合金の坩堝として使用されたのであろう。陶磁器の釉薬が溶けていないため、あまり高温では使用されていないのであろう。10、11は見込み蛇ノ目釉剥ぎの青緑釉皿でTB-2-aに分類される。内野山窯製品。内面青緑釉。外面透明釉。12～18は瀬戸・美濃系陶器。

12は灰釉丸皿、目痕3箇所あり。TC-2-aに分類される。13は見込み輪弁げの灰釉皿、TC-2-mに分類される。小振り。底部無釉。14は外面にしのごのある菊皿。黄瀬戸釉。TC-2-kに分類される。16は灰釉の輪高台型皿でTC-2-iに分類される。15は播鉢。TC-29に分類される。口縁部には明瞭な稜を有す。播目は13条1単位で施される。底裏には右回転糸切痕が見られる。17は鉄釉の香炉・火入れでTC-9-bに分類される。2脚残存。18は壺・甕でTC-15に分類される。鉄釉。二次焼成を受けている。口唇部に敲打痕あり。

19～24は土製品。19～22は皿である。19～21は底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。口縁部にはススが付着する。19、20は胎土は鈍い橙色を呈す。内面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。江戸式かわらけと思われる。21はそれらよりやや白味がかっている。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はやや内傾する。22は底部が平滑な磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。胎土は橙白色、底部は部分的に黒変している。23は丸底の焙烙でDZ-47-aに分類される。体部はほぼ垂直に立ち上がる。団子状の内耳が2個残存しており、その周囲はナデ調整される。底裏は縮緬状を呈する。24はドーム形で無印の塩壺の蓋。DZ-00-aに分類される。

25は軒平瓦である。左半分を欠損していることから、左棧の軒棧瓦である可能性もある。軒平部は「江戸式」のうちI Aaに分類される。色調は灰色を呈する。26は銭である。表「寛永通宝」。背「元」。小字背元銭。27は金属滓である。9と関連する物か。28は火打ち石。脈石英。半透明乳白色。29は骨角製品。鹿角主幹。長さ1.3cm。幅2.4cm。内側に段を持つ。その部分に蓋が付けられていたのではないか。内側はあまり丁寧にくり抜かれてはおらず、断面形は楕円形である。

#### SK6 (遺構Ⅱ-7図、遺物Ⅱ-15～30図)

かなり幅があるが19世紀初頭に比定されているA層を切っており、東大編年Ⅷ期を中心とした遺物群で、明治期に入る直前までの資料であろう。

磁器 (1～53) 1は染付小丸碗。JB-1-jに分類される。宝づくし文。見込み文様あり。2、3は端反碗で、JB-1-nに分類される。中法量。4～10は端反碗で、JC-1-dに分類される。中法量のものから小法量のものまで出土している。4～6は中法量。見込み、口縁部内面に文様あり。7は内外面に同様の梅花文様を持つ。3、6のような空間を線書きで埋めるような文様構成を持つものは東大編年Ⅷc期以降に多く見られる。5、8、9は釉が厚く掛かり、気泡がみられる。10は篆書文。口唇部に口銹。見込み文様あり。11は丸碗でJC-1-aに分類される。小振り、高台は「ハ」の字状に広がっている。内面口縁部に帯文様。12、14は高台から直線的に開く薄手の碗でJB-1-pに分類される。12は見込み、内面口縁部に文様が施されている。13は丸碗でJC-1-aに分類される。白磁。15は腰が張り、体部が直立する小振りの碗でJB-1-oに分類される。湯呑碗。幅広高台。焼継ぎの痕がある。16は腰が張り、体部が直立する小振りの碗でJC-1-eに分類される。湯呑碗。高台は「ハ」の字状に広がっており、高台高が高く高台内も深く抉り込まれている。17は見込みには獣文の木型打ち込みの後にダミが施されている。端反碗でJC-1-dに分類される。幅広高台。口唇部口銹。18は木型打ち込み寿文坏でJC-6-eに分類される。白磁。口唇部口銹。19、22は丸碗形坏でJC-6-aに分類される。20、21は端反型の坏でJC-6-bに分類される。19～22は細い線で繊細な文様が描かれている。胎土はややガラス質で、粒子は一般的に瀬戸・美濃系といわれているものより細かい。また呉須の色も一般的に瀬戸・美濃系に多様されるものよりやや淡い。いわゆる関西系と称される一群である。坏として分類したがおそらく煎茶碗として使われたものであろう。19は高台が高く釉が厚めに掛かっておりやや青みがかって



る。20～22は銘あり。21、22は高台脇に文様が入る。23、24は丸碗形坏でJB-6-aに分類される。24は器高が低い。25は端反形の坏でJC-6-bに分類される。口唇部口銹。高台暈付が非常に薄く、接地面が小さい。26～33は皿。26は厚手で作りが粗雑である。JB-2-gに分類される。呉須の発色が悪い。崩れた渦福の銘あり。27は高台断面がシャープな「U」字状。JB-2-eに分類される。薄手。28は蛇ノ目高台で高台高が高いJB-2-iに分類される。見込み全面に一枚絵。墨書あり。口唇部口銹。29は高台断面が「U」字状で、輪花に成形、見込み全面に一枚絵。JB-2-qに分類される。口唇部口銹。30は見込み蛇ノ目釉はぎで高台径が大きく、梅花繋ぎ文が多いJB-2-mに分類される。厚手で作りが粗雑である。32、33は上絵染付の扇形大皿。JB-3に分類される。金、赤、茶。型打ち成形。口唇部口銹。おそらく、同一個体であろう。全面に山水文。高台内にはハリ痕が3箇所に見られる。また、釘書で「内」の文字。焼継ぎの跡が残る。36は染付大皿。志田皿でJB-3-eに分類される。高台内に釘書で「松田」。料理屋名か。31、34、35は瀬戸・美濃系の皿。31は輪高台でJC-2-bに分類される。34は陽刻方形型皿。JC-2-eに分類される。高台方形。見込みは馬。35は木型打ち込みの寿文皿。JC-2-dに分類される。白磁。37、38は鉢。37は高台断面三角形でJB-5-fに分類される。高台内に銘「大明成化年製」。口縁部内外、見込み、高台脇2重圏線。38は高台断面がシャープな「U」字状を呈する鉢でJB-5-bに分類される。口縁は輪花に成形されている。39～41は猪口。39は底部蛇ノ目凹形高台でJB-7-aに分類される。内面口縁四方襷文。焼継ぎの跡が残る。40、41は底部輪高台でJB-7-bに分類される。41は底部銘あり。「大明成化年製」。蛸唐草文。42は脚部の抉りが浅く、暈付外周面取りのある仏飯器。JB-8-cに分類される。蛸唐草文。43は御神酒德利鶴首形で、JB-11-bに分類される。蛸唐草文。44は御神酒德利鶴首形でJC-11-bに分類される。高台はハの字状に開いている。45～47は丸碗形の蓋物で、JB-13-aに分類される。47は二次焼成を受けている。48、49は染付植木鉢。JC-21に分類される。底部中央に穴あり。48は3足。49暈付にはアーチ状の浅い削り込みが3箇所にある。50は端反碗形の蓋。JC-00-bに分類される。銘「□明□製」。51は内面に刻印あり。52は蓋物の蓋。53は淡路系木型打ち込みの皿。JP-2に分類される。緑釉。見込み龍文。54はJB-1100-Hfに分類される。人形。頭部欠損。手捻り。白磁、頭部付近には鉄釉、緑釉が掛けられている。底部から背中に掛けて孔が穿たれている。灯芯押えと言われている。

陶器(55～124) 55は植木鉢でTC-21に分類される。暈付にはアーチ状の浅い削り込みが2箇所にある。底部に墨書あり。56～64は碗である。56、57は灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。58は腰が張り二段の段を有する碗、渦巻き高台。灰釉鉄釉流し。TC-1-fに分類される。59は漆黒釉長石釉散らし。拳骨茶碗。TC-1-pに分類される。暈付に刻印あり。60は刷毛目の碗。TC-1-sに分類される。内外面共に打刷毛目。高台脇は削り込まれている。見込みには釉だまりができており、外面の釉も部分的に薄くなって斑である。61は杉形碗。鉄で若杉文。小杉茶碗。TD-1-dに分類される。若杉文は崩れ線のようにになっている。高台脇面取り。小振り。62は体部中央に凹みがある灰釉の碗。TD-1-kに分類される。63は白土染付碗でTZ-1に分類される。64は萩系藁灰釉開口碗でTH-1-aに分類される。長門市深川窯で焼かれた。大法量のものから次第に小法量になる。64は小法量に分類される。65～71は皿。65は青緑釉輪剥げ皿。内野山窯。TB-2-aに分類される。66は灰釉摺絵皿。御深井。TC-2-eに分類される。67は柿釉の灯明皿で小振り、TC-2-oに分類される。見込みに溶着痕が残る。68は方形の型皿。円錐状の足が3足付けられている。TC-2に分類される。胎土は淡褐色。二次焼成を受け表面がざらついている。69、70は灯明皿。69は見込み櫛目無し、3箇所にピン痕あり、TD-2-bに分類される。表、裏面の3分1にスス痕が残る。裏面に溶着痕有り。70は見込みに3本の櫛目あり、1箇所にピン痕ありTD-2-aに分類される。71は石皿。幅広高台。鉄、呉須による絵付け。TC-2-fに

分類される。底部に墨書あり。72、73は瓶である。72は爛徳利で、TZ-4に分類される。器壁は薄く、焼締められている。底部に墨書あり。73は瓢形の瓶、TZ-10に分類される。胎土は粒子は粗いが堅く焼締められている。白色粒子混入。底部無釉。内面釉。底部には赤で文字、記号が書かれている。二次焼成を受けている。74～96は徳利である。74～90は二合半灰釉徳利。肩が張っている。折り返し口縁。つけ掛け。TC-10-cに分類される。胴部に釘書あり。74～79は釘書「一△」。80は底部墨書「一△」。81～85は釘書「久○」。86は釘書「○福」。87は底部墨書「○福」。88は底部墨書「八長」。89は墨書で三鱗文。底部脇に「△」。90は墨書で「△半」91～93は五合徳利。釘書あり。91「久○」。92「八叶」。93「イセヤ」。94は一升徳利。釘書あり。「一△」。95、96は柿釉徳利。胴部に凹みを付けられている。TC-10-gに分類される。96は胴部上端を打ち欠いて二次利用している。97は柿釉。底部及び器面下端露胎、平縁。TC-15-aに分類される。赤津半胴甕。胎土に鉄分の黒色粒を多く含む。底部二次穿孔。一般的に植木鉢として使用される。98は灰釉植木鉢。TC-21に分類される。畳付にはアーチ状の浅い削り込みがある。99は急須。TZ-16に分類される。把手の裏に刻印「常楽」。胎土は暗灰色。胴部には横方向に浅い溝状の模様が付けられている。無釉。茶こし穴は3箇が穿たれている。100、101は灰釉餌入れ。TC-30に分類される。底部無釉。100は底部脇に面取りされている。102は片口部は欠損しているが片口鉢であろう。胴部は「ハ」の字状に開く。TC-23-cに分類される。103、104は土瓶。103は三彩土瓶 TZ-34-cに分類される。鉄絵、色絵（白、緑、青、黄）。茶こしには2箇小穴が穿たれている。内面も施釉。104は灰釉土瓶、TZ-34-gに分類される。茶こしには4箇小穴が穿たれている。内面も施釉。105は灰釉行平。TZ-42-aに分類される。把手に陽刻文。106は灯明受け皿。脚無し。灰釉。TD-40-bに分類される。受けの切り込み部分にスス附着。107は灯明受け皿。脚無し。錆釉。TC-40-cに分類される。108、109は播鉢。TL-29に分類される。口縁部は縁帯状を呈す。108は胎土が橙色、109は赤褐色である。白色粒子が少量混入。播目は8条1単位で施される。見込みの播目は三角パターンである。108は胴部が直線的であるが109は胴部下半が窄まる。110は油徳利でTC-41に分類される。鉄釉。油が垂れないよう受けが付いている。111～123は蓋。111、112は糸目土瓶の蓋。刻印あり。隅丸長方形枠の中に「丸傳」。TZ-00-dに分類される。112は墨書あり。「安政四(1857)年 山瀬所持 四月得之」。113は白土染付土瓶の蓋。刻印「道八」。TD-00に分類される。橋状の摘み。蓋の裏には鉄が塗られている。胎土は白黄褐色でざっくりとしている。「道八」の銘が書かれた土瓶などが多く出土しているが、ほとんどが類似品で生産地不明とされている。この蓋には丁寧な刻印が押され、橋状の摘み部にも趣が感じられ、他の量産品とは異なるため、京都・信楽系とした。114、115は青土瓶の蓋。青緑釉。TZ-00-aに分類される。116は鉄釉土瓶の蓋。TZ-00-eに分類される。薩摩焼か。117、118はトビガンナ。鍋蓋。TZ-00-lに分類される。摘みの形態が異なる。胎土は黄褐色で白色粒子混入。117にはイッチン掛けで模様が付けられている。内面鉄釉。118は内面灰釉。119は鮫釉土瓶の蓋でTZ-00-fに分類される。内面に「天保三(1832)年 吉野 三月得之」の墨書あり。120は灰釉土瓶の蓋 TZ-00-gに分類される。121は鉄釉土瓶の蓋。TZ-00に分類される。122は急須の蓋。TZ-00-sに分類される。犬の摘みが貼り付けられている。123は方形の型作りの蓋に鳥のような摘みが貼り付けられている。裏面には粘土を型に押しつけたときの指の跡が僅かに残る。胎土は淡灰色。TZ-00に分類される。

土器(124～146) 124～126は皿。124、125は底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。内面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。江戸式かわらけと思われる。124の胎土は黄褐色。125の胎土は橙色。126は透明釉が掛けられている。DZ-2-hに分類される。ススが僅かに附着。127は鉢。DZ-5に分類される。口縁部が僅かに内側に屈

曲して立ち上がる。胎土は黄褐色。128、129は植木鉢。DZ-21-aに分類される。胎土は淡橙色。129は口縁部が「く」の字に屈曲する。130、131は油受け皿。130は透明釉が掛けられている。DZ-40-bに分類される。受け部分が皿部より僅かに低い。131は無釉。脚無し。DZ-40-dに分類される。132は行平の把手。DZ-42に分類される。軟質施釉陶。鉄釉。裏面に「楽山」の刻印。133はひょうそく。透明釉。脚無し。DZ-44-bに分類される。134は瓦燈の下部分。DZ-45に分類される。135～139は塩壺である。135は輪積成形。一重椀。刻印「天下一堺ミなと籐左衛門」。DZ-51-bに分類される。136は輪積成形。刻印「天下一御壺塩師堺見なと伊織」。DZ-51-dに分類される。137は板作り成形。大椀。「泉州麻生」。DZ-51-iに分類される。138、139はロクロ成形。筒形。無印。DZ-51-wに分類される。138は口唇部がやや内側に傾く。胴部はまっすぐに底部に向かう。139は胴部からやや丸み帯びて底部に向かう。140はミニチュアの鉢でDD-2003-Wに分類される。高台は小さく貼付。見込みに花の模様。胎土は淡黄色で僅かに釉が残る。141、142は碁石状土製品。DQ-4004-Hに分類される。胎土は橙色で、江戸在地と思われる。成形時の指紋が残る。143は燭台。薄形扁平。DZ-52-bに分類される。中心部に金属が残存。144～146は塩壺の蓋。144は凹型、無印。DZ-00-cに分類される。146はDZ-00-dに分類される。断面逆台形、無印。147は鞆の羽口。両端共に欠損。

瓦（148～162）種類は多岐に及び、屋根全体を覆う基本的な種類は全て確認される。また色調は表面が黒灰色、胎土が灰色のものが主体となるが、褐色になっているもの、中には全体は黒灰色を呈しながら一部分のみ褐色のものも見られる。被熱によって変色したものと推察される。なお発掘時に軒部を持つ資料のみが抽出されているため、筒部まで含め全形が確認できる完形資料はない。軒丸瓦は瓦当紋様から大きく二種類に分類される。149は梅鉢紋の瓦当紋様を持つ軒丸瓦である。筒部を欠損している。148は16個の連珠の巡る巴紋の瓦当紋様を持つ軒丸瓦である。筒部は一部残存しており、凹面には布目が確認される。軒平瓦、軒棧瓦は多く確認されているが、筒部が欠損している資料ばかりで、全長、棧部切込の深さの計測は出来なかった。軒丸部の瓦当紋様は巴紋に占められており、一部の資料には珠紋が巡る。軒平部はほとんどが「江戸式」（加藤1989）に分類される。但し詳細に見ると極めて多様であり、軒平部だけで43種類が確認される。このうち軒棧瓦は8種、軒平瓦は1種、軒棧瓦か軒平瓦か特定できないものが34種確認された。紋様の分類は加藤氏の設定に従った（加藤1989）。150は軒平瓦である。広端部左角を大きく欠損するが、全形を類推できる資料である。紋様は「江戸式」、I Aaに分類される。151～154は軒棧瓦である。151、152は、軒丸部の紋様は8個の珠紋が巡る巴紋、軒平部の紋様は「江戸式」II Kjに分類される。151、152の範は異なる。153は、軒丸部は欠損している。軒平部の紋様は「江戸式」II Kjに分類されるが、151、152と範は異なる。154も軒丸部を欠損している。軒平部に「東海式」（金子1996）瓦当紋様を持つ資料で、出土資料のうち一点だけ確認される。表面色、胎土も他の「江戸式」とは異なっており、他地域からの持込である可能性がある。155～160は軒平瓦ないし軒棧瓦である。155は瓦当部右端を欠損する。軒平部の紋様は「江戸式」、I Bdに分類される。156は瓦当部右端を欠損する。左の周縁に「三浦屋」の刻印が押されている。軒平部の紋様は「江戸式」、II Kjに分類されるが、151、152と範は異なる。157は瓦当部右半分を欠損する。軒平部の紋様は「江戸式」だが、唐草が中心よりの一対は単線で表現され、子葉よりの一対は重線で表現される。それぞれF、Aに分類される。加藤氏の分類には無く、ここではII F-Aaと表記する。158は瓦当部左端を欠損する。軒平部の紋様は「江戸式」、III J fに分類される。159は瓦当部右端を欠損する。紋様は「江戸式」、IV Kjに分類される。160は瓦当部中央から右端までを欠損する。中心飾りを欠損しているが、他の要素から軒平部の紋様は「江戸式」に分類される。唐草はF、子葉はaに分類される。熨斗瓦は、形態は何れも大きな差がないものの、紋様は多くの種類が確認される。全

形をうかがえる資料は確認されず、子葉部や唐草部のみ残存し紋様の全形が不明な破片資料が多いが、少なくとも8種以上確認され、「江戸式」に分類される紋様のものが主体となる。なお分類は加藤氏の設定（加藤1992）に従った。161、162、163は丸瓦である。何れも、凹面側には弓状の工具を用いて粘土塊から粘土板を切り出したことを示すコビキ痕が全面に認められる。さらにコビキ痕を切って布目の圧痕が全面に認められ、その上に棒状工具を用いて押し引いた痕跡が認められる。また布目部を切って、左右両端、玉縁部裏側は平坦に整形されている。前部凹面側も調整されており、前部に近づくほど薄くなるように平坦に整形されている。屋根に葺き、玉縁部と組み合わせた際に干渉しないようにする工夫と推察される。161、162は完形に近い貴重な資料である。161は前端部を欠損しているため全長は定かではないが、残存部だけで350mmを超える大型の製品である。また筒部凸面側に「○サ」と読める刻印が押されている。同種の刻印は構内遺跡からしばしば出土しており、平瓦、軒瓦にも認められる。162は全長254mmを測り、161と比べ短い。この資料は左右両側面の端部が平坦に整形されているが、江戸近世遺跡から出土する丸瓦の側面端部は尖ったものが多く、特徴的だといえるだろう。褐色を呈しており、被熱した可能性がある。163は玉縁部の小破片である。玉縁部の後端面に刻印が押されている。こうした部位に刻印が認められる例は珍しい。刻印はやや不鮮明だが、「八庄」と判断される。凹面には布目が認められ、布目を切って後端から8mmほどの幅で面取り整形が施されている。164は平瓦である。狭端部右角を欠損しているが、ほぼ全形をうかがえる貴重な資料である。全体的に褐色を呈し、一部すすけている。また全体的にもろく、ひび割れも確認される。被熱したものと推察される。165、166、167は鬘斗瓦である。165は、加藤氏の設定のうち15類に分類される。鬘斗瓦の紋様は長方形の、おそらくは木製の型を押し付けることによって施紋されていると考えられるが、その型をずらして二度押ししてしまった資料である。子葉が欠損している。166は18類-1に分類される。中心飾り付近のみ残存しており、左半分のほとんどと右の子葉を欠損している。167は15類に分類される。中心飾り付近のみで、特に左側はほとんど残っていない。168は鬼瓦の一部と推察される資料である。破片資料であり、全形は判然としない。本調査区からは全形をうかがえる資料は出土していない。169は冠瓦である。棟の上に並べて用いられる瓦である。丸瓦状の筒部を持ち、片端の外側に帯状部を設け、隣接する冠瓦の筒部端に重ねて接合する。筒部と帯状部との接合面にはカキヤブリが施され、接合をよくしている。本遺構出土の冠瓦はこの帯状部の幅が55mm前後のもの、45mm前後のもの、37mm前後のものといった大きく3種類に分けられる。何れも完形資料がなく、全長や径にどれだけの差があるのかは不明である。169は帯状部全幅が45mmのものである。筒部は表裏面とも整形されているが、この資料は凹面側の一部に布目が確認される。筒部は丸瓦のように型作りであった可能性を示唆する。170、171は螻羽（けらば）瓦である。屋根の左右端に用いられる平瓦の一種で、袖瓦とも呼ばれる。筒部は平瓦と同じ形態を呈するが、屋根の左右端を覆う袖部が左右何れかの端に設けられる。袖部は長方形ではなく、軒先側が幅広になる。左右両方の螻羽瓦が確認される。なお螻羽瓦の左右は、棟から見下ろしたときに屋根の右側に用いられるか左側に用いられるかで識別している。袖部は左右端に接合されるのではなく、左右端の凹面に接合されている。図示した資料(170、171)は左右の違いばかりでなく、袖部の長さにも若干の違いがある。170のほうが10mmあまり長い。

金属製品(172～175) 172は煙管。吸口。吸口部欠損。173～175は鉄製品。和釘の頭巻釘である。頭巻釘は角釘の頭を平にして巻いたものである。173は3寸。174は頭部欠損。

石製品(176～183) 176～179は砥石。いずれも一部欠損。176は流紋岩。表面は使用痕が深く溝状に残る。裏面は剥離している。177は頁岩。表面には使用痕が深く溝状に残る。裏面は平滑である。178は流紋岩。横面には工具痕が強く残る。欠損部分が多い。179は頁岩(褐色・珪質)。細かい研ぎ

痕が表裏面に残る。幅 5.3cm。定型的な砥石の幅は 5cm 前後の物が多く、1 寸 5 分の幅を意識したものであろう。180 は良質な頁岩。碁石。181、182 は茶臼である。共に斑れい岩、面の径もほぼ同じで上下の物と思われる。181 は下臼。全体の約 1/2 が残存している。面の径は約 21.3cm である。挽き目はおそらく 8 分画 で 1 分画の中に 12 本と 13 本の溝が確認できた。溝は臼の周縁にまでは達していない。部分的に摩滅している。182 は上臼。全体の約 1/3 残存している。面の径は約 21.3cm である。挽き目はおそらく 8 分画 で 1 分画の中に 10 本まで溝が確認できた。溝は臼の周縁にまでは達していない。挽き手孔は菱形で深さは 4.3cm、1 箇所のみ確認できた。台座文様は、菱形が 3 重に刻まれている。上臼、下臼ともに面にはほとんどふくみが見られず、扁平である。上臼、下臼共に割れているが茶臼などを廃棄する時に意図的に破壊するとの説もあり、その可能性もある。183 は砂岩(軟質)をくり抜いて作っている。

木製品(184～187) 184 は蓋。径 9 寸。2 枚の板を 3 本の木釘で留めて、板状にしている。185 は折敷の脚。幅 4 寸。186 は栓。3 寸×2 寸。187 は径 5 寸。1 枚の板で作られている。中心部に径 3mm の孔が穿たれている。

煉瓦(188) 刻印「ホ」。焼成時に他の煉瓦を縦に並べた痕か。22.8cm × 10.8cm × 5.8cm。混入遺物。近代的煉瓦工場が稼働を始めるのは明治 22 (1889) 年で明治 38 (1905) 年に制定された東京規格に近い。また、関東大震災後の大正 14 (1925) 年 JIS 規格が制定されており、その間のものであろう。

#### SK9 (遺構Ⅱ-8 図、遺物Ⅱ-30・31 図)

遺物の量は少ないが、瀬戸・美濃系陶器五合徳利や志戸呂系陶器徳利の器形から 18 世紀前半に相当する遺物群であろう。

1～4 は志戸呂系徳利で TF-10 に分類される。1～3 などで肩で胴部は底部近くが、やや窄まる器形である。底部脇に面取りがあり、底部中央に窪みがある。1 は頸部下端に溶着痕有り。2 は胴部に「追分町」、底部に「ノ二」の墨書あり。3 は胴部に 2 箇所破片が溶着し 1 箇所には剥がされた痕が残っている。口縁部に掛けられた釉も発泡したように表面がざらついている。4 は肩部で潰れているが胴部はまっすぐに立ち上がっている。底部脇面取りが大きい。胴部、底部に墨書あり。頸部下端に溶着痕有り。1～3 は砲弾型に近い器形ではあるが、底部脇に面取りが行われており、4 のように胴部が直立して底部脇が大きく面取りされる少し前の段階であろう。5 は瀬戸・美濃系五合徳利。TC-10-d に分類される。なで肩。

#### SD11 (遺構Ⅱ-9 図、遺物Ⅱ-32 図)

1 は軒棧瓦の軒平部、あるいは軒平瓦の破片資料である。特徴的な瓦当紋様が見られる。中心飾りは頂部に切込みが入るハート形を呈し、その周りには上に三個の三角形の紋様が、下に下向きの一枚と、左右一対の先端が尖る細長い紋様が配置される。但し下向きの一枚と左向きの一枚は半分以上欠損しており、全形は不明である。類例のない珍しい紋様である。花紋の一種と推察されるが、モチーフは判然としない。中心飾りの左右には二対の唐草紋が、その外側には左右一対の子葉が配置される。唐草は「江戸式」のうち B に、使用は d に分類される。色調は赤褐色を呈し、部分的に黒く変色していることから、被熱した可能性もある。

2 は銭。「寛永通宝」。新寛永。

#### SU14 (遺構Ⅱ-9 図、遺物Ⅱ-32～38 図)

18世紀中葉に相当する遺物群である。

1～4は磁器である。1～3は染付皿。1、2は蛇ノ目凹形高台で高台高が低く、JB-2-jに分類される。底部銘は二重角枠線渦福。3は絵付け、作りが粗雑な皿で、JB-2-gに分類される。扇面文。見込みコンニャク印判五弁花。底部銘は渦福。4は底部輪高台状の猪口である。JB-7-bに分類される。白磁。

5～29は陶器である。5～13は碗である。5～7は灰釉薄掛け丸碗でTC-1-cに分類される。5は大振りの碗で6、7は小振りの碗。6は高台内に墨書「惣左」。8～12は腰が張り二段の段を有する碗で渦巻き高台。灰釉鉄釉流し。TC-1-fに分類される。10は高台内に墨書「五印」。13は刷毛目碗でTC-1-sに分類される。内外面共に打刷毛目。高台脇は削り込れている。14、15は輪高台型皿でTC-2-iに分類される。灰釉。平面形は方形。16は五合灰釉徳利でTC-10-dに分類される。釘書あり。「八十」。釘書が線書きのようになっている。

17～20は志戸呂系徳利でTF-10に分類される。やや肩が張り胴部が直立する新しい器形である。底部脇面取りが大きく、底部中央は窪んでいる。頸部に溶着痕あり、潰れて歪んでいる。胴部、底部に墨書あり。17～19の底部には「久〇」。17は胴部に3箇所、20は胴部に2箇所の墨書あり。1箇所は「坂町」か。ここで出土している志戸呂系徳利の一群には胴部が直立する新しい器形の徳利しか無い。SK9の一群には底部近くがやや窄まる器形と直立する器形が混在しており、SK14の一群の方がやや新しい様相を持つといえよう。21、22は柿釉。底部及び器面下端露胎。平縁。赤津半胴甕。TC-15-aに分類される。口唇部には胎土目が残る。胎土には鉄分の黒色粒子を多量に含む。いずれも底部に穿孔は見られない。23は笠原鉢。鉄絵。口縁部外反。TC-5-aに分類される。見込みには沈線による線書きの模様の後、鉄絵が描かれている。24は幅広高台。鉄・呉須による絵付け。石皿。TC-2-fに分類される。25は丸碗形の片口鉢。TC-23-bに分類される。内面無釉。26は油受け皿、脚無し、錆釉。TC-40-cに分類される。27はDZ-40-dに分類される。28は堺系播鉢でTL-29に分類される。胎土は赤褐色で、白色粒子が少量混入。播目は8条1単位で施される。見込みの播目はクロスパターンである。29は瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。胎土は白色である。播目は16条1単位で施される。

30～34は瓦である。色調は赤褐色を呈し、部分的に黒く変色していることから、被熱した可能性もある。30は軒棧瓦である。軒丸部は連珠の巡らない三つ巴紋である。軒平部は「江戸式」のうちIV Ffに分類される。色調は赤褐色、芯は灰色を呈する。31は軒棧瓦である。軒丸部は連珠の巡らない三つ巴紋である。軒平部は「江戸式」のうちI Faに分類される。色調は赤褐色、芯は灰色を呈する。32は平瓦の狭端部破片である。部位は判然としない。狭端面に丸に「太」の刻印が押される。33は軒丸瓦の筒部破片である。押されている刻印のみ図版を提示した。篆書で書かれていると推察される。判読はできなかった。なお刻印は凸面の瓦当部近く、右端の側面付近に押されていた。刻印の種類だけでなく、こうした部位に押される例は珍しい。色調は赤褐色を呈する。34は丸瓦の筒部破片である。部位は判然としない。凸面側に丸に「一」の刻印が押される。凹面側には前面に布目とコビキ痕が確認される。

35は砥石である。珪長岩（沼田砥・トラ砥）。片端欠損。

36は金属製品である。十能。把手と他の部分の接点もないため写真のみの参考資料とした。

#### SK15（遺構Ⅱ-9図、遺物Ⅱ-38図）

1、2は京都・信楽系陶器碗である。1はTD-1に分類される。鉄絵で笹が描かれている。胴部下半にはシノギが入る。高台脇の面取りは半分ほど見られるがあまりはつきりしない。口縁部にはへこみがみられる。高台無釉。高台内に「仁清」の刻印あり。二次焼成により、胴部上半の釉が溶けて発泡

している。2は半筒形でTD-1-iに分類される。鉄絵。胴部上半には段が5段ほど付けられている。底部欠損。3は志戸呂系徳利でTF-10に分類される。底部脇面取りがある。底部中央は窪んでいる。底部に墨書「森」。

4は土器。板作り成形「泉湊伊織」の刻印あり。DZ-51-gに分類される。

5は銭。「寛永通宝」。新寛永。銭種は広永。鋳期は元禄期。6は煙管の雁首。火皿は大きくやや腰の張る碗型である。脂返の湾曲は大きい。火皿の下に補強帯を有する。継ぎ目の蠟付けは左側である。

#### SK16（遺構Ⅱ-9 図、遺物Ⅱ-39 図）

1は肥前系陶器碗である。大振りの灰釉丸碗。呉器手。TB-1-aに分類される。

#### SD38（遺構Ⅱ-10 図、遺物Ⅱ-39 図）

1、2は陶器である。1は肥前系の大振り灰釉丸碗。呉器手。TB-1-aに分類される。2は瀬戸・美濃系灰釉皿でTC-2に分類される。口縁部に一定間隔で凹みが入る。高台内無釉。口唇部に3箇所スス付着。

3は土器である。底裏に右回転糸切り痕がある皿でDZ-2-aに分類される。胎土は灰黄色。表裏面共にスス付着。

4、5は金属製品である。4は銅製の釘。鉄製の釘の比べ堅牢性に欠けるため、飾り金具や留め金具のような使われ方をしたものであろう。長さ1寸5分。5は釘隠か。2箇所に突起が見られる。6は銭。「寛永通宝」。新寛永である。

7は石灯籠の基礎か。小孔が多くあく多孔質安山岩。平面形は方形。中央部も方形に窪んでいる。窪みは表面がきれいに成形されておらず、他のものがはまり込んでいたことがわかる。

#### SK43（遺構Ⅱ-11 図、遺物Ⅱ-39 図）

1は土器である。底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。2は石製品。砥石。頁岩。3、4は銭。「寛永通宝」。古寛永。3の銭種は明暦高寛。鋳期は明暦期。4の鋳期は寛永期。

#### SK44（遺構Ⅱ-1 図、遺物Ⅱ-40 図）

1、2は土器である。底裏に右回転糸切り痕がある皿でDZ-2-aに分類される。1は厚手で底部からの立ち上がりは急である。口縁部スス付着。2は、底部からの立ち上がりは比較的緩やかである。口縁部スス付着。

#### SD47（遺構Ⅱ-11 図、遺物Ⅱ-40 図）

1は肥前系磁器染付端反形の坏。JB-6-bに分類される。底部高台内無釉。「寿」文字文様。

#### SK56（遺構Ⅱ-10 図、遺物Ⅱ-40 図）

1は肥前系青磁染付碗で底部無釉。見込み花文。JB-1-bに分類される。東大編年Ⅱ期（1630年代～1650年代）の指標遺物の一つである。2は天目碗。TC-1-aに分類される。比較的大振りで、口縁部の立ち上がりも長い。

#### 盛土（遺構Ⅱ-3 図、遺物Ⅱ-40～50 図）

実験道具の他に「医科大学模範薬局」のガラス瓶、吸い飲みなど医療系の陶磁器、ガラス製品が出

土している。磁器ではそろいの皿や蓋物が多く見られた。盛土であるため数量分析は行わなかったが型紙刷、コバルト銅版転写、色絵銅版転写の磁器などが見られ、明治期、大正期の遺物を中心とした盛土である。

磁器（1～69） 1は幅の広い片切彫の蓮弁文を持つ青磁碗。高台断面四角。高台脇畳付を面取りしている。畳付、高台内無釉。龍泉窯系。JA4に分類される。14世紀頃。1点のみこのような年代の碗が出土している。茶陶として収集していた人がいたのかもしれない。

2、3は肥前系磁器染付碗。3は染付暦茶碗。幅広高台。内面口縁部墨弾き。4～10は飯碗。4、5は型紙刷り。6、7は銅版転写。8は色銅版転写。吹き絵。青、茶。9は色銅版転写。青、桃。「帝國萬歳」。旭日旗。日露戦争（1904～05年）に関するものであろう。10は上絵付け。子供茶碗。11～21は碗。11～13、15は端反形。14は丸碗形。11は銅版転写。腰張り端反。高台内銘「鈴山製」。12は色銅版転写。13は手描き。コバルト。14クロム青磁。高台内無釉。15は手描き。底部銘あり。16～18は筒形。16は銅版転写。17は色銅版転写。青、緑。18は色銅版転写。桃。底部銘あり。19～21は坏。19は上絵。薄手の坏。古典などでは「都鳥」と呼ばれている、「ゆりかもめ」か。20は型紙刷り。21は銅版転写。22～31は皿。22は高台断面が「U」字状、輪花に成形。見込み全面に一枚絵。JB-2-qに分類される。23は木型打ち込みのそり皿。寿文皿。JC-2-dに分類される。寿文皿にはわずかな差ではあるが器高に差があり、23は器高の低いもの。24は陽刻皿。JC-2-eに分類される。25、26は銅版転写。揃いの皿。27は型紙刷り。28はクロム青磁。型紙刷り。上絵付け。29は型皿。底部無釉。銅版転写。31はカップ&ソーサーのソーサー。32、33はそば猪口。型紙刷り。34～37は蓋物。蓋と身のセット。34、35は銅版転写。揃い。36、37は色銅版転写。青、茶。揃い。38は銚子。銅版転写。39は鉢。銅版転写。蛇ノ目凹形高台。40は丸碗形の蓋物。銅版転写。51とセット。41は段重。銅版転写。42は香炉。クロム青磁。底部墨書「御ふく」。3足。43～45は土瓶。類似の土瓶がいくつも出土している。43は茶こし穴9箇。45は「□部省」の文字が入る。おそらく「文部省」であろう。茶こし穴7箇。46は火鉢。銅版転写。底部に朱色で「八」「号」。47、48は歯磨の容器。47は花王石鹼より明治26（1893）年から発売された「鹿印煉歯磨」の卵形合子の身。底部には「鹿印煉歯磨 製造 發賣元 東京馬喰町二丁目 花王石鹼本舗 長瀬富郎」と色銅版転写されている。同様の器形で底部に「鹿印煉歯磨」と書かれていないものが農学部生命科学総合研究棟地点 SK17 遺構から出土している（東京大学埋蔵文化財調査室 2011）。48は資生堂より明治21年（1888）年から発売された容器の蓋。「□□□□□石鹼 本舗東京資生堂謹製」「SANITARY TO □ □STE FUKUHARA」「PREPARED BY SHISEIDO」「登録商標 TRADE MARK」。□は類例から「（福原衛生歯磨）石鹼」と「TO (OTH PA) STE」であろう。49、50は段重の蓋。色銅版転写。青、緑。上書きで名前が書いてある。用途は不明。49は「野中様」。50は「金子様」。51は丸碗形の蓋物の蓋。銅版転写。40の蓋。52は土瓶、急須の蓋。53～55は吸い飲み、または、水滴。54は「寿」。56、57は瓶。58は蓮華。59、60石鹼入れ。61は洗面器。62～69は理化学用磁器である。62は、高台のない乳鉢。粉碎に使用される内面は無釉で粗面に仕上げられている。底面無釉、口縁部と胴部に釉薬がかけられている。63は、乳棒の先端。乳棒は柄に釉薬がかけられ先端部分は無釉である。柄を嵌め込んで使用すると考えられる。先端部分は無釉で粗面に仕上げられている。先端部と内面を除く部分に釉薬がかけられている。64は、高台のある乳鉢。口縁部に注口がある。内面は無釉で粗面に仕上げられている。胎土は灰色で高台内外無釉、口縁部と胴部には釉薬がかけられている。内面に黒色の付着物。65は、丸底の蒸発皿。硬質。蒸発皿は、化学実験で溶液を加熱濃縮または蒸発乾固させるのに用いる浅い皿。胴部に染付で「|」の印、内面に250.7gの鉛筆書きがある。66と67は取手と注口が付いた計量容器である。



66は200ml。内面上から黒色の上絵付けで「—200」「—150」「—100」「—50」の表示がある。高台の畳付け部分は無釉である。67は、5,000ml。内面上から黒色の上絵付けで「—5000」～「—500」の表示が500刻みで書かれている。高台の畳付け部分は無釉である。68は、丸底の蒸発皿。硬質。口縁部に注口がある。内面に付着物がある。69は、実験道具の一部と考えられるが用途は不明。下端部内側は無釉であることからかぶせ蓋とも考えられる。

陶器(70～118) 70～74は碗。70・71は京都・信楽系統。70は杉形碗、鉄と呉須で若杉文。小杉茶碗、TD-1-dに分類される。71は端反形碗小振りで器面には細かい貫入。TD-1-gに分類される。72～77は瀬戸・美濃系。72はトビガンナの押型文、掛け分け。鎧茶碗。TC-1-rに分類される。73は灰釉。TC-1-cに分類される。74は体部灰釉、口縁部瑠璃釉の掛分け。TC-1-aeに分類される。75そば猪口。鉄釉で松竹梅。小振り。TC-7に分類される。76皿。柿釉。灯明皿。TC-2-oに分類される。77は油受け皿、脚無し、錆釉。TC-40-cに分類される。78、79は瓶。蕎麦徳利。78は胴部に「さらしな」「永坂」。79は胴部に「ぼたん」。78の半分の容量。80、81灰釉の香炉。TC-9-aに分類される。82～86は瀬戸・美濃系灰釉徳利。82は二合半灰釉徳利、つけ掛け。TC-10-cに分類される。釘書き。「一△」。83は五合徳利。TC-10-dに分類される。釘書き。「門」。84は五合文字徳利。屋号「○」に「伊」、店名「清水屋」。85は二合半文字徳利。住所「(下) 谷茅二」、店名「サ武芳」。下谷茅町二丁目は、明治44年に「下谷」の冠称を省略するのでそれ以前。上野池之端の旧町名。86は二合半文字徳利。住所「森川町」。森川町は本郷通りを挟んで東京大学と反対側に広がる地域の旧町名。87は甕。糠白釉二彩流掛甕。笠間焼。蛇ノ目高台。底部白化粧。益子焼には底部白化粧がない。88は京都・信楽系水滴。取っ手が付く。TD-19に分類される。小振り。吸飲みとして使われたものかもしれない。89は瀬戸・美濃系朝顔形仏花器。TC-22-bに分類される。90は脚付き、灰釉油受け皿。TD-40-aに分類される。91は土瓶。竜虎。92は急須。上絵金彩。口唇部金彩。把手には桜花の透かし彫り。93、94は灰釉の行平。95は瘦瓶。把手部欠損。96～98は湯たんぽ。96は黒釉。底部墨書。「九号」。97は笠間焼。底部に白化粧。98は灰釉。99～103インク瓶。99は「TRAD MARK」と剣の刻印。24oz。塩釉。胎土は粒子の細かい白色土。口縁断面が三角形で左右斜め下から指などで押し上げるようにして片口を作り出している。やや頸部が長く、口縁部直下に帯が一本巡らされている。底部は平底で無釉である。イギリス製か。100は胴部側面底部際に「GRAY 5 PORTOBELLO (N.B)」(下の方は潰れていて一部分しか見えないが類例からN.Bと推定できた。)の刻印。24oz。塩釉。胎土は粒子の細かい白色土。口縁断面が三角形で左右斜め下から指などで押し上げるようにして片口を作り出している。やや頸部が長く、口縁部直下に帯が一本巡らされている。底部は平底で無釉である。イギリス製。類例を探したところジンジャービールの陶器製瓶に「GRAY 6 PORTOBELLO N.B」の刻印のある物があった。PORTOBELLOはイギリスのEDINBURGHの近くにある陶器の有名な産地である。すぐ近くのNEWBIGGING,MUSSELBURGHには陶器窯があったことがわかっている。N.BはNEWBIGGINGの略の可能性が高い。番号は瓶の種類か。101、102は胴部側面底部際に「MANUFACTURED BY Z.P.MARUYA&CO TOKYO」の刻印。24oz。片口。口縁断面が「コ」の字状で、肩から頸部に掛けて強く「く」の字状に屈曲し頸部が短い。底部の釉を拭き取っている。球(丸)屋商社は、丸善の前身である。(大貫 2009) この2本は胎土や鉄釉も異なる。刻印は似ているが産地は異なるであろう。103は胴部側面底部際に「LOVATT&LOVATT NOTTS LANGLEY MILLS」の刻印。6oz。鉄釉。口縁断面が三角形で左右斜め下から指などで押し上げるようにして片口を作り出している。肩から頸部に掛けて強く「く」の字状に屈曲し頸部が短い。底部は平底で無釉である。イギリス製。LOVATT&LOVATT社。「LOVATT&LOVATT NOTTS LANGLEY MILLS」はLANGLEY MILLS

の NOTTS (Nottinghamshire) にある LOVATT&LOVATT 社の意であろう。LOVATT&LOVATT 社は、1865 年から 1982 年にイギリスにあった Langley Mill Pottery 社の 1895 年から 1930 年にかけての名称である。このインク瓶は 1895 年から 1930 年の間にこの会社で作られたものであろう。国産のインク瓶はインクの発売元の刻印が記されているが、この刻印は瓶を作った陶器メーカーの刻印と思われる。これらイギリス製の瓶は輸入されたものか、または、東京帝国大学では外国人教師を招聘しており、そのような関係で持ち込まれたものであろう。国産のインクも次々と良質なものが開発されていたが、まだまだ国産のインクよりも外国製のものの方が良質であった。

104～118 は、坩堝。出土した坩堝は工業製品である。商品名称、品番、坩堝にとって重要な耐熱温度などから分類を行わなければならないが碗形の坩堝 104～111 に該当する文書を確認できなかったことから、便宜上、3 つに分類した。碗型 1 (104～106) 胴部丸・高台あり・高台内部削りなし。碗型 2 (109・110) 腰部角張る・高台あり・高台内部削りなし。碗型 3 (111) 胴部直線・高台なし・高台内部削りなし。『日本近世窯業史』によれば、近代のガラスの坩堝には、開口坩堝、横口坩堝、ジャッパン坩堝がある。開口坩堝はズンドウ坩堝と呼ばれ、形状はコップ状である。横口坩堝はネコ坩堝と呼ばれる。この 2 種の坩堝は欧州を由来とし、ジャッパン坩堝は信楽系陶器の茶壺を由来とする坩堝で茶壺型を呈する (日本窯業協会 1914、柏書房株式会社 1991)。これら 3 種の坩堝は現在も製造されている。出土した坩堝の形状から、112～116 を「開口坩堝」と判断した。汐留遺跡の出土遺物に、同器種、類似した刻印の遺物が出土している (汐留地区遺跡調査会 1996)。汐留遺跡では、次のように刻印が報告されている。坩堝図 NO.29～坩堝蓋図 NO.32 は楕円枠内に「PATENT PLUMB CO BATTERSEA WORKS LONDON CRUCIBLE COMPANY」。坩堝図 NO.29 「BATTERSEA WORKS ROUND」・「4」。坩堝図 NO.30 「BATTERSEA WORKS ROUND」・「3」。これらの報告から、出土した開口坩堝は「LONDON」製の可能性が高い。104～108 は、胎土は白色できめが細かい。104 は胴部に赤色の上絵付けで印 (しるし)。口縁部に緑色のガラス状附着物。口縁部分、緑色のガラス状溶着物。105 は胴部に赤色の上絵付けで印 (しるし)。内面、黒色ガラス状溶着物。106 は内面、灰色のガラス状溶着物。107 は胴部に赤色の上絵付けで印 (しるし)。内面、黄色～緑色のガラス状溶着物。108 は底部一次穿孔。内面附着物なし。109 は胎土は乳白色で黒い砂粒が混入している。内面溶着物なし。110 は、胎土は灰色。内面溶着物なし。111 は胎土は白色。一部が熱によって赤く変色。高台なし。内面に黒色の溶着物。112～117 は、胎土は乳白色で黒い砂粒が混入している。112 は内面に薄黄色ガラス状溶着物。外面刻印上段「BA」下段「RO」のみ解読ができた。113 は内面に暗灰色ガラス状溶着物。114 は内面に透明緑色ガラス状溶着物。115 は内面に灰色ガラス状溶着物。外面刻印「DIMANI 9」。116 は内面に薄黄色ガラス状溶着物。117 は大型の坩堝。破片のため全体の形状は不明。外面刻印「□ TERSEA WORKS RIANGLE」。□は (BAT) TERSEA か。118 は坩堝底部。外面に溶着物。

土器 (119～124) 119 は皿。底部糸切り右回転の皿である。DZ-2-a に分類される。120、121 は油受け皿。施釉。無脚。DZ-40-b に分類される。胎土は橙色。122、123 は塩壺。122 は板作成形。「泉湊伊織」の刻印を持つ。DZ-51-g に分類される。123 はロクロ成形。筒形。無印。DZ-51-w に分類される。124 は塩壺の蓋。凹形。無印。DZ-00-c に分類される。

125～133 は金属である。125～128 は銭である。125～127 は寛永通宝。125 は新寛永。銭種は異書斜宝。126 は新寛永。銭種は勁永。鑄期は元禄期。127 は古寛永。鑄期は寛永期。128 は天保通宝。百文銭。初鑄年は天保 6 (1835) 年。鑄造は明治期まで。129 は煙管雁首。皿部欠損。130 は煙管吸い口。132 は柄。133 は留め金で他の部品に付いていたようである。

134～137 は石製品である。134 は砥石。頁岩。135 は碁石。頁岩。136 は実験道具の一部ではな

いかと思われる。流紋岩質凝灰岩。137は軽石。

138、139は骨角製品である。138はヘラ。裁縫道具で布に印を付けるために用いられる。動物の角や骨、象牙、竹、セルロイドなどで作られる。このヘラは牛馬骨の四肢骨か。139はサイコロ。鹿角か。

ガラス製品(140～150) 140は簪。円い断面形の棒状乳青色不透明ガラスに青色透明ガラスを巻き付けてその上に同色のガラス粒を貼り付けて飾りにしている。類似のものが長崎桜町遺跡から出土している(長崎市教育委員会 1999)。また、「近世ガラスの化学分析」では、江戸末の不透明ガラスはX線分析の結果、鉛をわずかに含んだカリガラスである(西田・吉田 2006)。としている。国産であろうか。141～143は薬瓶である。口縁はねじの切られていないコルク栓のタイプである。側面に目盛りは付けられていない。141、142は側面に「醫科大學模範薬局」のエンボスが付けられている。141は左右に成形の型痕が見られる。型痕は胴部から肩部までである。色調は無色透明で気泡などはほとんど見受けられない。底部中央には丸い窪みが見られる。142は色調は白。143は側面に「医科大学模範薬局」のエンボスが付けられている。色調は茶色透明。上端は切られている。141～143に見られる「医科大学」の名称は明治19(1886)年に帝國大学令により東京大学医学部が帝國大学医科大学となり、大正8(1919)年に大学令により医学部に戻っていることから、その間のものであることがわかる。144、147、148はインク瓶で卓上用の小瓶。上から見ると対角線上に成形の型痕が見られる。型痕は胴部から肩までみられ、色調は無色透明で細かい気泡がわずかに見られる。口縁はねじの切られていないコルク栓のタイプである。144は側面に「文華堂」のエンボスが付けられている。底部中央には丸い窪みが見られる。148は側面に「Z.P.M.&CO. TOKYO」のエンボスが付けられているガラス製角(2号入り)インク瓶。丸善最上インキのガラス瓶であろうか。底部中央には丸い窪みが見られる。145は左右に成形の型痕が見られる。型痕は胴部から肩部までである。色調は無色透明で気泡などはほとんど見受けられない。全体的にゆがみがみられる。149は色調は緑色透明。全面に気泡が見られる。胴部には横方向の成形痕がみられる。底部は大きく窪む。底部に「5」のエンボスが付けられている。150はビール瓶か。色調は茶色透明。肩部の形態は「なで肩」で細い首部へ続く。口縁部欠損。底部は大きく窪む。

#### A層(遺構Ⅱ-3図、遺物Ⅱ-50～52図)

瀬戸・美濃系磁器陽刻型皿が出土しており、Ⅷc期頃までの遺物群である。

1～5は磁器。1は瀬戸・美濃系端反碗でJC-1-dに分類される。2、3、5は皿。2は肥前系蛇ノ目凹形高台で高台高が高い染付皿。JB-2-iに分類される。口銹。3は瀬戸・美濃系陽刻型皿でJC-2-eに分類される。高台も方形。4は肥前系底部蛇ノ目高台状の猪口。JB-7-aに分類される。染付。見込み手描き五弁花。内面口縁部四方襷文。5は肥前系蛇ノ目凹形高台で高台高が低い染付皿でJB-2-jに分類される。底部高台内、角枠内渦福。

6～14は陶器。6～13は瀬戸・美濃系である。6は太白手の小丸碗でTC-1-abに分類される。高台内施釉。7は太白手の広東碗でTC-1-jに分類される。高台内施釉。ベトナム陶器の鉄絵印花皿のモチーフによく似ている。見込み花文。8は皿。TC-2に分類される。刷毛目皿で4辺を持ち上げて方形皿にしている。9は五合灰釉徳利。TC-10-dに分類される。2面に釘書きあり。「甲」。10は二合半灰釉徳利。つけ掛け。TC-10-cに分類される。釘書きあり。11は片口。丸碗形。TC-23-bに分類される。肩口部欠損。12は鉄釉糸目土瓶。駄知土瓶でTC-34に分類される。無釉の底部脇側面に「駄知」の刻印あり。13は火入れ・香炉。TC-9に分類される。鉄絵。墨書あり。14は急須の蓋。TZ-00。鉄釉。

15～19は土器。15はひょうそく。透明釉。脚無し。DZ-44-bに分類される。16は板作成形、「泉湊伊織」の刻印を持つ。DZ-51-d分類される。17は断面逆台形、無印、塩壺の蓋。DZ-00-dに分類される。18は基石状製品。DQ-4004-Hに分類される。19は土玉。DQ-4007-Hに分類される。玩具か。

20は棧瓦の前端部、あるいは平瓦の狭端部破片である。丸に「十」の刻印が押されている。色調は表面が黒色、芯は灰色を呈する。21は棧瓦の前端部、あるいは平瓦の狭端部破片である。「アサクサ瓦源イマト」の刻印が押されている。今戸焼であることを示すと推察される。色調は表面が黒色、芯は灰色を呈する。

22は石製品。硯。粘板岩。片側のみ打ち欠いたようになっており、硯から二次転用して道具として使ったのかもしれない。

23は金属製品。刃物の刃。鍛造。

#### B層（遺構Ⅱ-3図、遺物Ⅱ-52図）

1、4は18世紀前葉から18世紀中葉にかけて、2、3はそれよりも古い時期の遺物である。

1は肥前系磁器染付皿。絵付け・作りが粗雑な皿。JB-2-gに分類される。高台内銘あり。

2、3は瀬戸・美濃系陶器。2は壺で、TC-15に分類される。鉄釉。口唇部の釉は部分的に剥げている。

3は袴腰で鉄釉輪高台の香炉。TC-9-fに分類される。

4は土器皿でDZ-2に分類される。胎土は橙色。

#### C層（遺構Ⅱ-3図、遺物Ⅱ-53図）

17世紀後半頃の遺物であろう。

1は肥前系染付磁器。高台断面の形状が三角形で、高台径が大きい皿。JB-2-cに分類される。

2は瀬戸・美濃系陶器灰釉丸碗。TC-1-cに分類される。大振り。3は肥前系陶器。白土象眼の三島手鉢。TB-5-bに分類される。高台内の挟りが深い。

4は金属製品、煙管の吸い口。

#### D層（遺構Ⅱ-3図、遺物Ⅱ-53図）

17世紀中葉頃の遺物であろう。

1は肥前系染付磁器皿。いわゆる初期伊万里。JB-2-aに分類される。畳付には砂粒が付着している。

2は肥前系磁器。端反形環。外面全面にシノギが入る。JB-6-bに分類される。

3は瀬戸・美濃系陶器皿。灰釉丸皿。ピン痕有り。TC-2-aに分類される。

4、5は土器皿。口縁部にスス付着。胎土は橙色。4はDZ-2に分類される。5は底部糸切り痕左回転。DZ-2-bに分類される。胎土は橙色。内面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、江戸式かわらけと思われる。

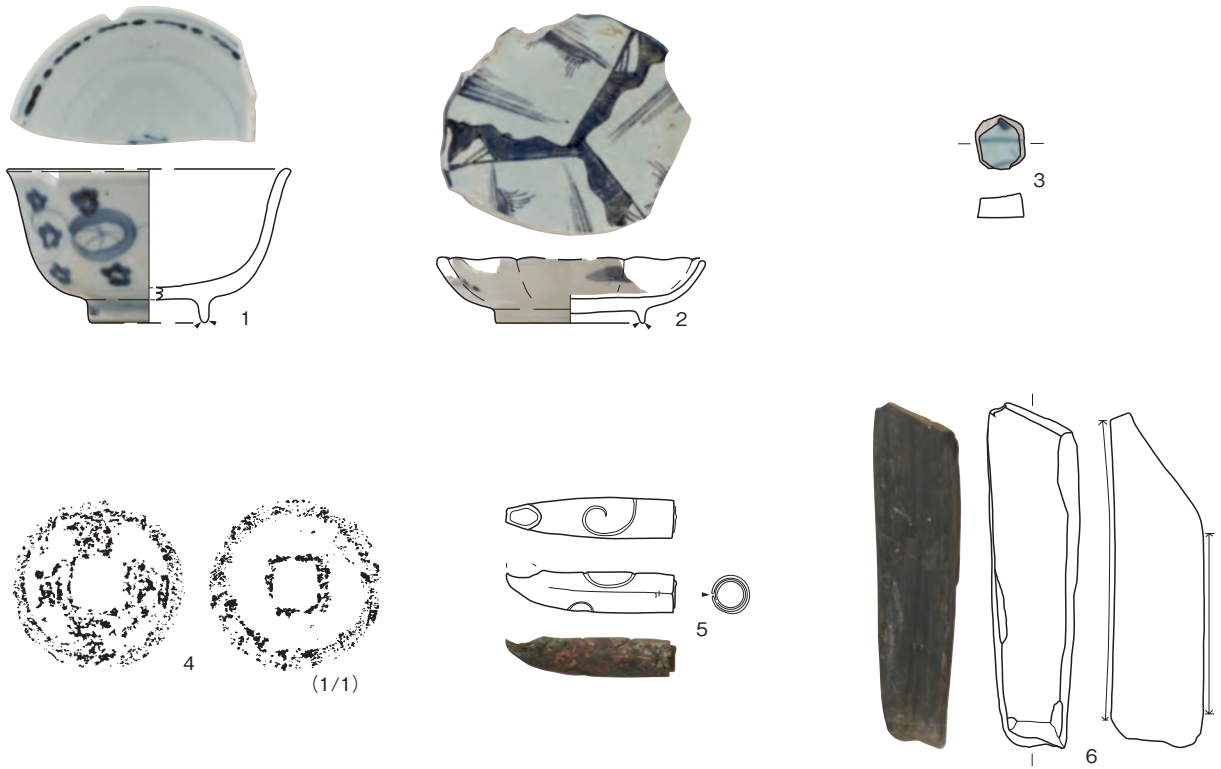
6は塼。平面三角形。

#### E層（遺構Ⅱ-3図、遺物Ⅱ-54図）

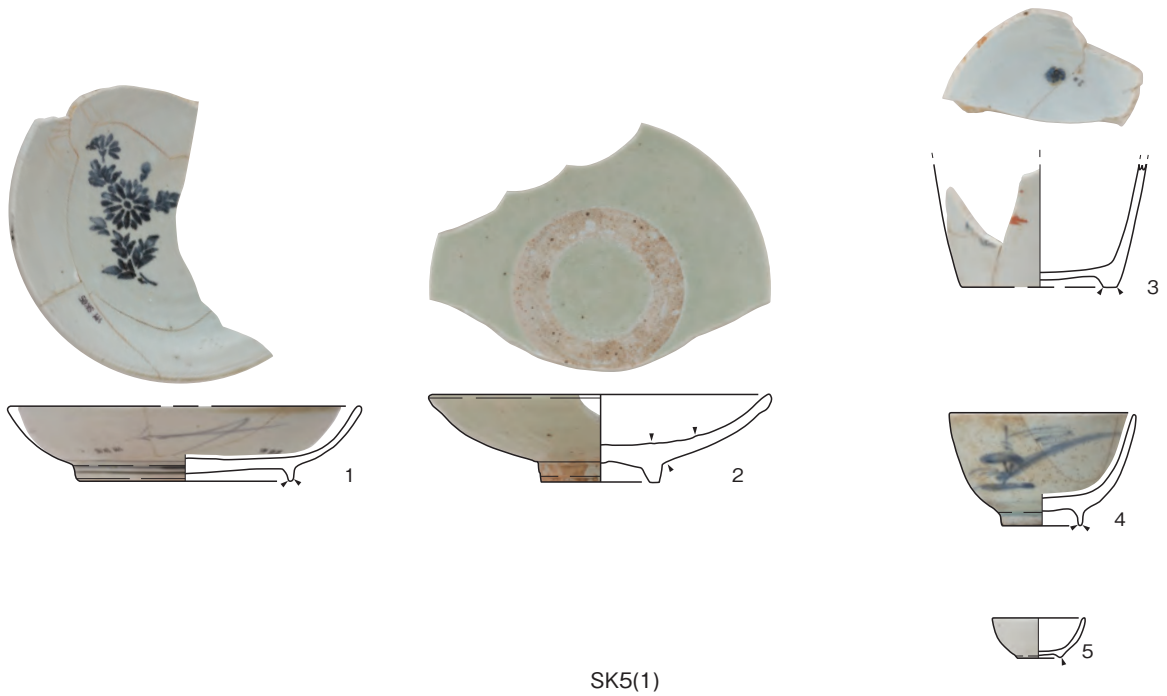
17世紀中葉頃の遺物であろう。

1～3は肥前系染付磁器。1、2は高台断面が幅広「U」字状。いわゆる初期伊万里。JB-2-aに分類される。2は底部高台内無釉。3は端反形環。JB-6-bに分類される。外面はシノギの間に「寿」字文。畳付は幅広で高台内無釉。

4は瀬戸・美濃系陶器皿。灰釉丸皿。ピン痕有り。TC-2-aに分類される。5はTC-2に分類される。目跡あり。灰釉鉄釉の掛け分け。鉄絵。6は笠原鉢。鉄絵、緑釉流し。TC-5-aに分類される。目跡あり。7は塩壺。輪積成形。二重角枠内「ミなど籐左衛門」の刻印あり。DZ-51-aに分類される。8は塩壺の蓋。DZ-00-aに分類される。



SB1



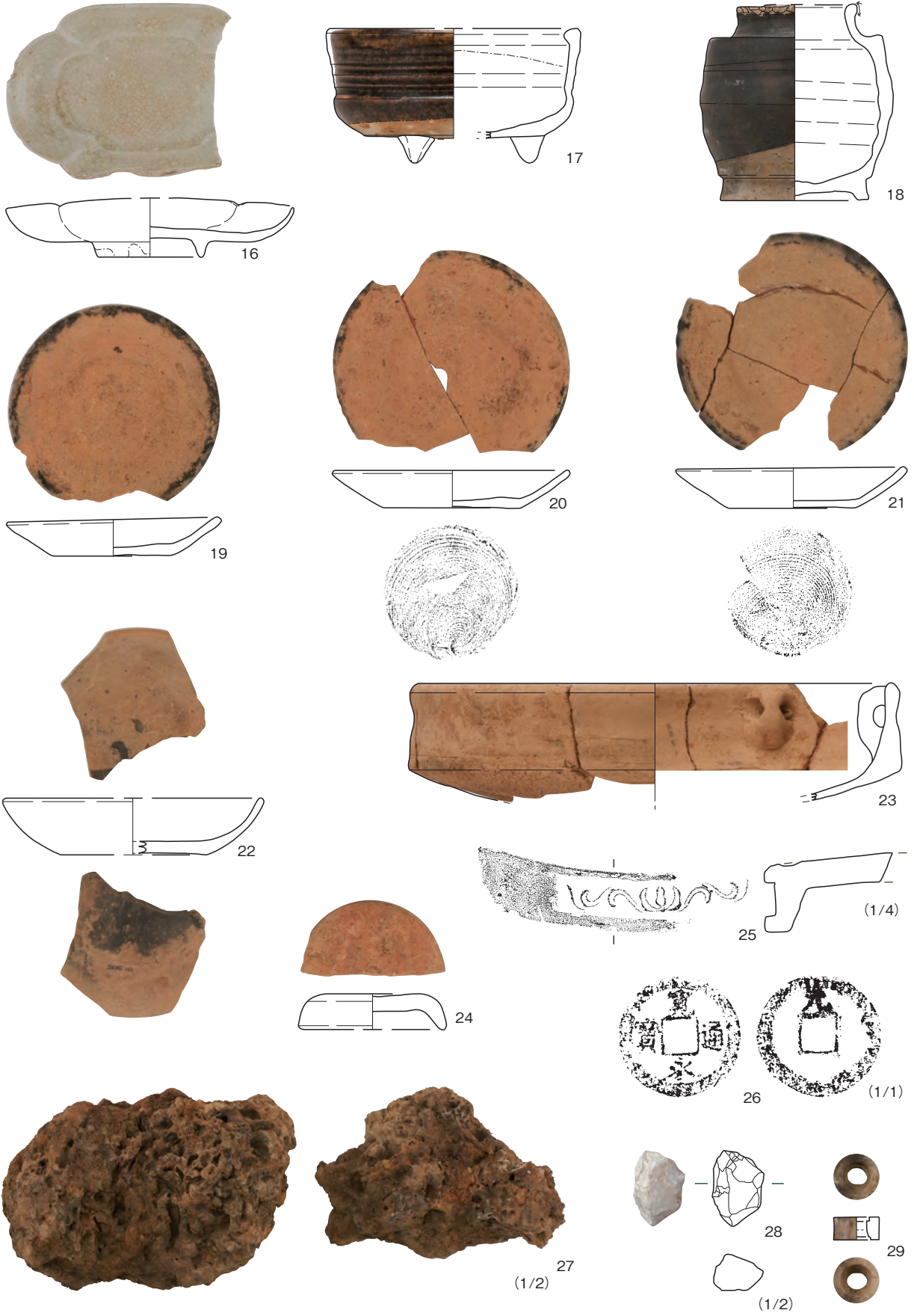
SK5(1)

II-12 図 SB1、SK5 (1) 出土遺物



II-13 図 SK5 (2) 出土遺物

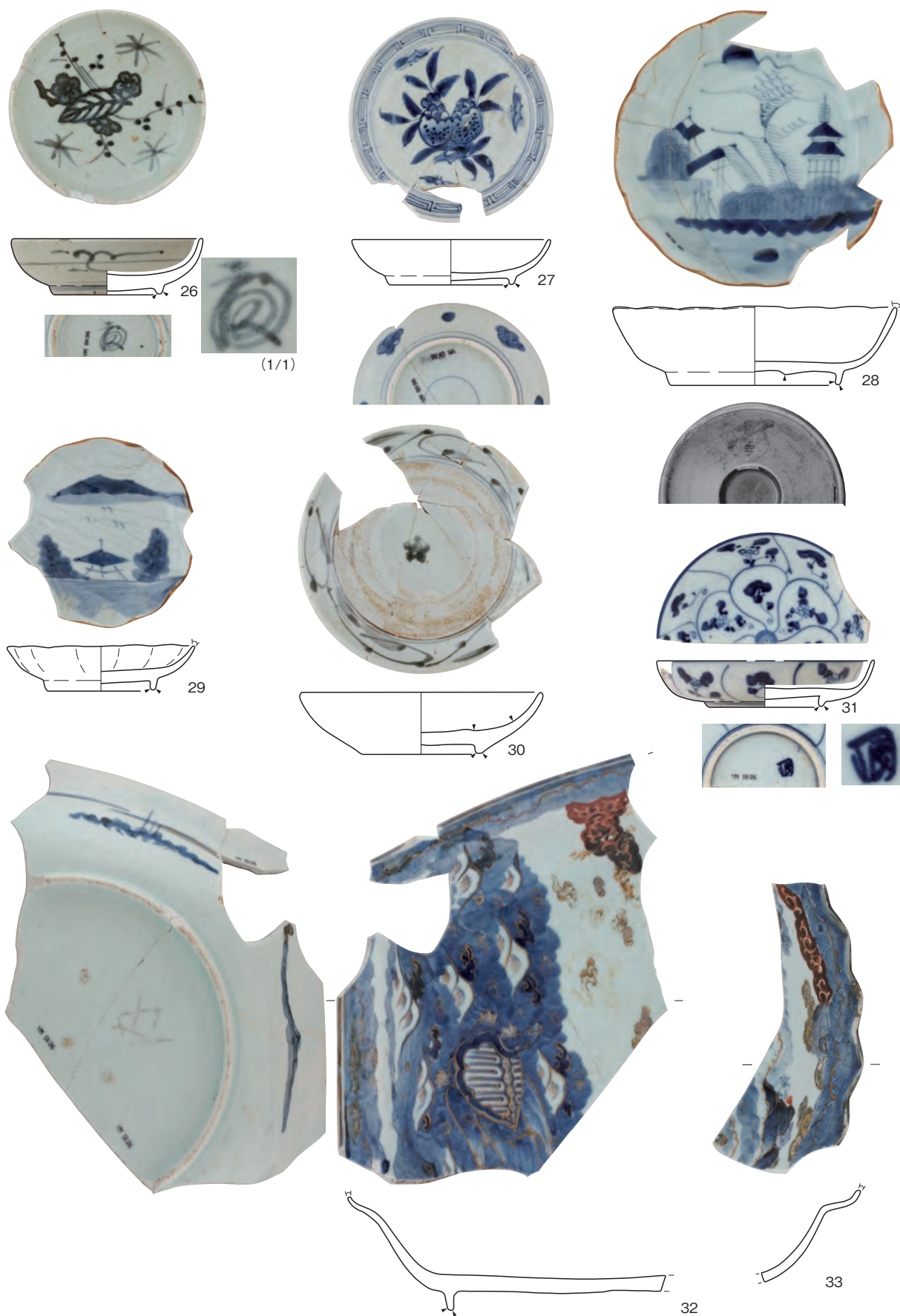




II-14 図 SK5 (3) 出土遺物







II-16 図 SK6 (2) 出土遺物



II-17 圖 SK6 (3) 出土遺物





II-18 図 SK6 (4) 出土遺物



II-19 圖 SK6 (5) 出土遺物



II-20 図 SK6 (6) 出土遺物





II-21 図 SK6 (7) 出土遺物



II-22 図 SK6 (8) 出土遺物

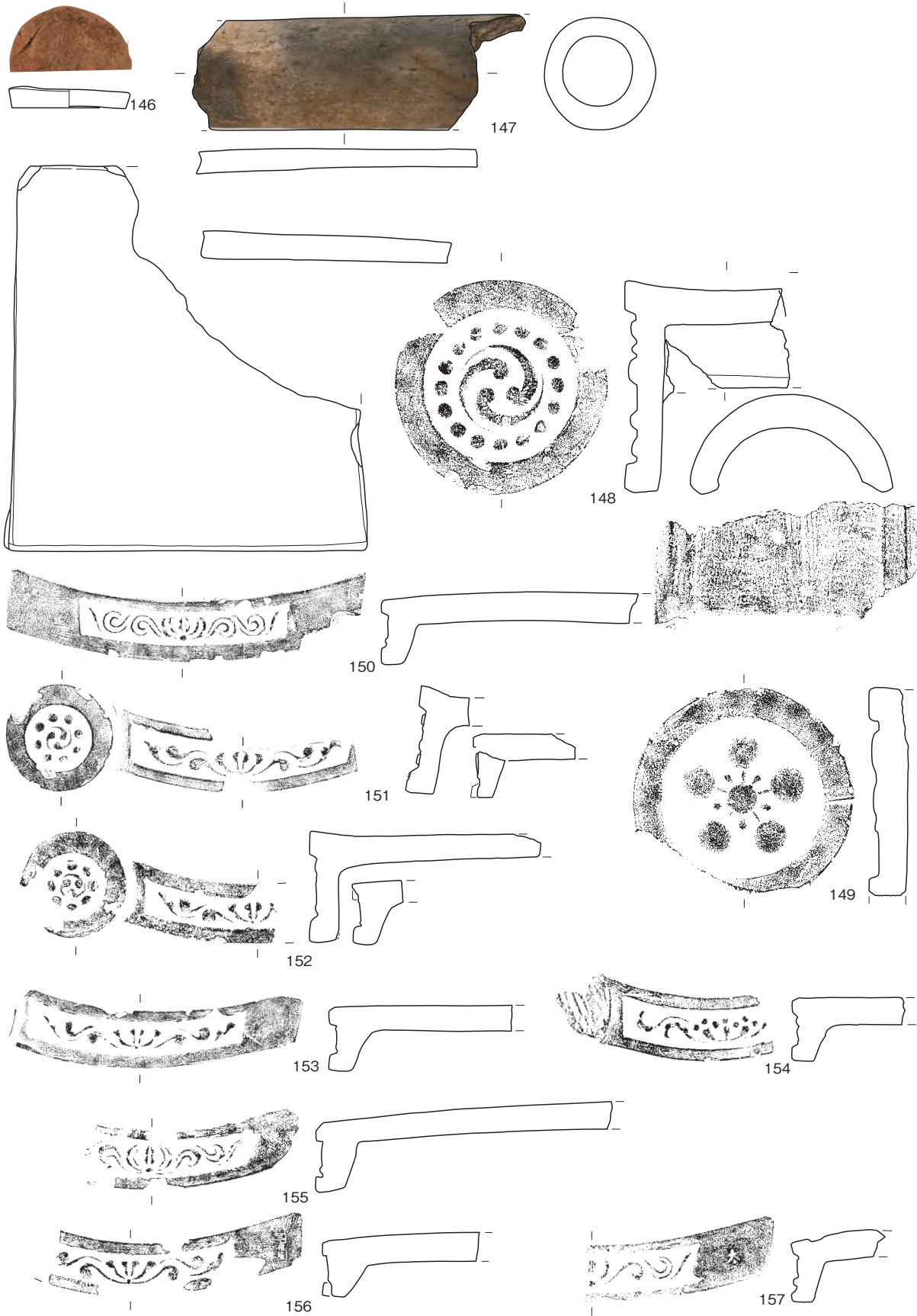




II-23 図 SK6 (9) 出土遺物

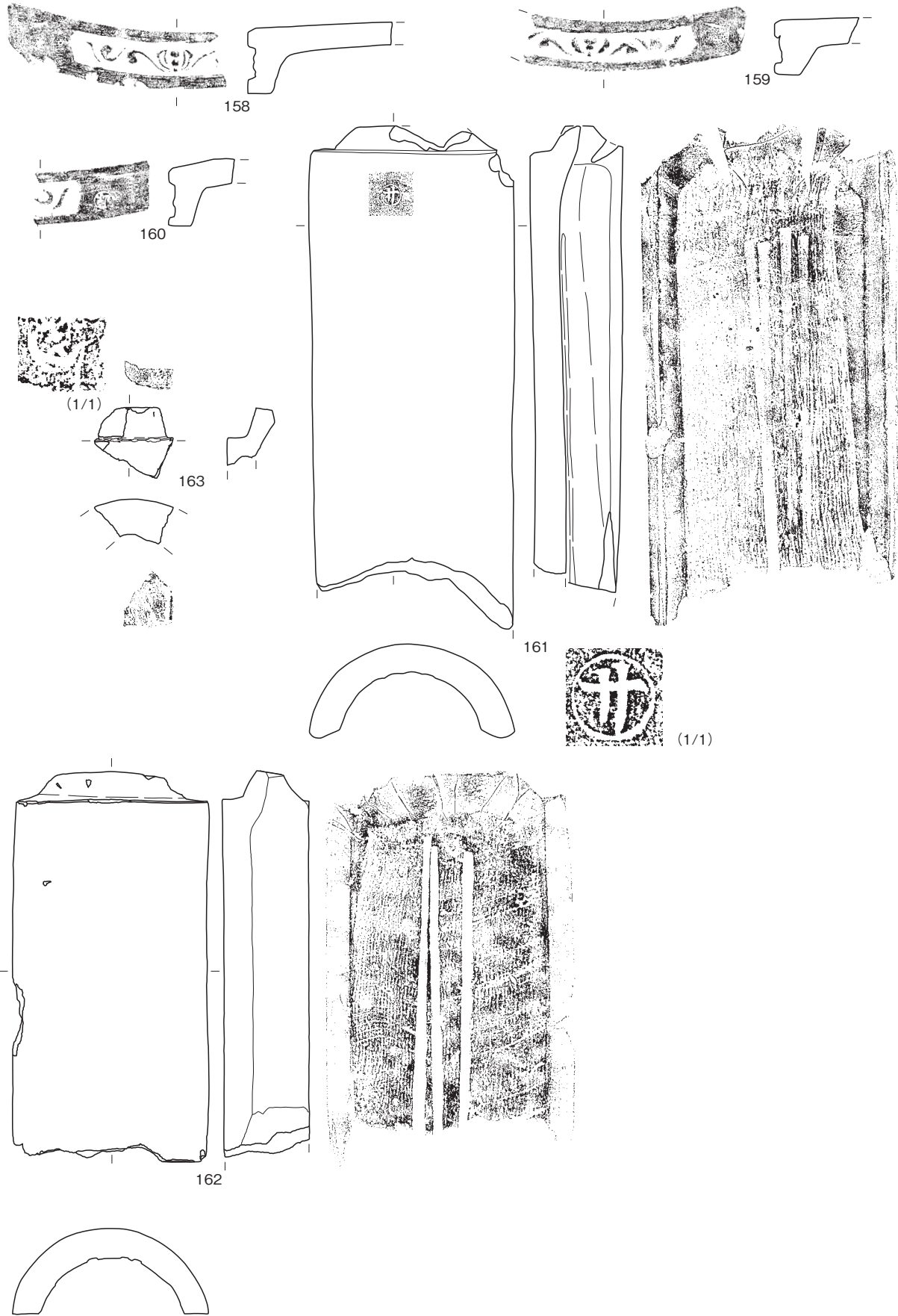


II-24 図 SK6 (10) 出土遺物

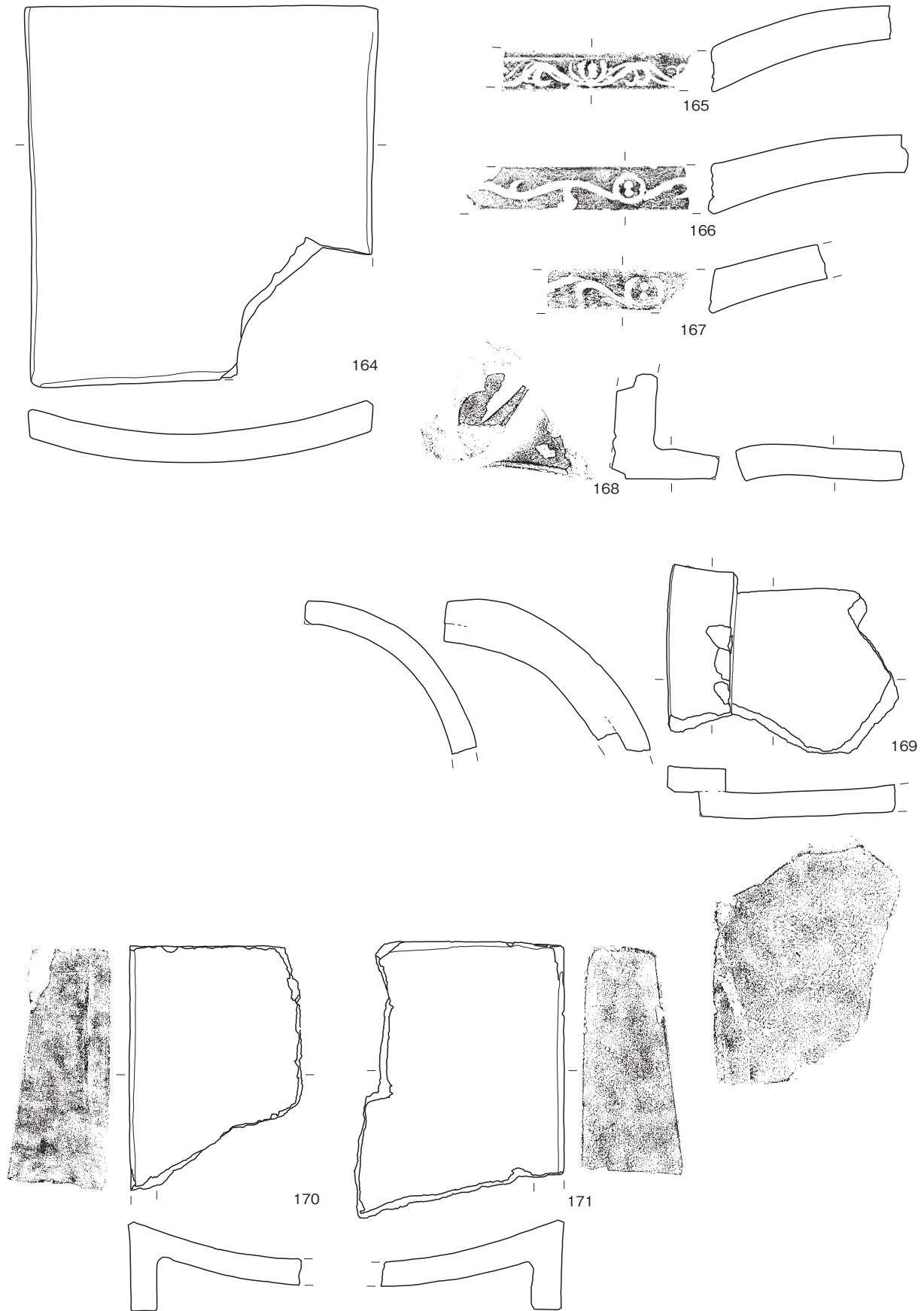


II-25 図 SK6 (11) 出土遺物

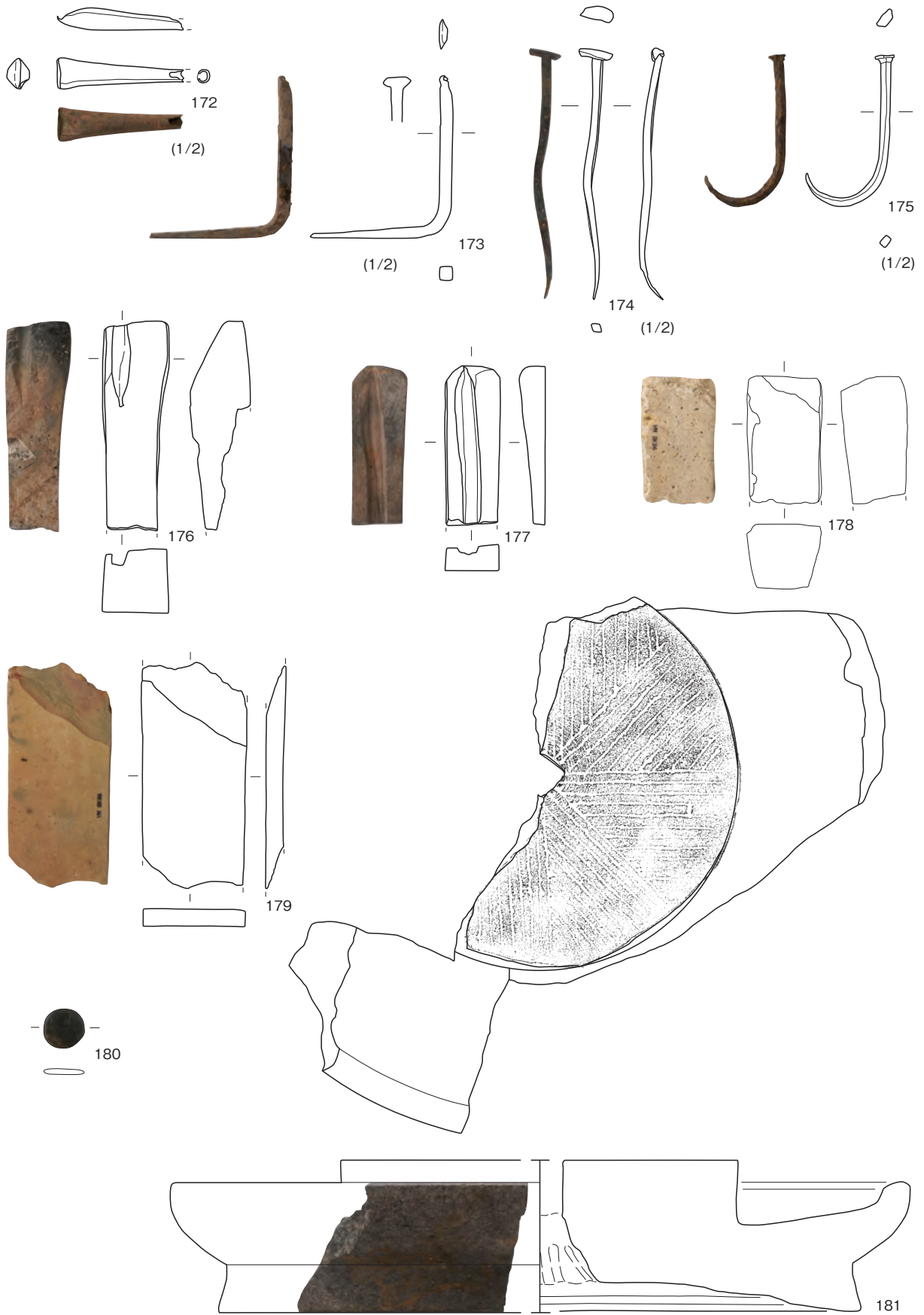




II-26 図 SK6 (12) 出土遺物



II-27 図 SK6 (13) 出土遺物



II-28 図 SK6 (14) 出土遺物



II-29 図 SK6 (15) 出土遺物



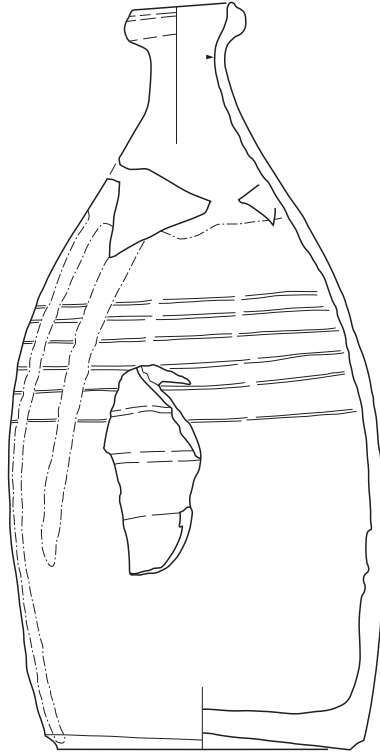


II-30 図 SK6 (16)、SK9 (1) 出土遺物





3



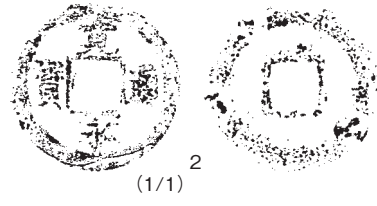
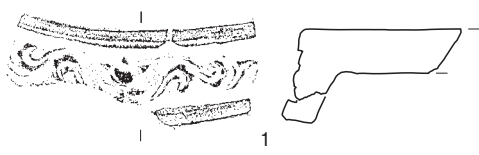
5



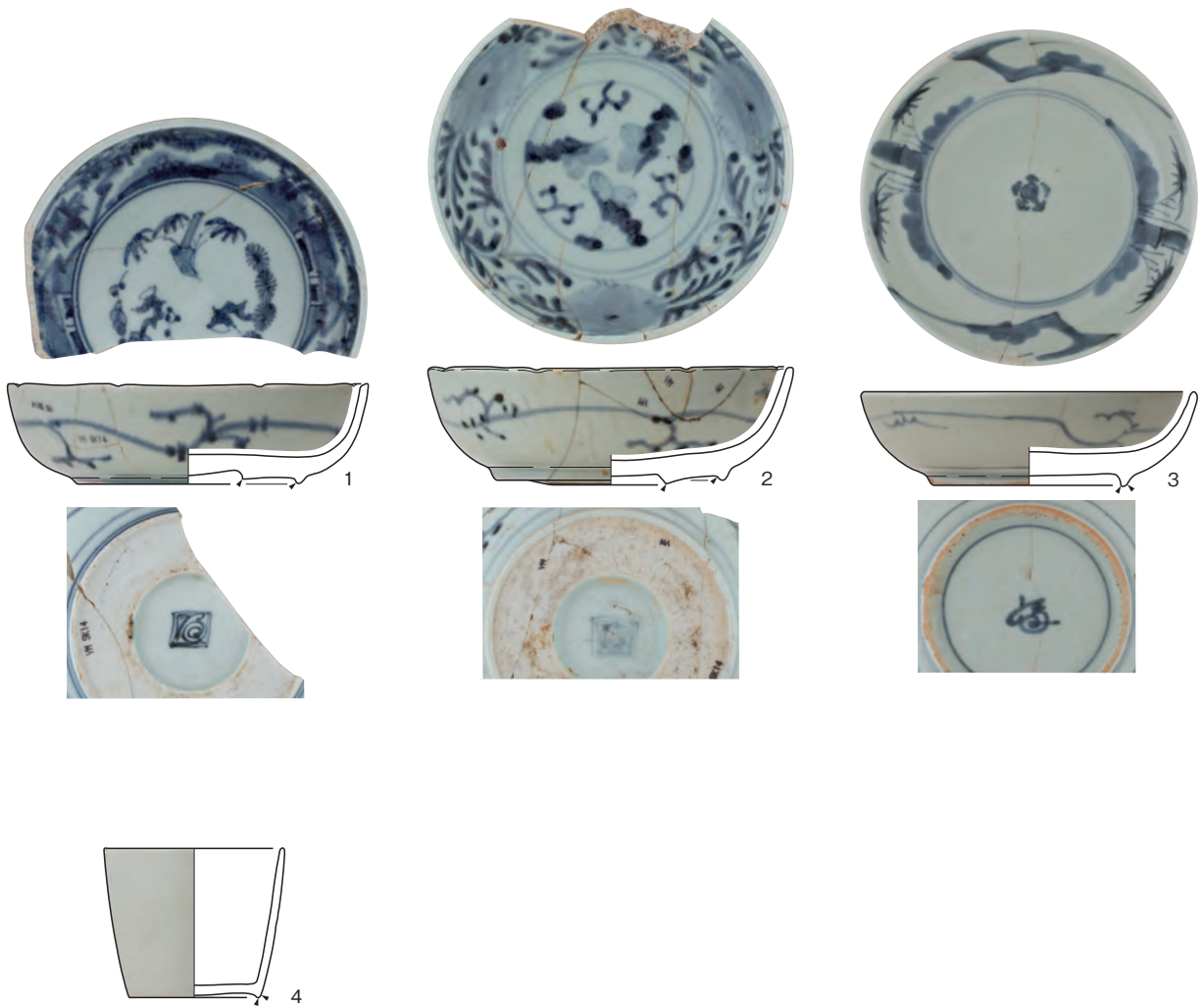
4



II-31 図 SK9 (2) 出土遺物

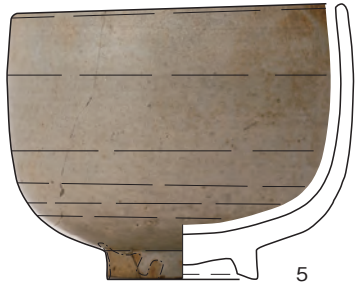


SD11



SU14 (1)

II-32 図 SD11、SU14 (1) 出土遺物



5



6



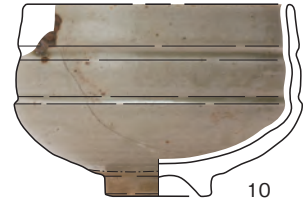
7



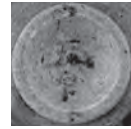
8



9



10



11



12



13



14



15



16

II-33 図 SU14 (2) 出土遺物





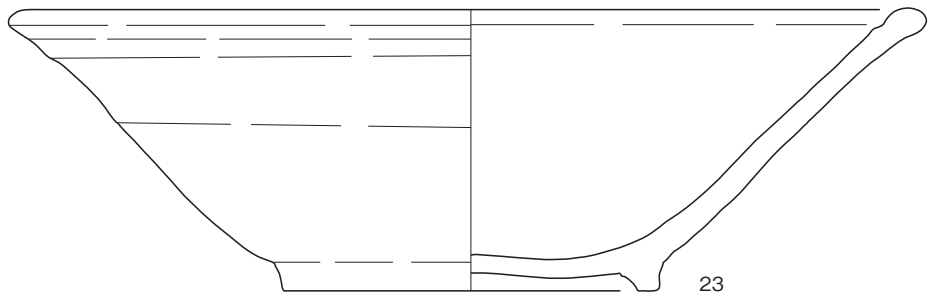
II-34 図 SU14 (3) 出土遺物



21



22



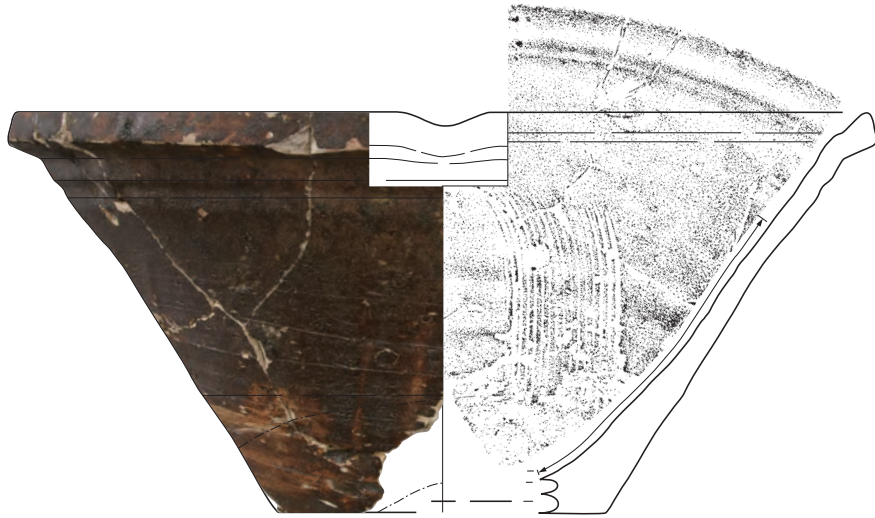
23

II-35 図 SU14 (4) 出土遺物

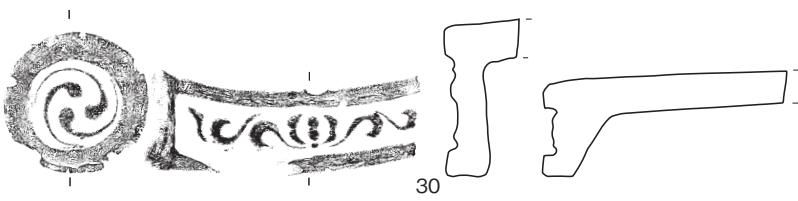


II-36 図 SU14 (5) 出土遺物





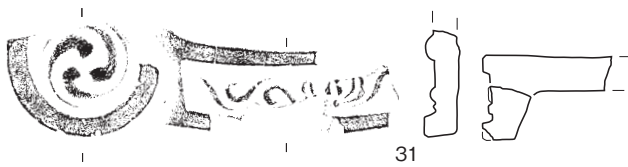
29



30



33



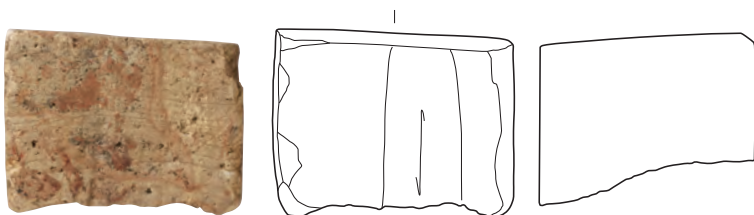
31



32



34



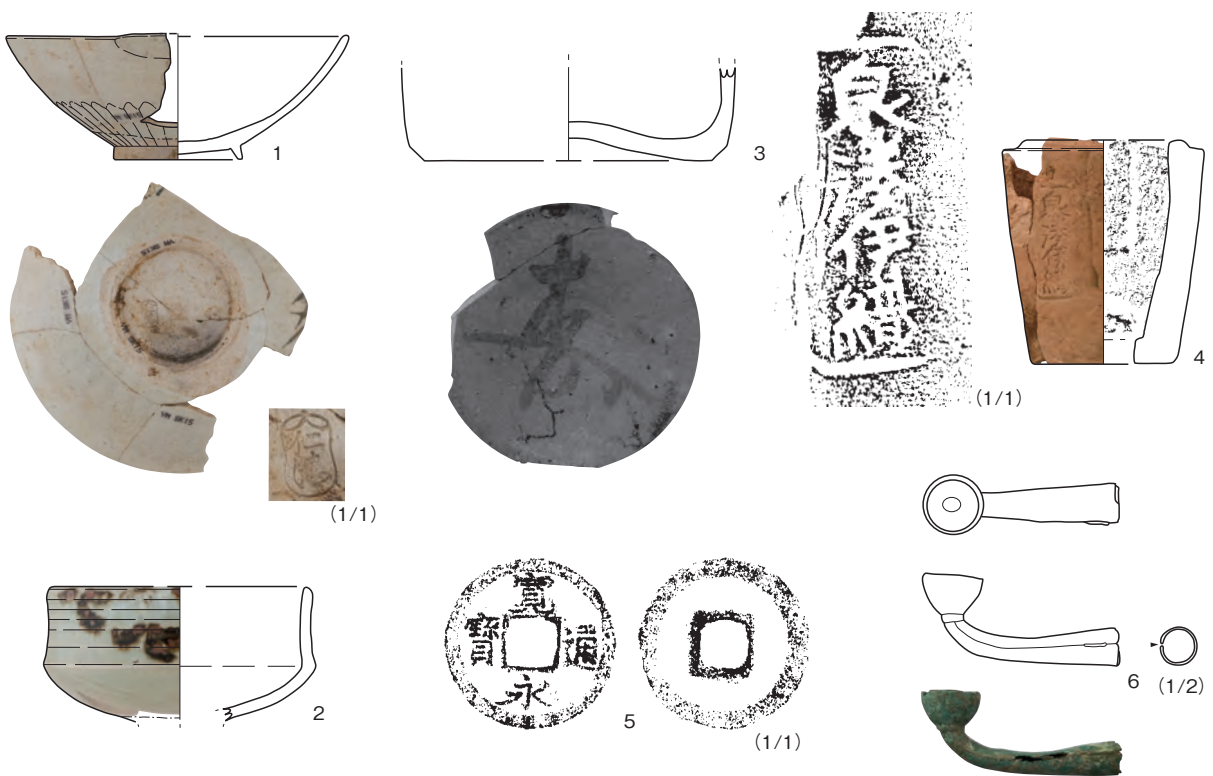
35

II-37 圖 SU14 (6) 出土遺物



36

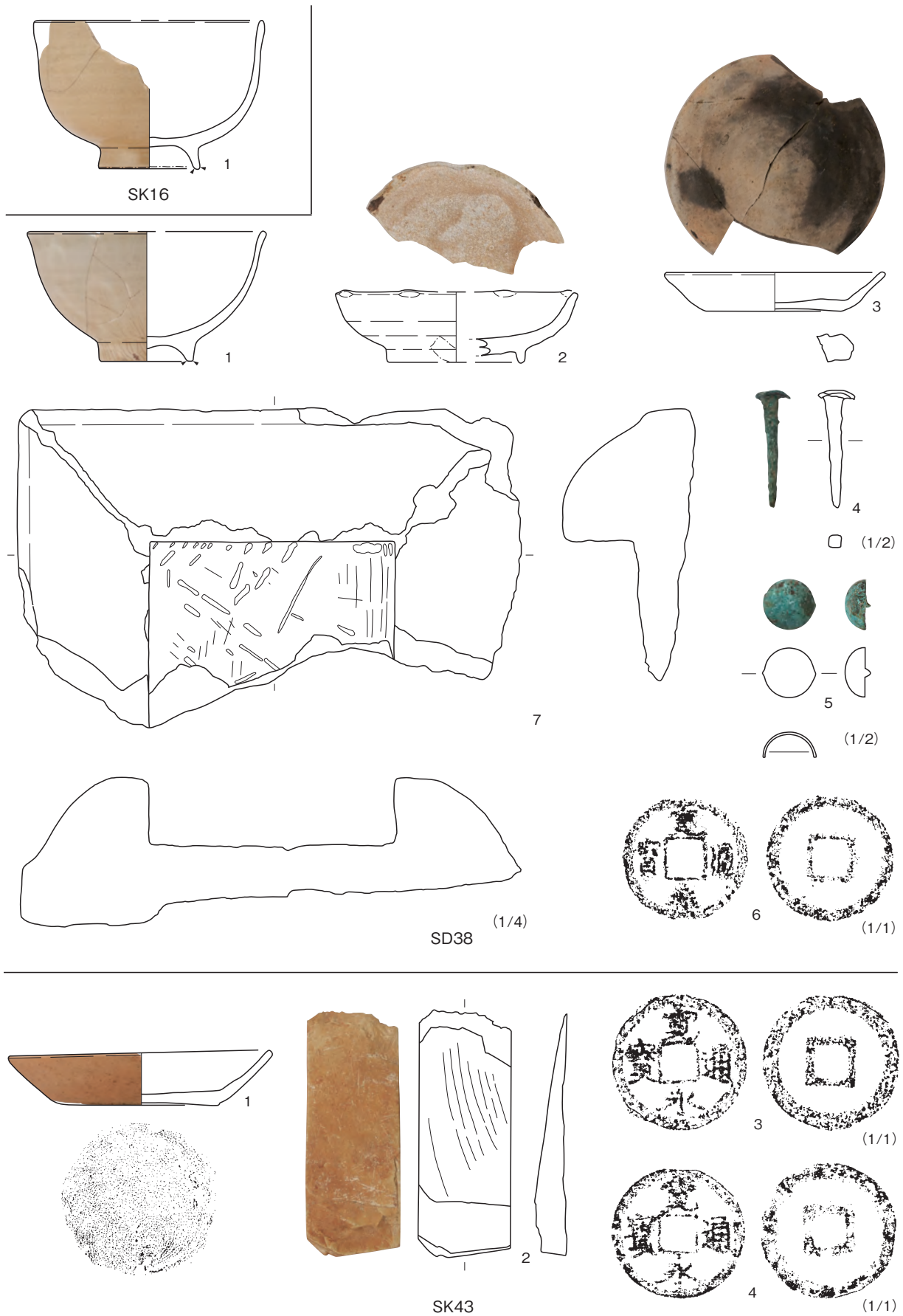
SU14(7)



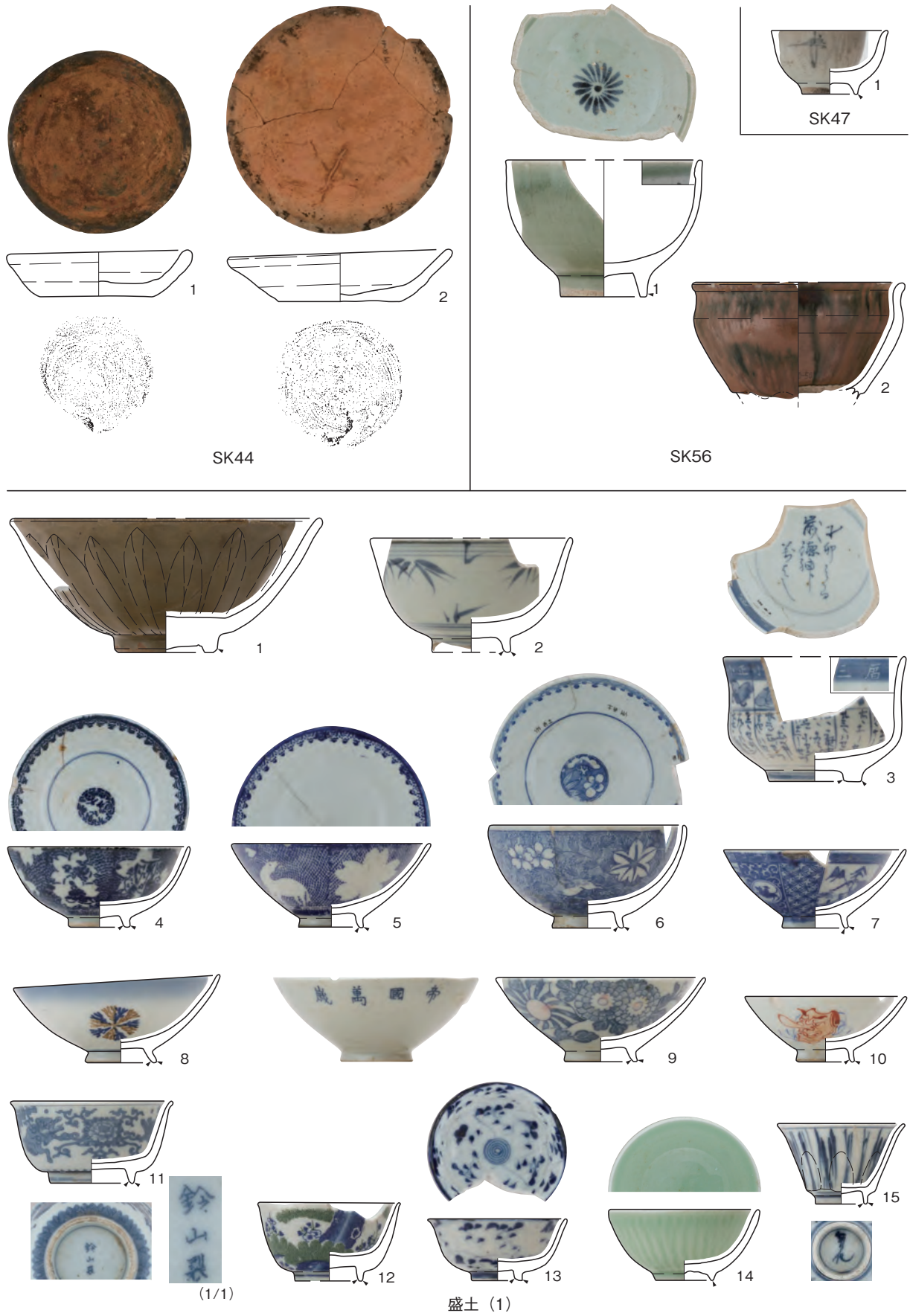
SK15

II-38 図 SU14 (7)、SK15 出土遺物

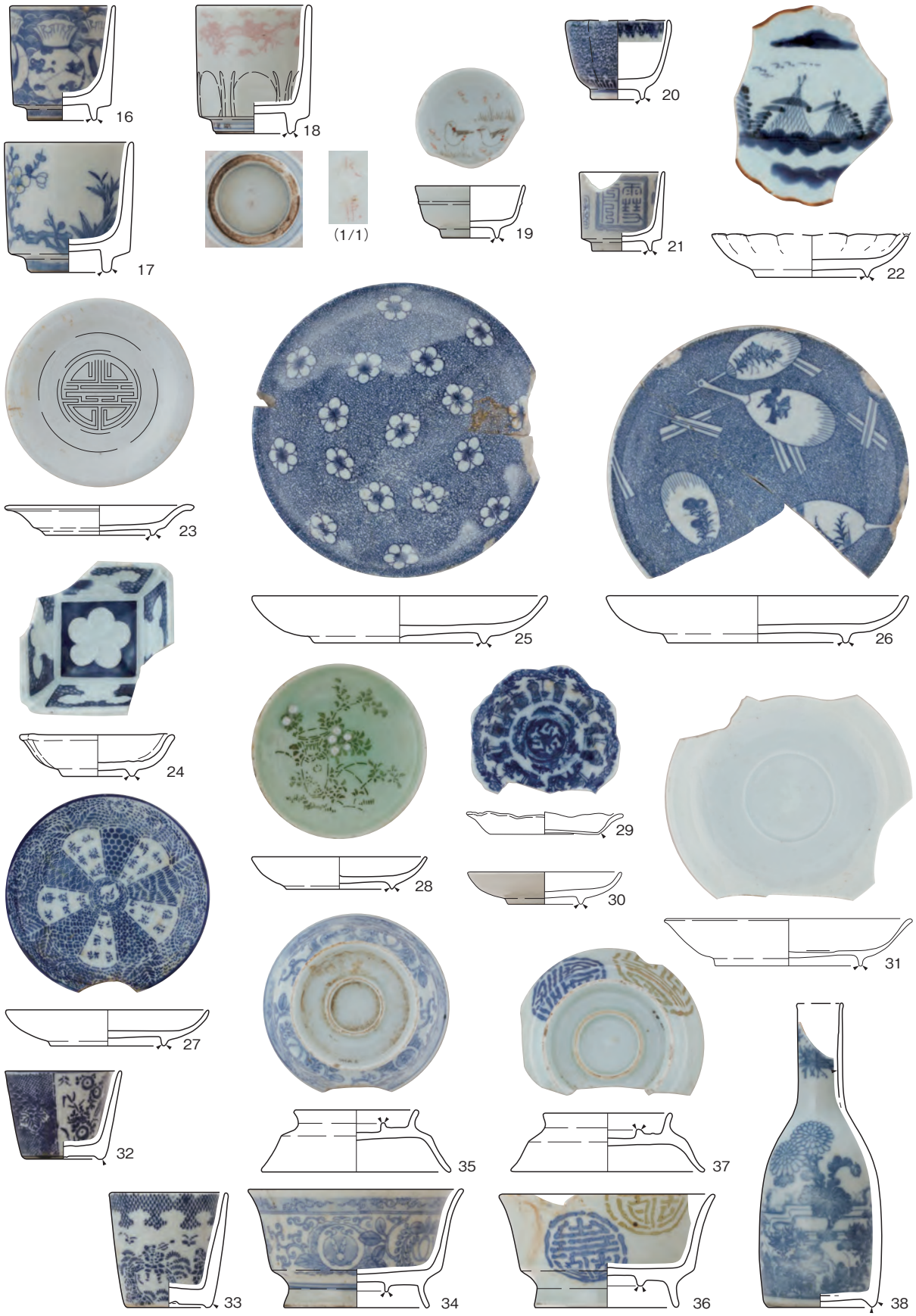




II-39 図 SK16、SD38、SK43 出土遺物



II-40 図 SK44、SK47、SK56、盛土 (1) 出土遺物

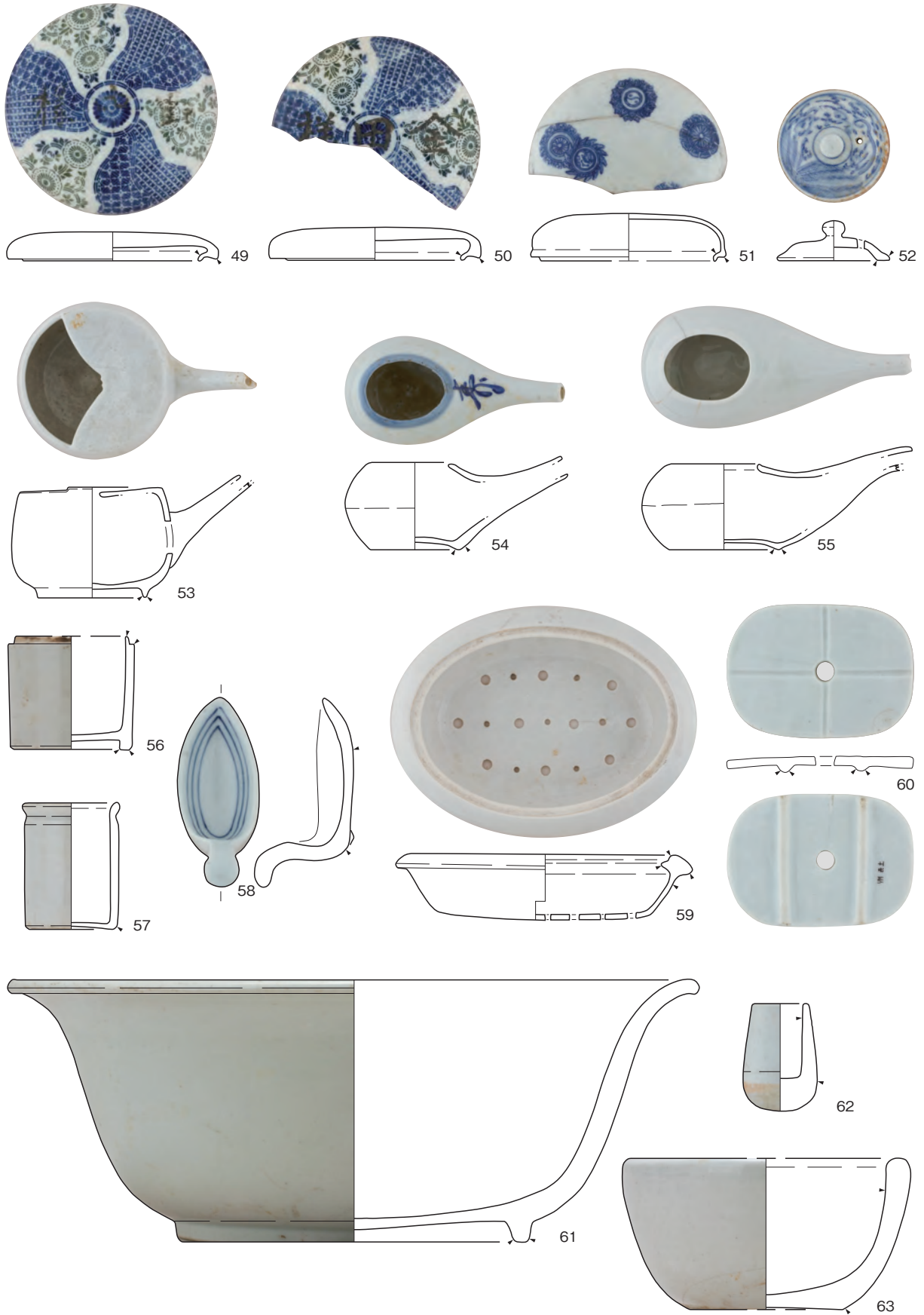


II-41 図 盛土 (2) 出土遺物





II-42 盛土 (3) 出土遺物



II-43 盛土(4) 出土遺物



II-44 図 盛土 (5) 出土遺物





II-45 盛土(6)出土遺物



II-46 図 盛土 (7) 出土遺物

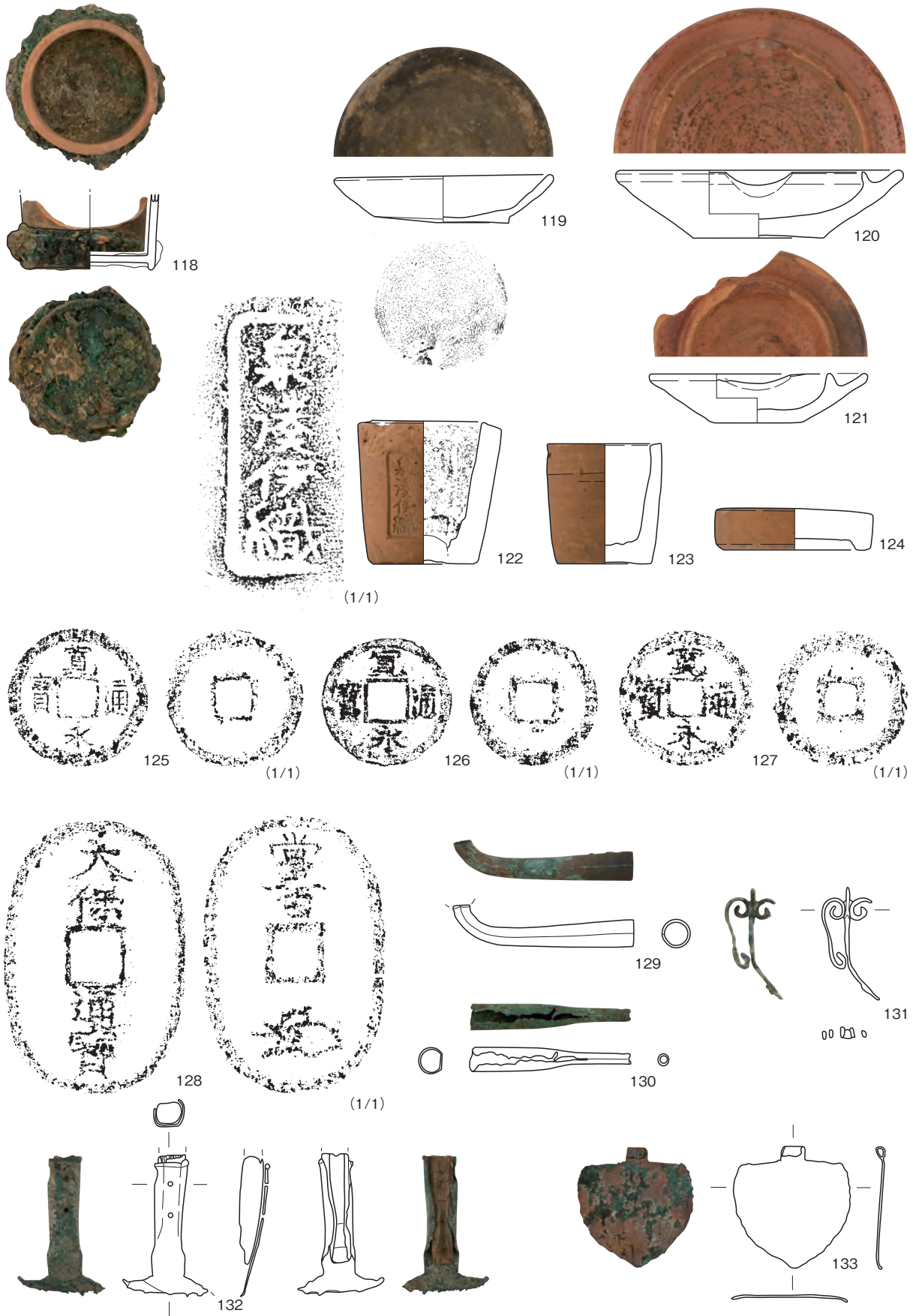




II-47 盛土 (8) 出土遺物



II-48 図 盛土 (9) 出土遺物

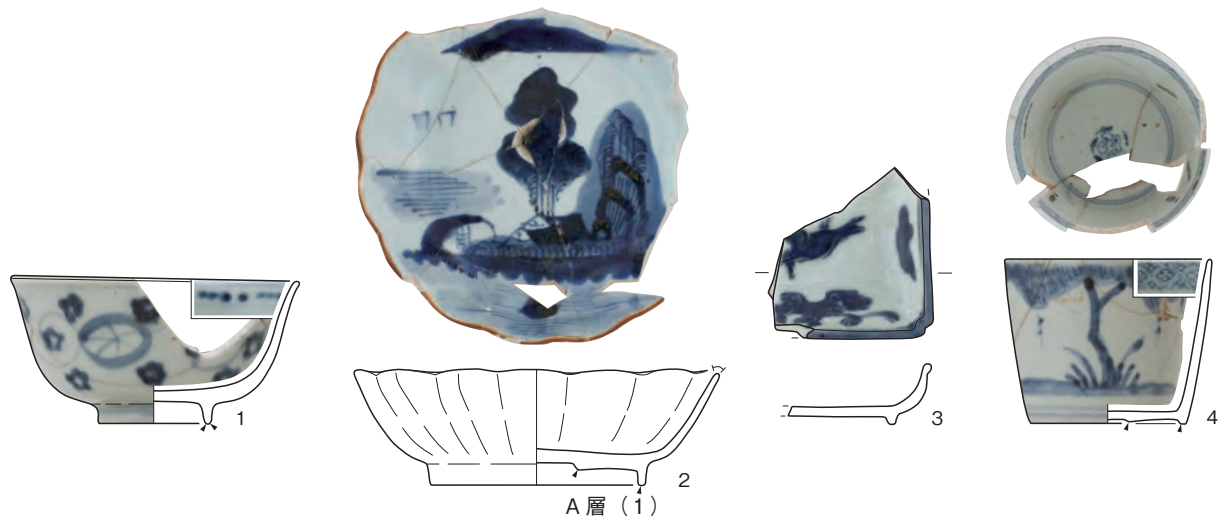


II-49 盛土 (10) 出土遺物



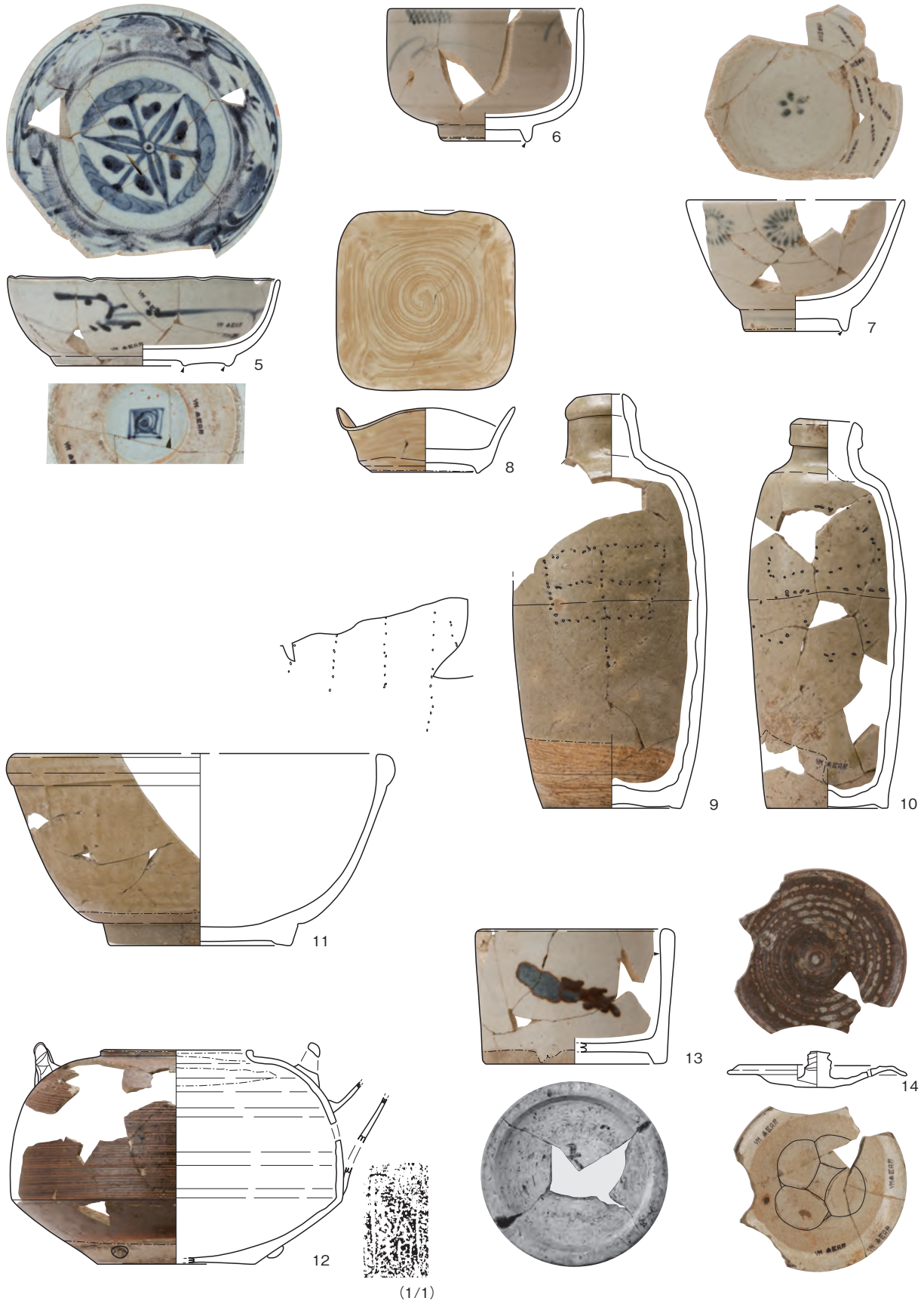


盛土 (11)

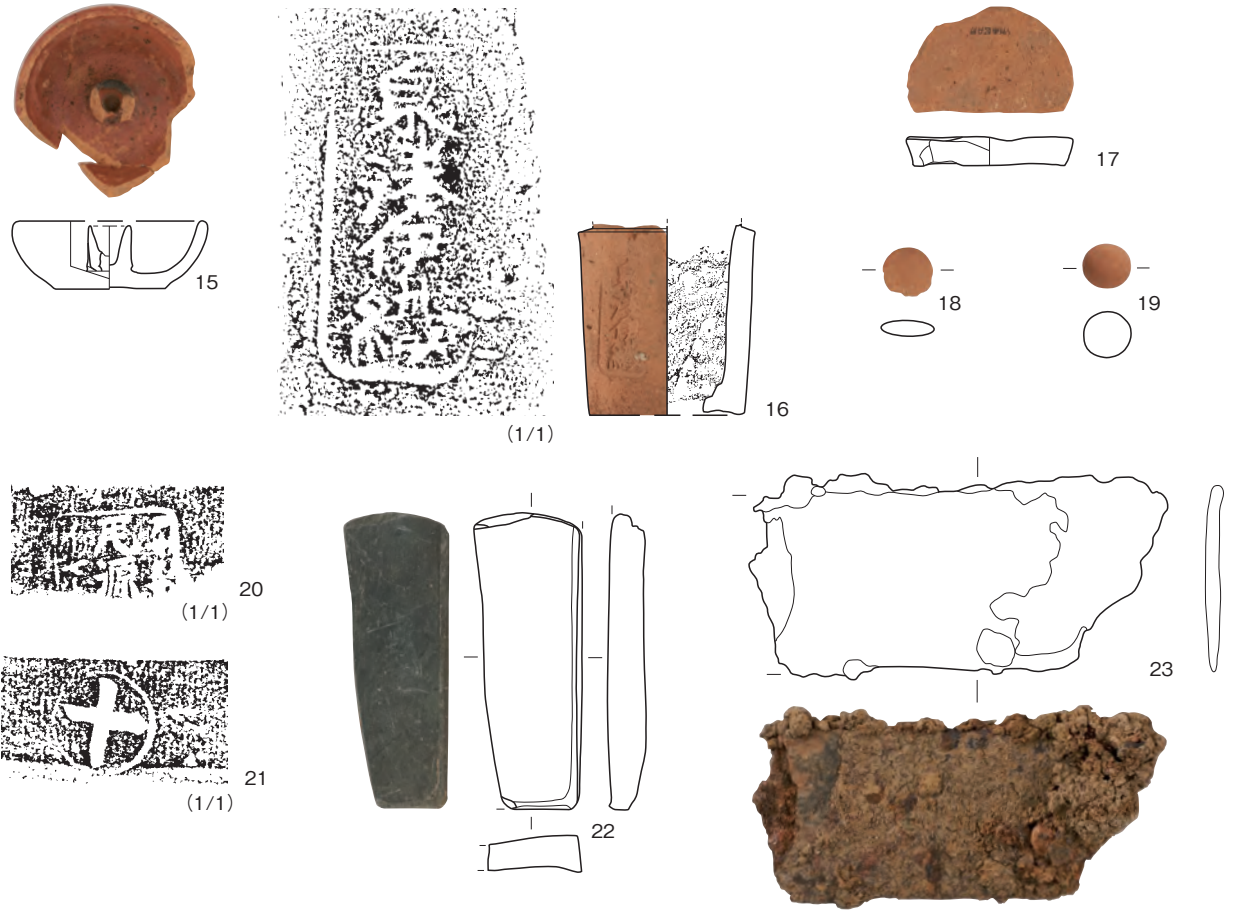


A層 (1)

II-50 図 盛土 (11)、A層 (1) 出土遺物



II-51 図 A層(2)出土遺物



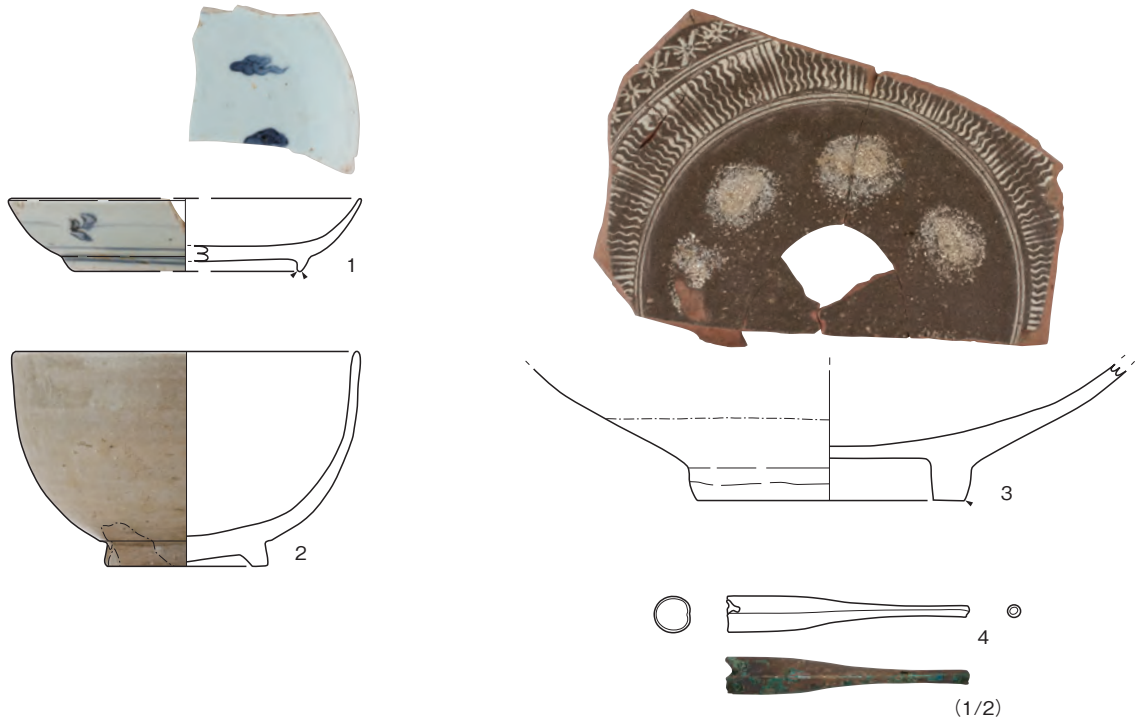
A層 (3)



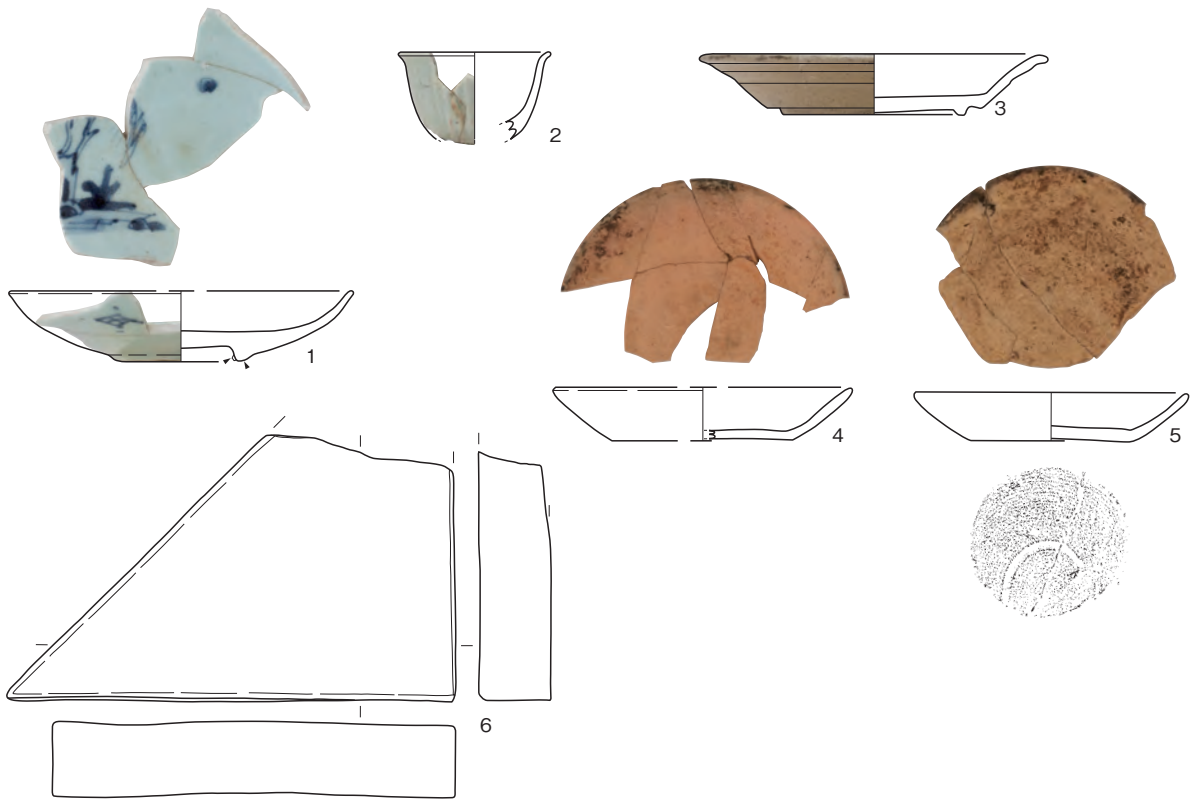
B層

II-52図 A層 (3)、B層 出土遺物





C層



D層

II-53 図 C層、D層 出土遺物



II-54 図 E層 出土遺物

### 第3節 動物遺体

#### はじめに

本調査地点から動物遺体は19群出土している。内訳は、貝類が13種、鳥類が2群、哺乳類が4種である。以下に種名を示す。

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA	ヤマトシジミガイ <i>Corbicula japonica</i>
腹足綱 Class Gastropoda	マルスダレガイ科 Family Veneridae
古腹足目 Order Vetigastropoda	アサリ <i>Tapes (Ruditapes) philippinarum</i>
ミミガイ科 Family Haliotidae	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
メガイアワビ <i>Halitosis (Nordotis) gigantea</i>	
マダカアワビ <i>Haliotis (Nordotis) madaka</i>	脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA
クロアワビ <i>Haliotis (Nordotis) discus discus</i>	鳥綱 Class Aves
サザエ科 Family Turbinidae	カモ目 Order Anseriformes
サザエ <i>Turbo (Batillus) cornutus</i>	カモ科 Family Anatidae
新腹足目 Order Neogastropoda	カモ亜科 Subfamily Anatinae
アクキガイ科 Family Muricidae	属種不明 gen. et sp. indet.
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	マガモ属 <i>Anas</i> spp.
エゾバイ科 Family Buccinidae	キジ目 Order Galliformes
バイ <i>Babyronia japonica</i>	キジ科 Family Phasianidae
二枚貝綱 Class Bivalvia	ニワトリ <i>Gallus gallus var. domesticus</i>
フネガイ目 Order Arcoidea	哺乳綱 Class Mammalia
フネガイ科 Family Arcidae	食肉目 Order Carnivora
アカガイ <i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i>	イヌ科 Family Canidae
カキ目 Order Ostreoida	イヌ <i>Canis familiaris</i>
イタボガキ科 Family Ostreidae	ネコ科 Family Felidae
マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	ネコ <i>Felis catus</i>
マルスダレガイ目 Order Veneroida	偶蹄目 Order Artiodactyla
バカガイ科 Family Mactridae	イノシシ科 Family Suidae
シオフキガイ <i>Macra veneriformis</i>	イノシシ (ブタ?) <i>Sus scrofa</i>
ミルクイ <i>Tresus keenae</i>	シカ科 Family Cervidae
シジミガイ科 Family Cobicalidae	ニホンシカ <i>Cervus nippon</i>

なお、これらの資料は、現場にて発掘担当者が視認できたものを任意で採集したものである。

### 1. 貝類遺体 (1・2表、1図)

貝類遺体は最小で66個体出土している。最も多いのがアワビ類で20個体出土し、全体の30.3%を占める。次いでサザエが多く、11個体で16.7%を占める。以上の2分類群以外に、バイ(8個体・12.1%)、ミルクイ(7個体・10.3%)、アカガイ、ハマグリ(各5個体・7.6%)、ヤマトシジミ(4個体・6.1%)、アカニシ(2個体・3.0%)、マガキ、アサリ、シオフキガイ(各1個体・16.7%)が出土している。

これらの内、77.3%がSK6より出土している。以下、SK6について詳細を述べる。

SK6において貝類遺体は、最小で51個体出土している。最も多いのがアワビ類で18個体出土し、全体の35.3%を占める。アワビ類以外に10個体以上出土している分類群はない。アワビ類以外には、サザエ(7個体・13.7%)、バイ、ミルクイ(各6個体・11.8%)、ヤマトシジミ(4個体・7.8%)、アカガイ、ハマグリ(各3個体・5.9%)、アカニシ(2個体・3.9%)、マガキ、シオフキガイ(各1個体・2.0%)が出土している。なお、ハマグリ(左殻)は、3点中2点が、殻長50mm未満の中小型である。

### 2. 鳥類遺体 (3・4表)

鳥類遺体は破片数で7点出土している。出土している分類群はニワトリとカモ類で、その内訳は、ニワトリが4点、カモ類が2点、同定することのできなかったもの(同定不可)が1点である。なお、7点中5点がSK6より出土している。

出土部位は、翼の部分(鳥口骨、上腕骨、尺骨、手根中手骨)と腿の部分(大腿骨)に限られている。つまり、料理に用いられた部位、もしくはそれに近接した部位のみが廃棄されていることになる。

### 3. 哺乳類遺体 (5～7表)

哺乳類遺体は破片数で23点出土している。最も多いのがイヌで12点(最小で4体分)出土し、全体の52%を占める。その他にネコ(3点・13%、2体分)、ニホンジカ(2点・8.7%)、イノシシ類、大型哺乳類(各1点・4.3%)である。この内、食物残渣と想定されるのは、出土地不明のイノシシ類右大腿骨のみである。イヌとネコは屋敷内で飼育されていたか、野良のものが棲み付いていたものが死んで、廃棄もしくは埋葬されたものであると想定される。しかし、1体分まとまって出土していないことから、他所に埋められていたものが土の移動などに伴って2次的にそれぞれの遺構内に混入したことが推測される。

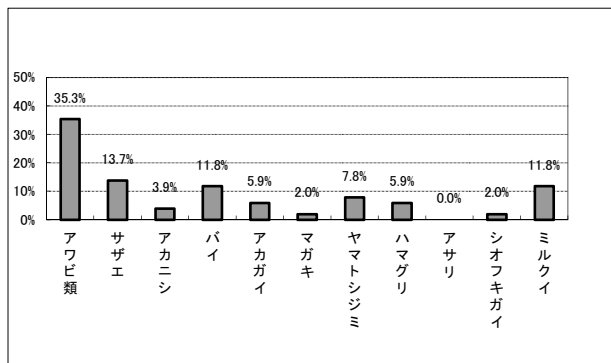
ニホンジカの出土部位は2点とも角である。さらに、鋸によるものと考えられる切断面を有することから、角製品を製作した際に排出されたものであることが考えられる。

大型哺乳類は、まずウシかウマのいずれかのものと考えられる。また、出土している部位が肋骨のみであることから、他所で解体され廃棄されていたものが土の移動などによって、2次的にSK6に混入したものと想定される。

報告編

遺構	マダカアワビ		メガイアワビ		クロアワビ		アワビ類		サザエ		アカニシ		バイ		不明巻貝		アカガイ		マガキ		ヤマトシジミ		ハマグリ		アサリ		シオフキガイ		ミルクイ		合計 (MNI)	備考
	殻	蓋																														
SB01								○																						1		
SK06	7	3	6	2	7	2	2	6								3	3	1	1	4	2	3	1			1		6	2	51	アワビ類：幼貝。クロ？、ハマグリ：破片に「大型」のものが含まれる。	
SK14				△																										1	アワビ類：被熱	
遺構外					2								2			○								1				○		7	ハマグリ：大型	
表土		○			1	1									○		1							○	1					6	ハマグリ：大型	
合計 (MNI)	20		11		2		8		1		5		1		4		5		1		1		7				66					
	30.3%		16.7%		3.0%		12.1%		1.5%		7.6%		1.5%		6.1%		7.6%		1.5%		1.5%		10.6%									

1表 出土貝類遺体組成表



1図 SK6 出土貝類遺体組成グラフ

(計測単位：mm)

種	殻長	殻径
マダカアワビ	147.71	122.26
		95.59
メガイアワビ	126.96	103.26
	169.56	
クロアワビ	144.03	105.21
	141.78	111.71
	120.83	
	152.30	109.61

種	殻高
サザエ	99.14
	87.62
アカニシ	133.44
	125.11
バイ	61.66
	55.09
	67.32
	59.99
	54.15
	56.40

種	左右	殻長	殻高	その他
アカガイ	右	99.64	82.55	69.08
		107.36	87.00	70.91
	左			55.86
		98.30		64.17
ハマグリ	左	107.63		74.42
			96.54	81.07
	右	38.25	29.80	9.76
				5.62
ヤマトシジミ	左		17.30	
			28.84	9.37
	右	29.78	26.15	
		22.73	20.50	
シオフキガイ	左	19.19	17.13	
		21.71	18.20	
ミルクイ	左	37.48	33.55	
		132.85	90.29	
		138.44		

【その他】アカガイ：鉸歯長，ハマグリ：外靱帯溝長

2表 SK6 出土貝類遺体サイズ計測表

第II章 遺構と遺物

遺構	分類群	部位	左右	数	備考
SK06	カモ類	手根中手骨	左	1	遠位端部に一部に切断痕あり。サイズはマガモ標本に近い。
SK06	カモ類	尺骨	右	1	近位欠損。サイズはマガモ標本に近い。
SK06	ニワトリ	鳥口骨	右	1	完存。但し、化石化の途上。全長58.4mm
SK06	ニワトリ	上腕骨	右	1	遠位端部欠損。
SK06	ニワトリ	大腿骨	左	1	化石化の途上。全長87.4mm
表土	ニワトリ	大腿骨	右	1	完存。
不明	同定不可	尺骨	左	1	近位から中位にかけて欠損。キジ科？

3表 出土鳥類遺体一覧

遺構	分類群	部位	左/右	計測項目	計測値 (mm)
表土	ニワトリ	大腿骨	右	全長	GL 74.98
				Lm	70.75
				Bp	15.22
				Dp	11.75
				Bd	15.64
				Dd	12.26
SK6	ニワトリ	上腕骨	右	全長	GL 82.17
				Bp	21.94
		尺骨	右	Did	10.72
				SC	9.01
	カモ類	手根中手骨	左	全長	GL 60.11
				Bp	12.64

4表 出土鳥類遺体サイズ計測表

遺構	分類群	部位	左右	数	MIN	MAX	備考
SK05	同定不可	四肢骨	—	2	1	2	左大腿骨及び右脛骨骨幹部分。イヌ？
SK06	イヌ	尺骨	右	1	1	4	近位欠損。
		寛骨	右	1			腸骨及び恥骨の部分が欠損。
		大腿骨	左	1			
			右	1			
	ネコ	寛骨	右	1	1	2	
		大腿骨	右	1			
	大型哺乳類	肋骨	—	1	1	1	遠位に切断痕が見られる。
同定対象外	肋骨	—	1	—	1	イヌ？	
同定不可	四肢骨	—	1	—	1	骨幹部分。イヌ？	
SK14	イヌ	環椎	—	1	1	2	右側のみ残存。
		上腕骨	右	1			両骨端欠損。成犬。全長120mm前後と想定される。
ニホンジカ	角	—	2	1	2	共に両端に切断面を有する	
北区B層	イヌ	軸椎	—	1	1	1	
南区A層	イヌ	下顎骨	左	1	1	1	
表土	イヌ	上腕骨	左	1	1	4	遠位が欠損。成犬。
		下顎犬歯	左	1			歯根部分が欠損。
		下顎第2後臼歯	左	1			近遠心径：21.09mm。後端部分、特に舌側が磨耗が著しく、エナメル質があらわれている。
		仙骨	—	1			左側部分のみ残存。
ネコ	大腿骨	左	1	1	1	近位端は未癒合。遠位が欠損。	
不明	イノシシ類	大腿骨	右	1	1	1	近位に外側から内側に向かって鋸によって切断された面があり。さらに、骨幹背面に無数の横位の傷が見られる。遠位端は未癒合。
合計				23	11	23	

5表 出土哺乳類遺体一覧



ネコ

遺構	部位	左右	計測箇所		計測値 (mm)	所見
SK6	寛骨	右	全長(寛骨長)	GL	77.90	
			寛骨臼最大径	LA	11.89	
			腸骨最小幅		12.00	
			腸骨厚(最小幅位)		5.98	
	大腿骨	右	全長	GL	108+	遠位端未癒合の為。
			近位端最大幅	Bp	22.70	
			中央横径		9.59	
			中央矢状径		9.04	

イヌ

遺構	部位	左右	計測箇所		計測値 (mm)
表土	上腕骨	左	近位端最大幅	Bp	30.02
			中央最小幅		14.07
			中央最大幅		17.96
SK6	寛骨	右	寛骨臼最大径	LA	22.15
			腸骨最小幅		18.84
			腸骨厚(最小幅位)		10.67
	大腿骨	左	遠位端最大幅	Bd	31.34
			中央横径		13.42
			中央矢状径		12.88
		右	近位端最大幅	Bp	35.12
			中央横径		11.91
			中央矢状径		12.09

6表 出土哺乳類遺体サイズ計測表

A層南区

計測項目・等	I			C	P				M			計測箇所	計測値 (mm)	
	1	2	3		1	2	3	4	1	2	3			
歯式	/	/	/	/	/	7	×	8	×	10	×	23	下顎体高(1:M2の後)	21.59
近遠心径						6.8		9.9		6.9		24	下顎体高(2:M1の中央)	22.62
頬舌心径						3.7		5.3		5.4		25	下顎体高(3:P4とM1の間)	21.67
												26	下顎体厚(M1の中央)	11.56

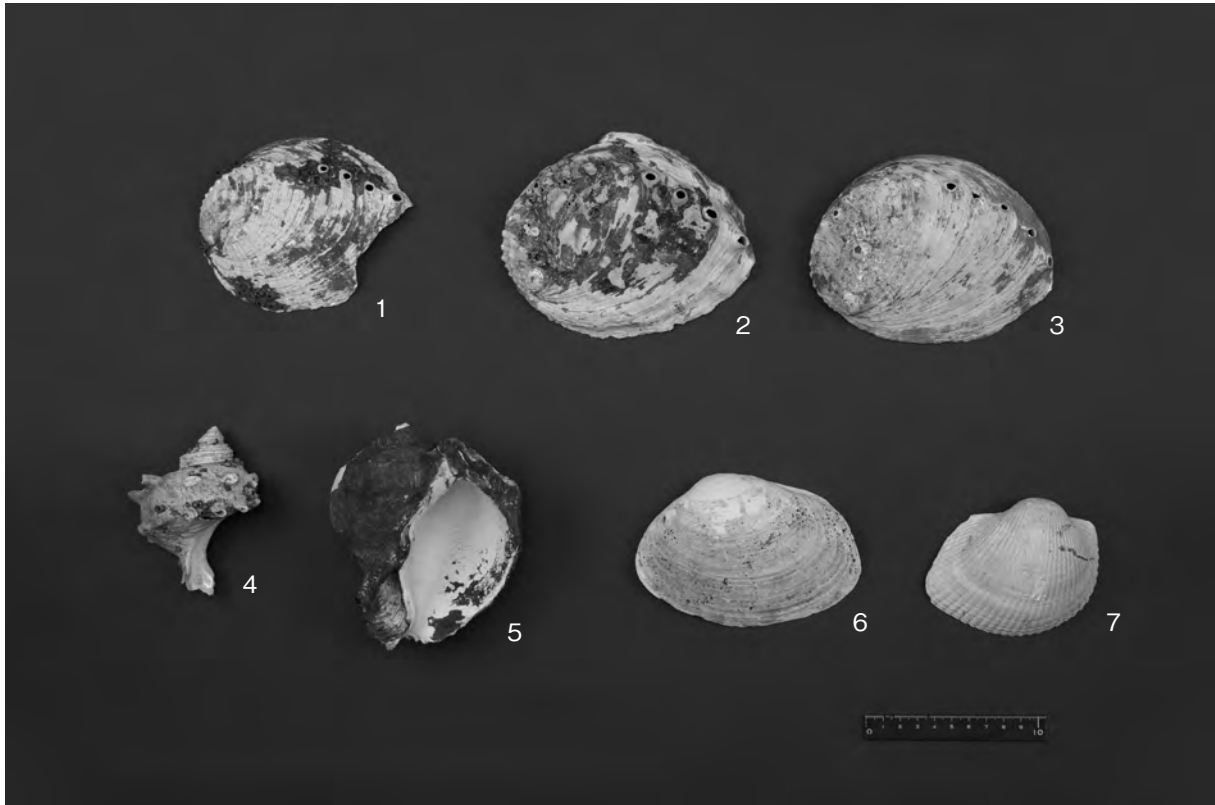
アラビア数字(例: 4) : 永久歯あり

× : 歯脱落、歯槽は開放されたまま、/ : 顎体自体が欠損

7表 イヌの下顎骨に関する歯式及び計測値

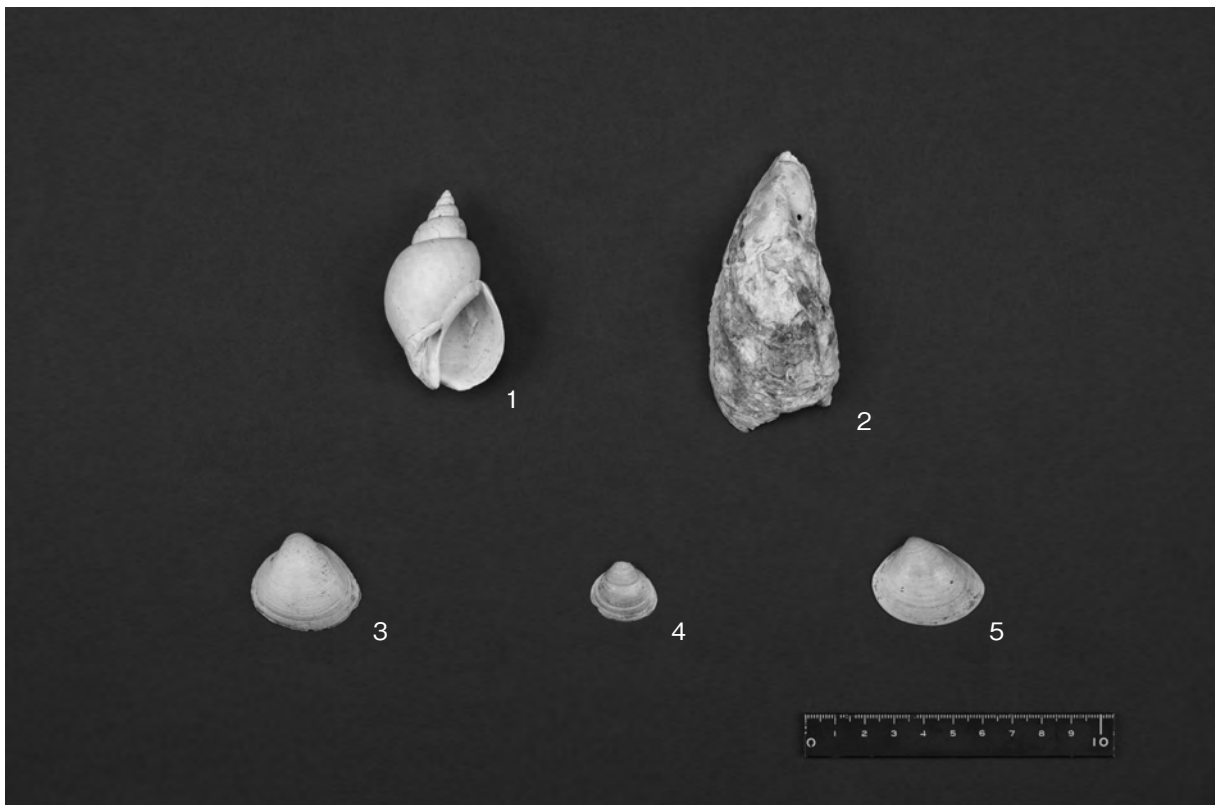
遺構				貝類	鳥類	哺乳類
名	面	時期	性格			
SB01	A	1820~1860年代	石垣掘り方	サザエ(片)		
SK05			土坑			同定不可
SK06	A	1820~1860年代	土坑	アワビ類(18), サザエ(7), バイ・ミルクイ(各6), ヤマトシジミ(4), アカガイ・ハマグリ(各3), アカニシ(2), マガキ・シオフキ(各1),	カモ類, ニワトリ	イヌ, ネコ, 大型哺乳類
SK14	B	18c前葉~18c後葉	地下室	アワビ類(片)		イヌ, ニホンジカ(角)
北区B層	—	18c前葉	—			イヌ
南区A層	—	19c初頭	—			イヌ
表土	—		—	サザエ・アカガイ・アサリ(各1), アワビ類・ハマグリ・不明巻貝(片)	ニワトリ	イヌ, ネコ
遺構外				サザエ・バイ(各2), ハマグリ(1) アカガイ・ミルクイ(各片)		

8表 出土動物遺体一覧



PL.1 貝類遺体①

1メガイアワビ 2マダカアワビ 3クロアワビ 4サザエ 5アカニシ 6ミルクイ・左殻 7アカガイ・右殻  
(※すべてSK6より出土)



PL.2 貝類遺体②

1バイ 2マガキ・左殻 3シオフキガイ・左殻 4ヤマトシジミ・左殻 5ハマグリ・左殻  
(※すべてSK6より出土)



PL.3 鳥類遺体

1・2カモ類(1手根中手骨(左), 2尺骨(右)) 3不明(尺骨(左)) 4ニワトリ(4鳥口骨(右), 5上腕骨(右), 6大腿骨(左), 7大腿骨(右)) (※3が出土地不明、7が表土の他はSK6より出土)



PL.4 哺乳類遺体①(イヌ)

1下顎骨(左) 2下顎第2後臼歯(左) 3軸椎 4尺骨(右) 5上腕骨(右) 6上腕骨(左) 7寛骨(右) 8大腿骨(右)  
(※1:南区A層, 2・6:表土, 3:北区B層, 4・7・8:SK6, 5:SK14)



PL.5 哺乳類遺体② (イヌ以外)

1 ニホンジカ(角) 2~4 ネコ(2 寛骨(右), 3 大腿骨(左), 4 大腿骨(右)) 5 イノシシ類(大腿骨(右)) 6 大型哺乳類(肋骨)  
(※ 1:SK14, 2・4・6:SK6, 3:表土, 5:出土地不明)

【引用・参考文献】

- 大貫浩子 2009「東京大学工学部武田先端知ビル地点出土陶磁器製インク瓶について」『浅野地区 I』  
東京大学埋蔵文化財調査室報告書 9 東京大学埋蔵文化財調査室
- 柏書房株式会社 1991『日本窯業史総説（『日本近世窯業史』復刻版）第 1 巻』 pp.408-409
- 加藤晃 1989「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『史学研究集録』第 14 号：43-61、國學院大學日本史  
学専攻大学院会
- 加藤晃 1992「江戸瓦の変遷－加賀藩本郷邸出土の瓦について－」『國學院雑誌』第九十三卷第十二号：78-97、  
國學院大學
- 金子智 1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒浅瓦の地方色」『古代』第 101 号
- 汐留地区遺跡調査会 1996『汐留遺跡－汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－』 pp.58-59、pp.62-63
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005a『医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書 5
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005b『工学部一号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書 7
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011『東京大学構内遺跡調査研究年報』7
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 長崎市教育委員会 1999『長崎桜町遺跡』
- 日本窯業協会 1914「第六章 溶融窯及び坩堝製作業、第三節 坩堝作業」『日本近世窯業史』
- 西田泰民・吉田邦夫 2006「近世ガラスの化学分析」『工学部 14 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 原祐一 2002「4. 受変電設備棟新営に伴う埋蔵文化財略報」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査  
研究年報 3 1998・1999 年度』 pp.24-25、32
- 原祐一・堀内秀樹 2006「水戸藩駒込邸の土地利用状況－発掘調査の成果と文献史料の検討－」文京ふるさと歴  
史館特別展 徳川御三家江戸屋敷水戸黄門邸を探る 2006 年 10 月 21 日（土）～12 月 3 日（日）開催 展示図  
録掲載 pp.32-41
- 宮崎勝美 1990「第 1 節 加賀藩本郷邸とその周辺」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学埋蔵文化財調査室調  
査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第 3 分 考察編』 pp.5-46

## 第三章 医学部附属病院受変電設備棟地点の成果

### 医学部附属病院受変電設備棟地点出土の瓦についての一考察

石井 龍太

#### 種類

本稿では、特に多くの瓦資料が出土したSK6を中心に論じることとする。なお本稿の遺物図版において、括弧内に遺物番号の記載していないものは本稿のみで使用しており、第II章では出土遺物として掲載していない。

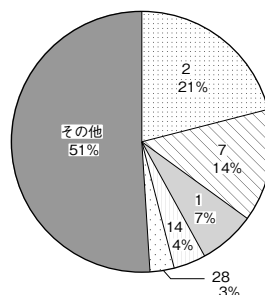
SK6出土資料は、種類別に見ると多岐に渡る。軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦<sup>(註1)</sup>、熨斗瓦、鬼瓦、螭羽瓦、冠瓦が確認されている。屋根を覆う基本的な種類は揃っているといえよう。これがひとつの屋根上に乗っていた瓦群かどうかは判然としない。ただ被熱した資料が極めて多いことから廃棄された被災家屋の部材である可能性は考えられ、同時期、同一地点で使用され被災した瓦群である可能性は残される。もしひとつの屋根に乗っていた瓦群なら、その屋根は棧瓦葺きで、棟には熨斗瓦を積んで冠瓦を並べ、左右両端に丸瓦と平瓦を葺き螭羽瓦で葺き納める瓦屋根であったと推察される。

種類別に見てみると、軒棧瓦・軒平瓦の軒平部瓦当紋様(1・2図)はほぼ全て「江戸式」に分類される。棧瓦の規格も「江戸式」に限定される(前掲註1)ことから、SK6出土資料は瓦当紋様、規格ともに「江戸式」にまとまるものと考えられる。また紋様の種類は、加藤氏の分類(加藤1989:43-44)のうちII Kjに分類されるものが極めて多い。

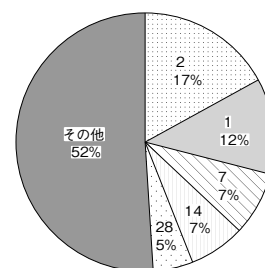
ただ詳細に見ると、細かな分類も可能である。軒棧瓦・軒平瓦の軒平部は、加藤氏の分類に従えば、全形の伺えるものだけでも16種類確認される。瓦当範別に分類すると43種確認される。なお一点のみ「東海式」軒棧瓦が含まれており、色調、胎土といった点で他の「江戸式」とは異なっている(10)。また中には、「江戸式」と「大坂式」との折衷紋様だと推察されるものも確認される(27)。「江戸式」および「江戸式」「大坂式」折衷紋様の軒瓦は在地の製品、「東海式」軒棧瓦は移入品だと推察される。

瓦当範別の紋様の出土比率を見ると、一点のみ出土した資料が全体の半分を占めている(円グラフ「その他」)。わずかに2の同範資料が16点(但し最小個体数<sup>(註2)</sup>は7点)、7が11点(最小個体数は3点)、1が5点(最小個体数は5点)認められるのみである。なお複数点数確認される資料のうち、1以外はみなII Kjに分類される。

こうした一遺構内での共通性は、これら瓦群が同時期、同一施設に使用されていたことを示してい



1図 軒瓦 瓦当紋様別出土比率(破片数)



2図 軒瓦 瓦当紋様別出土比率(最小個体数)



ると推察される。一方、共通性ととも認められるばらつきが何を意味するのか、複数の建物に用いられた部材が混在していることを示しているのか、繰り返し行われた補修によって差し替えられたことを示しているのか、はっきりとした結論を下すことは難しい。

なお熨斗瓦は、小破片のため分類しなかったものも多いが、全形がうかがえる資料に限っても瓦当範別に8種類確認される。本稿では一覧を提示するに留める(3・4図)。

## 刻印(5図)

SK6から出土した瓦資料には、27種類の刻印が確認された。刻印は漢字を用いたもの、紋様のものなどが確認されている。

瓦から年代を論じるのは困難であることが多いが、刻印を手がかりに瓦の生産年代を知ることは可能であろう。刻印は瓦の生産集団を表象すると予想されることから、その生産集団が活動した期間だけ製品に押されたものであり、それぞれ一定の年代幅を持っていると推察される<sup>(註3)</sup>。またひとつの建物に特定の刻印が押された瓦資料が含まれていた場合、その刻印が表象する生産集団からその建物に瓦が供給されたことを示していると予想される。

他の遺跡・遺構出土資料と比べてみると、総合研究棟(文・経・教・社研)地点SU107出土瓦には同じ刻印が複数確認されている(石井2008:2-8)。この遺構から出土した資料は棧瓦にはほぼ限定されており、軒棧瓦は瓦当紋様、規格(石井2008:5)ともに「江戸式」に限定される。

同じ構内遺跡のうち、総合研究棟(文・経・教・社研)地点SU107(追川2002:17以下HES99SU107と略述)は溶姫御殿に伴うものとされる、溶姫御殿は溶姫輿入れに際し文政八(1825)年に建てられ、明治元(1868)年の大火によって焼失している。従って出土資料は43年間の幅に収まることになる。また瓦の数百年に及ぶ長い耐久年数を考えれば、出土した瓦のほとんどは創建当初のものであったと予想される。従ってSU107から出土した資料の年代は、その多くは19世紀前半に限定されると考えられよう。このように年代の定点となることで注目される遺構だが、さらに本遺構から出土した瓦資料には50種類に及ぶ刻印が確認された。確認された刻印は、出土資料が「江戸式」瓦に限られることから、「江戸式」瓦に伴うものと予想される。

YM SK6から出土した瓦群は、上述の通り「江戸式」にはほぼ限定される。そして27種類の刻印のうち、大小二種類の「やまに「庄」(55,56)、「丸に「庄」(58,59)、「丸に「サ」(60)、「四角に「音」(61)といった刻印は東大構内遺跡ではしばしば確認されており、HES99 SU107出土資料にも確認される。他には、「十五」という数字を伴う「やまに「庄」(57)や、「村田」(62)はHES99 SU107に出土例がある。刻印の持つ性質から、同じ刻印を出土する両遺構は年代もまた近いと推察される。YM SK6出土瓦群には、溶姫御殿が建てられた19世紀前半期に生産された瓦が含まれていると考えられる。

一方で、HES99 SU107では多数を占めた「アサクサ瓦源イマト」は、SK6からは出土していない。YM全体ではA層(86)から一点が出土するのみである。同様に「やまに「庄」二十」も、SU107では目だって多い刻印だがSK6では見られない。逆にSK6で見られる多種多様な「太」(63~67)は何れもSU107では見られない。また漢字を用いない記号の刻印は互いに同じものが確認されない。

HES99 SU107は短期間に納まる一群だと推察されるが、YM SU6は判然としない。HES99 SU107には見られずSU6には見られる刻印は、両者の年代幅の違いを示しているのかもしれない。あるいは、建物に瓦を供給した複数の生産集団の組み合わせの差を意味しているのかもしれない。何れとも定めがたいが、SK6出土瓦の多くが何らかの災害に伴ってひとまとまりに廃棄された建物の部材だとも考えられ、後者の可能性を想定しなければならないだろう。

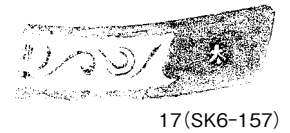
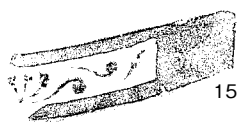
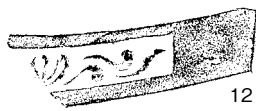
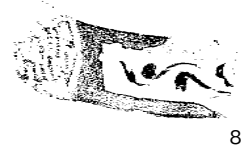
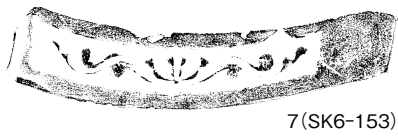
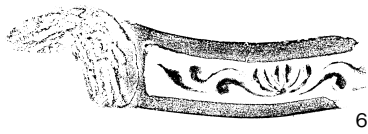
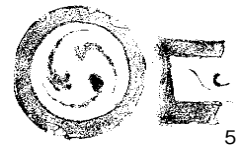
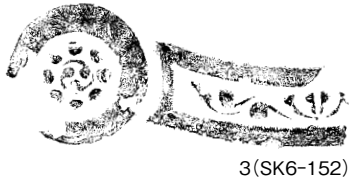
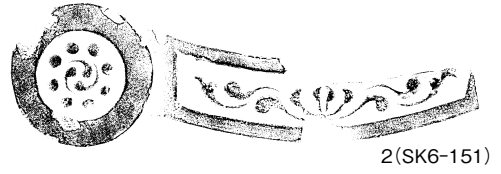
こうした現象は刻印だけでなく、軒瓦にも確認される。上述の通り、YM SK6からは「東海式」瓦当紋様を持つ資料が確認されている。しかし「東海式」はHES99 SU107からは一点も出土していない。一般に「東海式」瓦が都内遺跡に見られるようになるのは18世紀後半から近代になってからだと考えられており、年代に大きなずれはない。刻印と同じく、同じ邸内の建築物ではあっても、異なる建築には異なる生産者の組み合わせから建築部材が供給されるのが常であることを示す一例であると考えられよう。

**【註】**

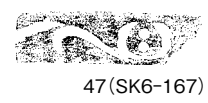
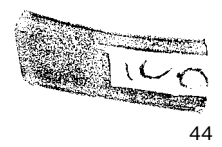
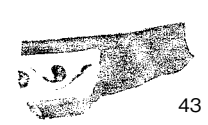
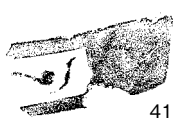
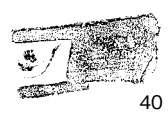
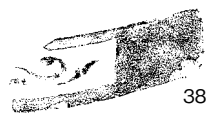
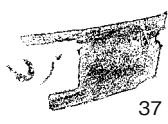
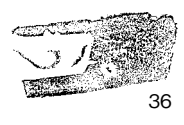
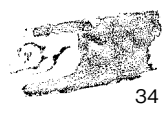
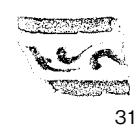
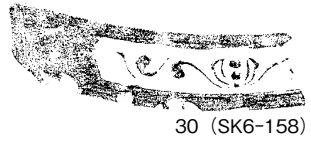
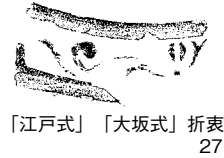
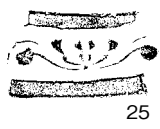
1. 棧瓦は図示していないが、刻印のみ取り上げた資料には含まれている。55、73は棧瓦であり、平部切込が確認されているものの切込の全長は何れも28mmを測る。これは「江戸式」棧瓦の規格である（石井2008：5）。
2. ここでの最小個体数は、軒平部の瓦当紋様のうち中心飾りが半分以上残存するものをカウントした数字である。
3. 少なくとも刻印を記すための印章は、その多くは木製と考えられ、一定期間使用された後は使用者の生産活動の終了や物理的な破損などによって使用されなくなったと考えるのが自然である。

**【引用・参考文献】**

- 石井龍太 2008「溶姫御殿と幕末近世瓦～瓦文化と近世アジア世界～」『江戸遺跡研究会会報』No.112：2-8、江戸遺跡研究会
- 追川吉生 2002「2 総合研究棟（文・経・教・社研）地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報3 1998・1999年度』：14-19、東京大学埋蔵文化財調査室
- 加藤晃 1989「江戸時代の瓦における江戸式の展開」『史学研究集録』第14号：43-61、國學院大學日本史学専攻大学院会
- 加藤晃 1992「江戸瓦の変遷－加賀藩本郷邸出土の瓦について－」『國學院雑誌』第九十三卷第十二号：78-97、國學院大學
- 金子智 2000「9.瓦から見た江戸と国元」『江戸遺跡研究会第13回大会 江戸と国元 発表要旨』



3 図 軒棧・軒平瓦 (1)



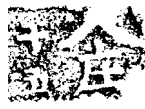
4 図 軒棧・軒平 (2) ・熨斗瓦



55



56



57



58



59



60



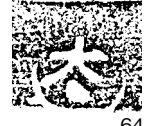
61



62



63 (SK6-172)



64



65



66



67



68 (SK6-173)



69



70



71



72 (SK6-156)



73



74



75



76



77



78



79



80



81



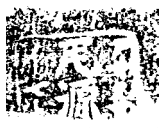
82 (SK14-32)



83 (SK14-33)



84 (SK14-34)



85(A層-20)



86(A層-21)

5 図 刻印

第三章 医学部附属病院受変電設備棟地点の成果

出土遺構	考察図版 No.	図版No	器種	瓦当紋様 分類	出土遺構	考察図版 No.	図版No	器種	刻印
SK6	1	150	軒平瓦	I Aa	SK6	55		軒棧瓦	やまに「庄」
SK6	2	151	軒棧瓦	II KJ	SK6	56		軒平瓦？軒棧瓦？	やまに「庄」
SK6	3	152	軒棧瓦	II KJ	SK6	57		軒平瓦？軒棧瓦？	やまに「庄」十五
SK6	4		軒棧瓦	? KJ	SK6	58		丸瓦	丸に「庄」
SK6	5		軒棧瓦	? Ia	SK6	59		軒平瓦？軒棧瓦？	丸に「庄」
SK6	6		軒棧瓦	I KJ	SK6	60		軒平瓦？軒棧瓦？	丸に「サ」
SK6	7	153	軒棧瓦	II KJ	SK6	61		軒平瓦？軒棧瓦？	四角に「音」
SK6	8		軒棧瓦	? KJ	SK6	62		軒平瓦？軒棧瓦？	村田
SK6	9		軒棧瓦	? KJ	SK6	63	172	軒平瓦？軒棧瓦？	「太」
SK6	10	154	軒棧瓦	東海式	SK6	64		軒平瓦？軒棧瓦？	丸に「太」
SK6	11	155	軒平瓦？軒棧瓦？	I Bd	SK6	65		軒平瓦？軒棧瓦？	丸に「太」
SK6	12		軒平瓦？軒棧瓦？	I KJ	SK6	66		軒平瓦？軒棧瓦？	「太」
SK6	13		軒平瓦？軒棧瓦？	I KJ	SK6	67		軒平瓦？軒棧瓦？	丸に「太」
SK6	14		軒平瓦？軒棧瓦？	II KJ	SK6	68	173	軒平瓦？軒棧瓦？	丸に「源」
SK6	15		軒平瓦？軒棧瓦？	II KJ	SK6	69		軒平瓦？軒棧瓦？	丸に「正」
SK6	16	156	軒平瓦？軒棧瓦？	II KJ	SK6	70		軒平瓦？軒棧瓦？	丸に文字
SK6	17	157	軒平瓦？軒棧瓦？	II新 a	SK6	71		軒平瓦？軒棧瓦？	やまに「ト」
SK6	18		軒平瓦？軒棧瓦？	IV Fa	SK6	72	156	軒平瓦？軒棧瓦？	四角に「三浦屋」
SK6	19	159	軒平瓦？軒棧瓦？	IV KJ	SK6	73		軒棧瓦	記号
SK6	20		軒平瓦？軒棧瓦？	新 Kg	SK6	74		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	21		軒平瓦？軒棧瓦？	II Fl	SK6	75		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	22		軒平瓦？軒棧瓦？	IV J?	SK6	76		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	23		軒平瓦？軒棧瓦？	新 K?	SK6	77		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	24		軒平瓦？軒棧瓦？	III ??	SK6	78		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	25		軒平瓦？軒棧瓦？	II J?	SK6	79		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	26		軒平瓦？軒棧瓦？	I J?	SK6	80		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	27		軒平瓦？軒棧瓦？	大坂式？ KJ	SK6	81		軒平瓦？軒棧瓦？	記号
SK6	28		軒平瓦？軒棧瓦？	II Jj	SK14	82	32	軒丸瓦	丸に「太」
SK6	29		軒平瓦？軒棧瓦？	新 Kg	SK14	83	33	丸瓦	篆刻
SK6	30	158	軒平瓦？軒棧瓦？	III J f	SK14	84	34	平瓦	丸に「一」
SK6	31		軒平瓦？軒棧瓦？	? KJ	A層	85	20	棧瓦？平瓦？	アワサ瓦源イド
SK6	32		軒平瓦？軒棧瓦？	? KJ	A層	86	21	棧瓦？平瓦？	丸に「十」
SK6	33		軒平瓦？軒棧瓦？	? K?					
SK6	34		軒平瓦？軒棧瓦？	? Bj					
SK6	35	160	軒平瓦？軒棧瓦？	?Fa					
SK6	36		軒平瓦？軒棧瓦？	? Fa					
SK6	37		軒平瓦？軒棧瓦？	? Fa					
SK6	38		軒平瓦？軒棧瓦？	? Ij					
SK6	39		軒平瓦？軒棧瓦？	? Jg					
SK6	40		軒平瓦？軒棧瓦？	? Kf					
SK6	41		軒平瓦？軒棧瓦？	? KJ					
SK6	42		軒平瓦？軒棧瓦？	? KJ					
SK6	43		軒平瓦？軒棧瓦？	? Lj					
SK6	44		軒平瓦？軒棧瓦？	? Ga					
SK6	45	165	鬘斗瓦	15類					
SK6	46	166	鬘斗瓦	18類-1					
SK6	47	167	鬘斗瓦	15類					
SK6	48		鬘斗瓦	19類(新)					
SK6	49		鬘斗瓦	19類					
SK6	50		鬘斗瓦	15類					
SK6	51		鬘斗瓦	18類-3					
SK6	52		鬘斗瓦	18類-1					
SK6	53		鬘斗瓦	18類-4					
SK6	54		鬘斗瓦	17類-1					

1表 瓦当紋様・刻印表



## 医学部附属病院受変電設備棟地点 SK6 の数量分析について

大貫 浩子

### はじめに

遺跡における数量分析は様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（ここでは推定個体数100個体以上を対象とした。）を必要とする。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）により、特定部位の数量を数えた。医学部附属病院受変電設備棟地点（YM）において、100個体以上の陶磁器・土器が出土した遺構はSK6のみであった。SK6は本地点中央にある大きな土坑で、SK9を切っている。

出土陶磁器・土器の全体総数は343個体。内、蓋44個体である。身と対になる蓋44個体を除いて陶磁器・土器の分析対象は299個体である（3表）。その他に人形・玩具5個体が出土している。

陶磁器・土器を東大分類、東大編年に基づいて分析してゆきたい。

### 1. 遺物から見た年代的位置づけ（3表）

東大分類、東大編年に基づいて、年代を考察した。磁器について、碗はJB-1-a、1-e、1-f、1-g、1-j、1-l、1-m、1-n、1-o、1-p、1-u、JC-1-a、1-d、1-e、1-f。皿はJB-2-e、2-f、2-g、2-i、2-j、2-k、2-l、2-m、2-o、2-q、JC-2-b、2-d、2-e、で構成されている。磁器碗は83個体の内、瀬戸・美濃系が50個体を占める。その中でも端反碗（JC-1-d）が29個体と非常に多い。大法量のものから小法量のものまで出土しており端反碗の中でも時間差が認められるが、空間を線書きで埋めるような文様構成を持つものや小振りのものが多く見られⅧc期以降の様相を示しているものが多い。また、Ⅷb期以降に比定されている湯呑碗（JC-1-e）も11個体と多い。肥前系は33個体で端反碗（JB-1-n）や湯呑碗（JB-1-o）などⅧ期以降の様相を示すもの以外にやや古手のものが見受けられ薄手半球碗（JB-1-f）などがみられる。皿は肥前系一枚絵の輪花皿で蛇ノ目凹形高台で高台高が高い皿（JB-2-i）4個体と「U」字状高台の皿（JB-2-q）6個体がⅧ期以降の様相を示している。瀬戸・美濃系では寿文皿（JC-2-d）がⅧd期の指標陶器で、陽刻型皿（JC-2-e）はⅧc期にピークを迎える。他にⅧd期以降にピークを迎える瀬戸・美濃系寿文字坏（JC-6-e）がみられる。

陶器について、碗は肥前系が6個体で、いずれもⅣ期・Ⅴ期頃の様相を示す。また瀬戸・美濃系は、TC-1-c、1-f、1-g、1-p、1-q、1-r、1-u、1-v、1-w、1-af、22個体で構成されており、灰釉薄丸碗（TC-1-c）が10個体と多い。Ⅳ期～Ⅶ期の幅広い様相を示すが、他の器種ではつけ掛けの灰釉徳利（TC-10-c）17個体、ぺこかん徳利（TC-10-g）2個体や植木鉢（TC-21）2個体などⅧ期以降の様相を示すものが多い。京都・信楽系では、碗は文様がかなり退化している小杉茶碗（TD-1-d）6個体、貫入端反碗（TD-1-g）2個体、体部の窪んだ灰釉碗（TD-1-k）1個体など、皿は灰釉皿（TD-2-a、TD-2-b）4個体でいずれもⅧ期の様相を示す。

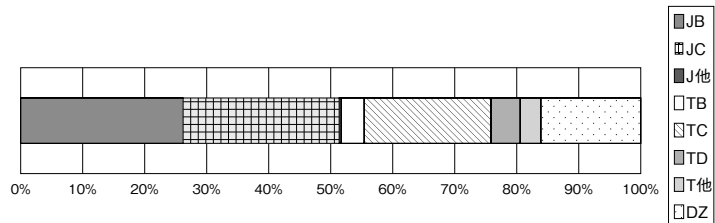
土器については、植木鉢（DZ-21-a、DZ-21-b）10個体やロクロ成形無印の塩壺（DZ-51-w）8個体で構成されⅧ期に比定されている。

Ⅸ期以降に見られる、コバルトによる型紙刷りの碗が全く入っていない。古い時期ではⅣ期～Ⅶ期

の幅広い時期の陶磁器が一定量は見受けられるが、本遺構の出土資料はⅧ期 b～d（1820～1860年代）を中心とする遺物群であろう。

## 2. 胎質別、産地別、組成的特徴について（1表）

胎質別では磁器 154 個体、陶器 97 個体、土器 48 個体が出土している。比率で表すと 52%：32%：16% となり、磁器が全体の約半数を占める。Ⅶ期までは磁器の占める割合は 3 割ほどであるが、Ⅷ期になると瀬戸・美濃系磁器の出現により、約 5 割ほどに上昇しⅨ期にかけて磁器と陶器の量比が逆転する。本遺構の様相は磁器が全体の 52% でⅧ期の様相であると言える。



1表 SK6における産地別構成比

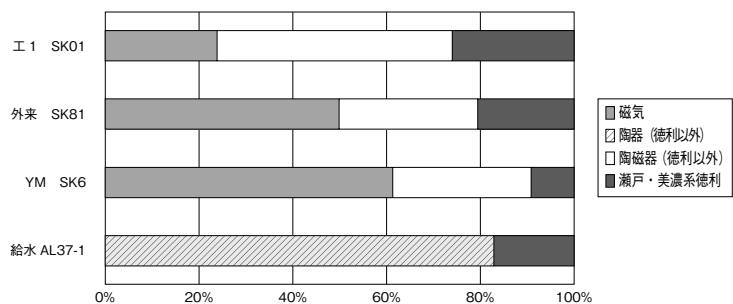
産地別では磁器は、肥前系が 78 個体、瀬戸・美濃系が 75 個体、淡路系が 1 個体出土している。肥前系と瀬戸・美濃

系の比率は 51：49 でほぼ同数である。Ⅷ期に入り瀬戸・美濃系の磁器が焼かれるようになると、肥前系磁器の割合が減って行き、Ⅸ期にかけて肥前系と瀬戸・美濃系の比率が逆転する。本遺構はⅧ期後半の様相に近いと言えるだろう。淡路系の皿は緑釉陶木型打ち込み皿 (JP-2) でⅧc 期以降とされており、他の産地の年代と合致する。陶器は肥前系、瀬戸・美濃系、京都・信楽系、萩系、堺系が出土している。瀬戸・美濃系が 61 個体と一番多くその内Ⅷ期に比定されている灰釉徳利が 23 個体を占める。次いで京都・信楽系 14 個体、肥前系 11 個体と続く。瀬戸・美濃系、肥前系にはやや古手のⅣ期～Ⅶ期の陶器が混じる。

器種組成は、陶磁器では碗 120 個体、皿 40 個体、坏 21 個体などの食膳具、徳利 23 個体、植木鉢 4 個体、御神酒徳利 4 個体、仏飯器 1 個体、餌皿 2 個体が出土している。また、料理屋の仕出しに使われたと思われる、高台内に釘書きのある大皿が 2 個体出土している。土器は灯火具、塩壺 12 個体、植木鉢 10 個体が出土した。磁器では、そろいの碗、皿や料理屋の仕出しと思われる大皿以外の大皿、高級品などは見受けられない。出土した全体の約半数の 181 個体が食膳具でその他の器種も日常生活用具がほとんどである。これらのことから、詰り人空間からの廃棄と考えて良いであろう。また、幕末に近くなるほど緊縮財政となり、高級品などの購入は押さえられ日用品が必要に応じて購入されていたのであろう。

## 3. 東大構内遺跡の他地点との比較（2表）

工学部一号館地点 SK01 は加賀藩邸内に位置し、Ⅷa 期に比定されている（東京大学埋蔵文化財調査室 2005b）。磁器と陶器の割合は 1：3 である。陶器の比率が高く、ほとんどが日常的な食膳具で占められており、詰り人空間からの廃棄とされている。陶磁器の中における徳利の占める割合は 26% である。



2表 陶磁器に占める瀬戸美濃徳利の割合

医学部附属病院外来診療棟地点 SK81 は大聖寺藩邸内に位置し、Ⅷ b 期に比定されている（東京大学埋蔵文化財調査室 2005a）。磁器と陶器の割合は 1 : 1 で、陶磁器の中における徳利の占める割合は 21% である。

給水地点 AL37-1 は榊原邸内に位置しⅨ期に比定されている（東京大学遺跡調査室 1990）。出土している陶磁器の組成は本遺構に近いものも多いが、Ⅸ期の遺物を含んでいる。陶磁器の中における徳利の占める割合は 17% である。

本遺構の磁器と陶器の割合は 2 : 1 である。Ⅷ期に入り次第に磁器の比率が上がっているのが分かる。前後の時期の遺構では 20% 前後なのに比べ本遺構は徳利の比率が 9% と低い。本遺構はⅧ b ~ d 期（1820 ~ 1860 年代）を中心とする遺物群と考えているが、本地点でゴミ穴として機能していた場合、遺物の年代幅があるということは、遺構の開口期間が長いということである。短期間に大量に廃棄される徳利は、他の遺構より廃棄量が多くても良いはずである。しかし、本遺構は前後の遺構と比べても半分に満たない。本地点でゴミ穴として機能していたとするならば、徳利を廃棄するのに一定の決まりがあり本地点にはあまり廃棄しなかった作為的廃棄が考えられる。もう一つは、本地点で廃棄されたのではなく土と共に他の場所から持ってこられた二次廃棄なのではないかということである。徳利のみ作為的に廃棄されていたとは、やはり考えにくい。

本地点の土地利用については、絵図に谷御仲間小屋・谷御境目小屋と呼ばれる長屋が建っていた記載がある。（本編 3 節「医学部附属受変電設備棟地点と確認された低地の土地利用状況と明治時代の造成と雨水処理」参照）幕末近くまでこの小屋の記載があるため小屋が壊された後、本遺構が掘削され比較的短期間に他から持ってこられた土によってまた埋め戻された可能性が高い。遺構の中にⅨ期の遺物は見られず、盛土とは明らかに区切ることができる。

#### 【引用・参考文献】

東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2005a 『医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書 5

東京大学埋蔵文化財調査室 2005b 『工学部一号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書 7





## 医学部附属病院受変電設備棟地点と確認された 低地の土地利用状況と江戸時代以降の造成と雨水処理

原 祐一

### はじめに

医学部附属病院受変電設備棟地点は東京大学本郷地区の東端、弥生門の南側に位置する。調査地点の東側は文京区本郷と文京区弥生の境で石垣が築かれている。町境の「弥生町通り」（東京帝國大學平面圖より）は「言問通り」から湯島へ至る約 300 m の直線道路で（「言問通り」も「弥生町通り」と記されている）、明治時代「言問通り」ともに、加賀藩邸と駒込邸の地境を変更し造成した道路である。湯島へ至る通りは別名「暗闇坂」と呼ばれ、「言問通り」の坂は「鉄砲坂」（別名「弥生坂」（旧町名向ヶ岡弥生町を由来とする））と呼ばれる。文京区の解説板に坂の名称は水戸藩駒込邸（中屋敷 以下、駒込邸）の道、幕府の射的場があった事を由来とすると記されている。しかし、絵図、切絵図に駒込邸内の道、角場は確認できない。名称由来は明治 10（1877）年に演習を開始、明治 21（1888）年に大森に移転した射的場で、射場の防護壁と台地の間を通した道は文字通り「暗闇」となったことから名づけられた。

射的場移転後の明治 41（1908）年、東京朝日新聞、大阪朝日新聞に掲載された夏目漱石の『三四郎』に「弥生門通り」が登場する。「午後四時頃高等学校の横を通過して弥生町の門からはいった。往来埃が二寸も積っていて、その上に下駄の歯や、靴の底や、草鞋の裏が奇麗にでき上がっている。車の輪と自転車の痕は幾筋だか分からない。むっとするほど堪らない路だったが、構内へはいるとさすがに樹の多いだけに気分が晴々した。」とある<sup>(註1)</sup>。「言問通り」から「弥生町通り」、「弥生町の門」から大学構内へ至る景観、道路事情が描写されている。道路は、ぬかるんでいた様子で当時の廃水状況をうかがうことができる。

江戸時代の調査地点は加賀藩邸と駒込邸の地境、加賀藩邸側の東端低地に位置する。本論では、周辺部を含めた江戸時代の土地利用状況、江戸時代から現在までの造成と雨水の処理について検討を行う。

### 1. 江戸時代の絵図と調査地点（1表）

加賀藩邸の絵図から江戸時代の調査地点について検討を行う。宮崎勝美氏は山上会館・御殿下記念館地点の報告書で加賀藩の絵図を検討している<sup>(註2)</sup>。宮崎氏が分析を行った「加賀藩本郷邸とその周辺」（3表 pp.45-46、写真 1～37）に掲載された 27 枚の絵図から、調査地点周辺の地形（崖・道）・建屋（谷御仲間小屋・谷御境目小屋）・他の施設・井戸の表現に注目し検討を行った。図番号は宮崎論文に対応する。施設の名称は図番号 21「江戸御上屋敷絵図」の「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」の名称を用いる。

図番号 21「江戸御上屋敷絵図」、「向陵彌生町舊水戸邸繪図面」（筆者蔵 文政 9（1826）年墨書）によれば、調査地点は加賀藩と駒込邸の地境と「御歩町」の長屋が並ぶ台地の下（絵図の表現方法と現在の地形、明治時代以降の地図から台地の下と判断）、育徳園の池排水路に囲まれた区域である。台地上の「御歩町」の敷地から低地に至る道が 4 本描かれ、2 棟の建物が弧状の地境に沿って「く」の字に配置されている。東側の建物は「谷御仲間小屋」西側の建物は「谷御境目小屋」でそれぞれ 6 部屋に区画され間口の間数が記載されている。建屋と地境の間、点線で区画された部分は各部屋の裏庭と考えられる。そのため加賀藩邸と駒込邸の地境は、「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」を目隠しするため塀が築かれたと考



えられる。

図番号1「江戸御上屋敷絵図」（尊経閣文庫 無番 1688年？）に施設は描かれていない。図番号3「前田本郷御屋敷舗図」（財団法人三井文庫蔵 C827-18 1761-1771年）以降継続して描かれている。2棟が直行して配置された絵図、「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」と2棟の建物が描かれた絵図もある。敷地に施設が描かれているのは、図番号3「前田本郷御屋敷舗図」（1761-1771年）以降で、「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」が「く」の字に配置された施設は例外もあるが図番号27「上中下屋敷絵図」（1863-1868年）まで継続して描かれている。

## 2. 明治時代以降の調査地点

2～7図に調査地点周辺の地図、東京大学図面、1図に明治16年の土地利用状況を示した。建設省国土地理院所蔵・(財)日本地図センター複製1984「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』以下「明治16年陸軍参謀本部測量元図」では加賀藩邸と駒込邸の地境が直線道路に変更されている。駒込邸側は「本郷區 向ヶ岡弥生町」で「東京共同射的公司」射的場（宮内庁用地）、「弥生舎」（警視庁用地）、「東京府癲狂院」「東京府避病院」（東京府用地）などの施設がある。「文部省用地」は門から旧育徳園に延びる道によって東西に区画される。道を挟んだ西側敷地には建物が建設され、調査地点が位置する東側の敷地には施設はなく「荒」と記載されている。「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」の配置されていた敷地は地境が直線に変更されている。「弥生町通り」と文部省用地の地境は、南側が土手、調査地点の敷地は柵で区画されている。

明治16（1883）年文部省用地を東西に区画していた道は明治39-40（1906-1907）年の「東京帝國大學平面圖」では門から延びる道が現在の理学部1号館へ向かって延びる道に変更され敷地の西側が削平される。敷地の地形は江戸時代のままの崖下だったが、昭和2（1927）年から昭和5年の間に盛土が行われ<sup>(註3)</sup>、「弥生通り」側の地境に石垣が設置され現在に至る。石垣の積み方はこの部分で異なっている。

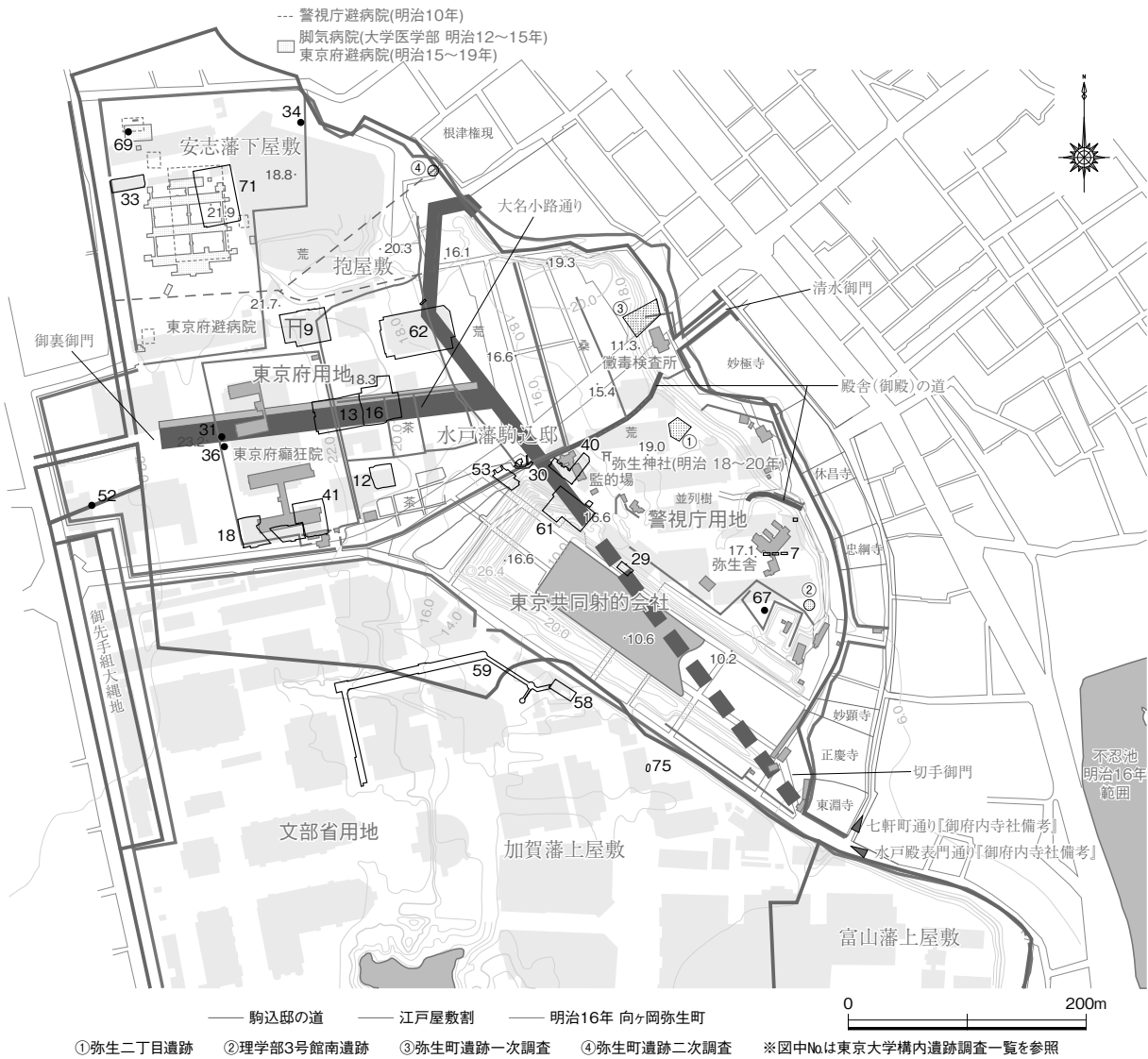
第三章 医学部附属病院受変電設備棟地点の成果

絵図表題 (所蔵・架蔵 NO)	推定年代・年代	地形 (崖・道)	谷御仲間小屋	谷御境目小屋	他の施設・井戸の表現
1. 加賀本郷第図 (※ 8 無番)	1688 ?	崖・道 (1)	無	無	1 棟が崖に重なって描かれる
2. 上屋敷敷地略図 (※ 8 8071 旧函)	1687-1702	崖・道 (1)	直行する五棟の建物が水戸藩駒込邸地境と育徳園の池排水に重なって描かれる		
3. 前田本郷御屋敷舖図 (※ 9 C827-18)	1761-1771	崖・道 (4)	有	有	他 2 棟、井戸 3 基 (○)
4. 江戸御上屋敷図 (※ 8 8093)	1772-1777	無	有	有	他 3 棟
5. 江戸上屋敷御貸長屋図 (※ 2 特 16.18-137)	1772-1782	崖?	有	有	他 2 棟、井戸 (●)
6. 江戸本郷屋敷之図 (※ 2 090-494-2)	1772-1789	無	1 棟「此一筋足軽等ノ小ヤ」		
7. 上屋敷総絵図 (※ 8 8079 旧外)	1772-1777 (元図)、 1789-1792 (加筆後)	崖・道 (4) ?	有	有	他 2 棟
8. 加藩本郷屋敷絵図 (※ 1 H43-3)	1792-1796		有	有	井戸 2 基
9. 江戸本郷御上屋敷絵図 (※ 3 特 13.0-75-2-2)	1792-1796		有	有	井戸 1 基
10. 加藩江戸本郷屋敷総絵図 (※ 1 H43-4)	1792-1796	崖・道 (4) ?	有	有	16 絵図「射場」部と同じ滴形の敷地、井戸 3 基 (●)
11. 東都御館諸士等小屋割図 (※ 6 特 19.9-169)	1796-1802	崖・道 (2) ?	1 棟「此一筋足軽等ノ小ヤ」		地境の外、水戸藩駒込邸敷地に松が描かれる
12. 東都本郷御館御郭内小屋割図 (※ 8 8086)	1800		有	有	
13. 前田本郷屋敷略図 (※ 5 095.0-85)	1803-1806	崖・道 (3)	有	有	
14. 江戸上屋敷小屋絵図 (※ 4 特 16.18-136)	1792-1796 (元図)、 1802-1825 (加筆修正後)	崖・道 (4)	有	有	16 絵図「射場」部と同じ滴形の敷地、井戸 3 基、井戸 2 基 (○)
15. 加藩江戸本郷屋敷総絵図 (※ 1 H43-5)	1807-1825 (1813 ?)	崖・道 (4)	有	有	16 絵図「射場」部と同じ滴形の敷地、井戸 2 基 (○)
16. 江戸本郷御上屋敷絵図 (※ 3 特 13.0-75-2-1)	1802-1825	崖・道 (4)	有	有	滴形の敷地に「射場」、井戸 3 基 (●)
17. 江戸本郷上屋敷之図 (※ 4 特 16.18-134)	1802-1825	崖・道 (4)	有	有	16 絵図「射場」部と同じ滴形の敷地、井戸 3 基 (●)
18. 本郷御屋敷惣絵図 (※ 2 090-853)	1802-1825 (1821 ?)	崖・道 (4)	有	有	井戸 3 基 (●)
19. 御上屋敷御囲并御小屋割図 (※ 4 特 16.18-135)	1806-1825	崖・道 (4)	有	有	
20. 本郷邸図 (※ 8 8087)	1827-1829	崖・道 (4)	有	有	
21. 江戸御上屋敷絵図 (※ 7 特 18.6-27-1)	1804-1845	崖・道 (4)	有	有	便所 4 棟、井戸 3 基 (○)
22. 前田家本郷屋敷之図 (※ 5 095.0-86)	1845-1851	崖・道 (4)	有	有	便所 4 棟、井戸 3 基 (○)
23. 加藩江戸本郷屋敷総絵図 (※ 1 H43-2)	1845-1851	崖・道 (4)	有	有	
24. 東都御屋敷略図 (※ 3 特 13.0-75-3)	1863	無	1 棟		
25. 本郷邸之図 (※ 8 無番)	1863	無	有	有	
26. 江戸本郷邸図 (※ 8 無番)	1863-1868	無	有	有	便所 4 棟、井戸 1 基 (○)
27. 上中下屋敷絵図 (※ 8 8110 旧函「上中下屋敷絵図」の内)	1863-1868	崖・道 (4)	有	有	便所 4 棟、井戸 1 基 (○)

「谷御仲間小屋」と「谷御境目小屋」の名称は「21. 江戸御上屋敷絵図」より。絵図によって建物の記述が異なる場合、「谷御仲間小屋」と「谷御境目小屋」と同じ配置で 2 棟の建物が配置されている場合「有」とした。●○は井戸の表現の違い

- ※ 1 石川県歴史博物館 大蔵コレクション
- ※ 2 金沢市立図書館
- ※ 3 金沢市立図書館 氏家文庫
- ※ 4 金沢市立図書館 加越能文庫
- ※ 5 金沢市立図書館 河野文庫
- ※ 6 金沢市立図書館 後藤文庫
- ※ 7 金沢市立図書館 清水文庫
- ※ 8 尊経閣文
- ※ 9 三井文庫

1 表 加賀藩絵図谷小屋の変遷



1 図 明治 16 (1883) 年の向ヶ岡弥生町と水戸藩駒込邸、現在の文京区弥生



2 図 「江戸御上屋敷絵図」(金沢市立図書館清水文庫 特 18.6-27-1 1804-1845 年より)



3 図 「参謀本部陸軍部測量局五十分一東京 図測量原図」より作成



「東京帝國大学略図」より作成

4図 明治31-32 (1898-1899)年



「東京帝國大学略図」より作成

5図 明治38-39 (1905-1906)年



「東京帝國大学略図」より作成

6図 明治44-45 (1911-1912)年



「東京帝國大学略図」より作成

7図 昭和5 (1930)年

### 3. 遺跡の概要と各面の遺構 (2表・9図)

8図に調査地点が位置する加賀藩邸と駒込邸の絵図の地境周辺部分と調査地点の全体図、絵図、遺構の軸を示した。絵図と全体図を重ねなかったのは調査地点が「谷御仲間小屋」のどの部分に該当するかを明確にするための起点となる遺構を明確にすることができなかったため、地境の復元についても同じ理由で行っていない<sup>(註4)</sup>。絵図は「谷御仲間小屋」の間口の間数をもとに調査地点の全体図と縮尺を合わせた。駒込邸の絵図は加賀藩邸の絵図に縮尺を合わせた。表2に調査時の遺構検出状況、出土遺物の製造年代から検討した生活面の下限年代(盛土・A面・B面・C面・D面・E面)、遺構の軸を示した。遺構の軸は、

「弥生町通りの軸」：現在の「弥生町通り」に直行もしくは平行する遺構

「谷御仲間小屋の軸」：「谷御仲間小屋」に直行もしくは平行する遺構

「加賀藩邸・駒込邸地境 軸1」

「加賀藩邸・駒込邸地境 軸2」

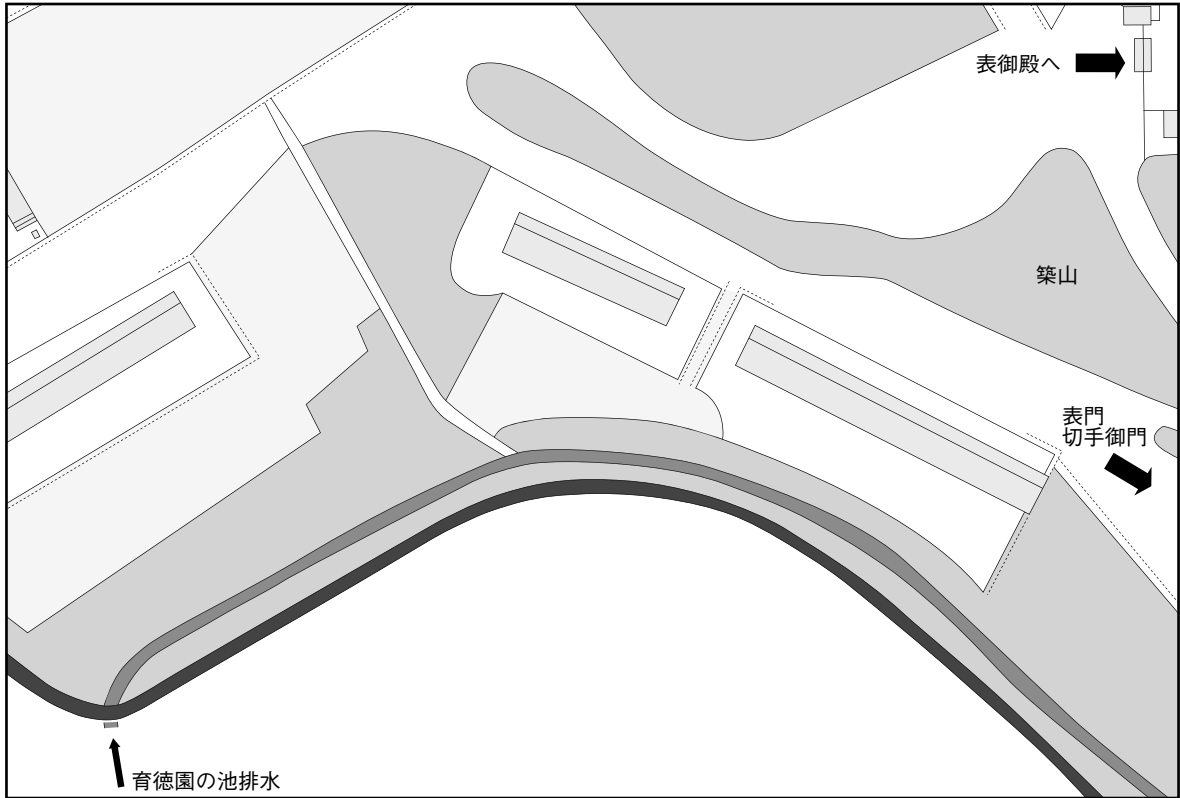
の4軸である。加賀藩邸と駒込邸の地境は調査地点の東側部分のみ弧を描いている。弧の頂点と左右の弧の始まりを直線で結び「加賀藩邸・駒込邸地境 軸1」「加賀藩邸・駒込邸地境 軸2」とした。これらの軸の遺構は弧を描く地境に合わせて掘削されたと考えられるため図に示した軸の傾きと必ずしも合致しないため、2つの軸に近い遺構として検討した。各軸の遺構として抽出した遺構は石垣、礎石など軸が明確な遺構で平面形が不整形、小規模な遺構は「その他」とした。

盛土 昭和2(1927)年～昭和5(1930)年まで

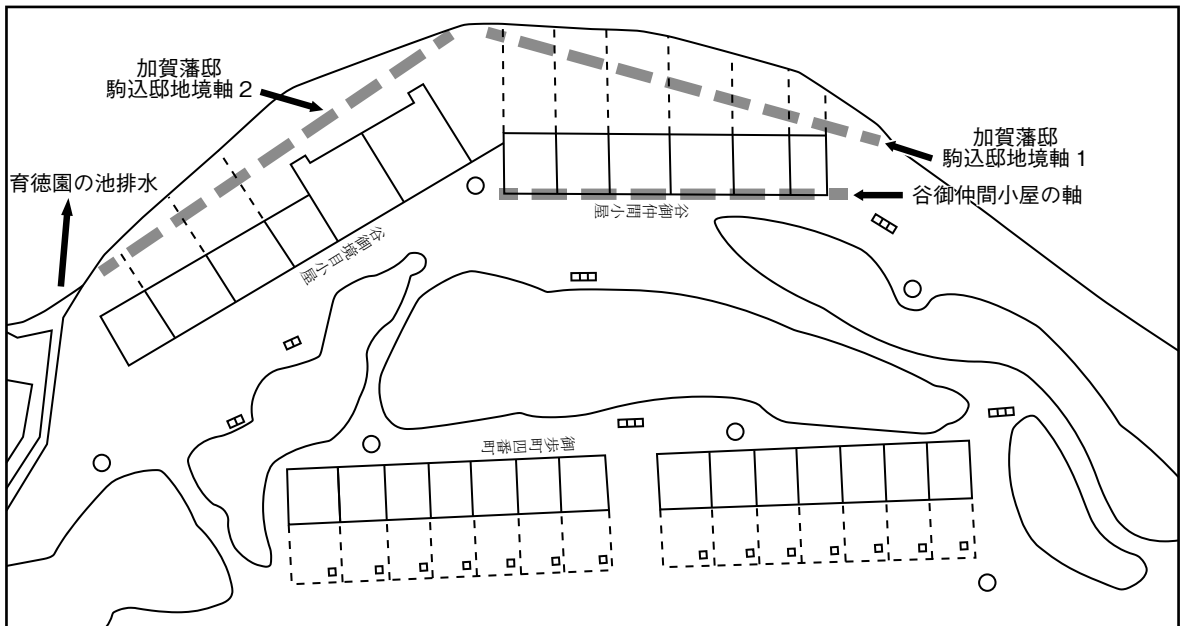
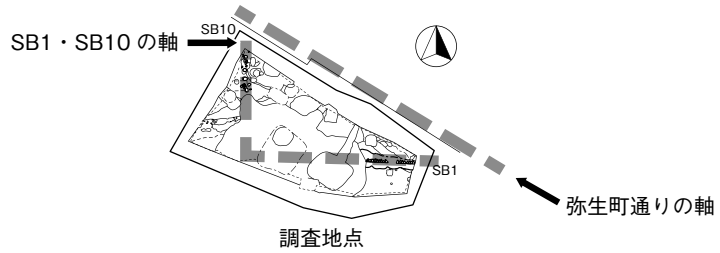
昭和2(1927)年から昭和5年の間に崖下の低地に盛土が行われ「弥生町通り」側に土留めの石垣が築かれる。「盛土」出土遺物はこの造成時に廃棄された大学のごみを中心とした遺物群であるが、その後も、ゴミ捨て場として使用されており昭和5(1930)年以降の遺物の混入もみられる。

面	下限年代(層の年代)	軸				その他の遺構
		弥生町通りの軸	SB1,SB10(谷御仲間小屋の軸)	加賀藩邸・駒込邸地境 軸1	加賀藩邸・駒込邸地境 軸2	
盛土	昭和2(1927)年～昭和5(1930)年					
A面	19世紀初頭頃	SX2, SK6	SB1, SB8-1・2			
B面	18世紀前葉から18世紀中葉		SB10, SU14	SD11		SK9, SP12, SP13, SK15, SK16, SK17, SK19, SK20, SK21
C面	17世紀後半頃		SK32, SB54		SD38	SK22, SK26, SK28, SK29, SB30, SK33, SP34, SK36, SB40, SK41
D面	17世紀中葉頃				SK56	SK5, SK43, SD39, SK46, SD47, SK48, SK52
E面	17世紀中葉頃					SK44, SK51

2表 遺構面・軸



駒込邸の地境部分『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（筆者蔵 文政9（1826）年墨書）より作成



『江戸御上屋敷絵図』（金沢市立図書館清水文庫 特 18.6-27-1 1804-1845年）より作成 地境部分 8図 遺跡の軸と長屋の軸



#### A面 (9図)

SK6、SX2は「弥生町通りの軸」で、SK6は石垣SB1を切り、遺物の製造年代はⅧ期b～d(1820～1860年代)で「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」が撤去された後に掘削され短期間で埋められたと考えられる。

SB1、SB8-1・2は「谷御仲間小屋の軸」である。石垣SB1は検出状況から排水溝でなく盛土を土留めした石垣で、面側には道と考えられる硬化面が広がっている。盛土と石垣によって嵩上げが行われている。絵図の「谷御仲間小屋」と道の位置関係、調査で確認したSB1と道の位置関係が合致することから絵図の土地利用状況を示すと考えられる。「谷御仲間小屋」は盛土によって嵩上げされ、道より高い位置に建設されたと考えられる。SB8-1・2は「谷御仲間小屋」の奥行きから推定すると裏庭を区画する施設と考えられる。

#### B面 (9図)

18世紀前葉から18世紀中葉を下限とする。礎石SB10は「谷御仲間小屋の軸」、溝状遺構SD11は「弥生町通りの軸」に近い。しかし、この年代では「弥生門通り」は存在しないため「加賀藩邸・駒込邸地境 軸1」とした。礎石SB10は「谷御仲間小屋」の建物と加賀藩邸と水戸藩駒込邸の間、裏庭と考えられる部分、点線で表現された区画線のどれかに該当すると考えられる。SK9出土遺物は瀬戸・美濃系陶器五合徳利や志戸呂系陶器徳利の器形から18世紀前半の遺物で、土坑SK9と溝状遺構SD11は建屋がない図番号3「前田本郷御屋屋舗図」(1761-1771年)以前の状況を示す可能性がある。

#### C面 (9図)

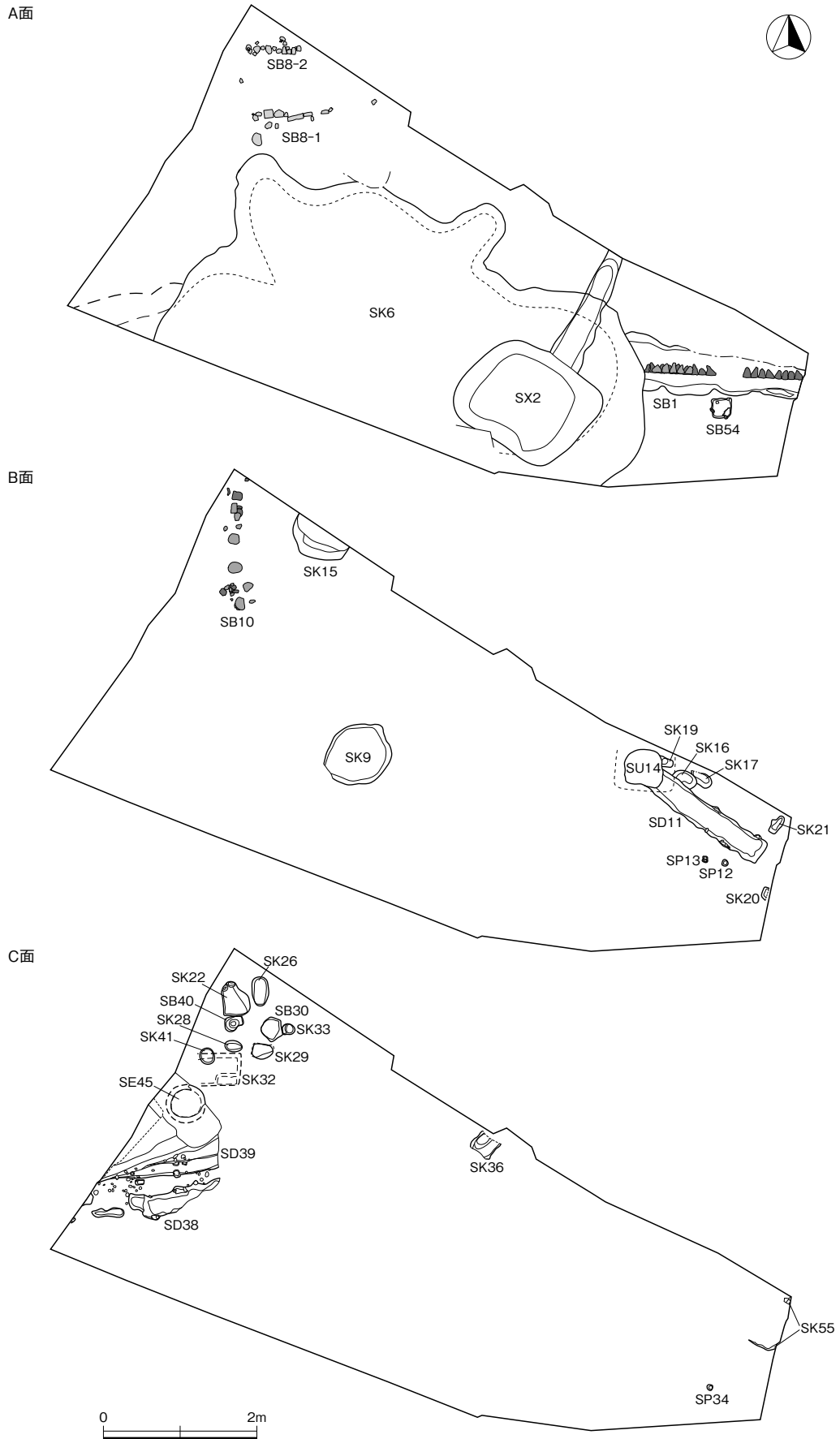
17世紀後半頃を下限とする。礎石、井戸、比較的大型の土坑SK43、SK52を検出している。溝SD38、溝SD39は「加賀藩邸・駒込邸地境 軸1」である。

#### D面 (10図)

17世紀中葉頃を下限とする。土坑、溝状遺構を検出している。

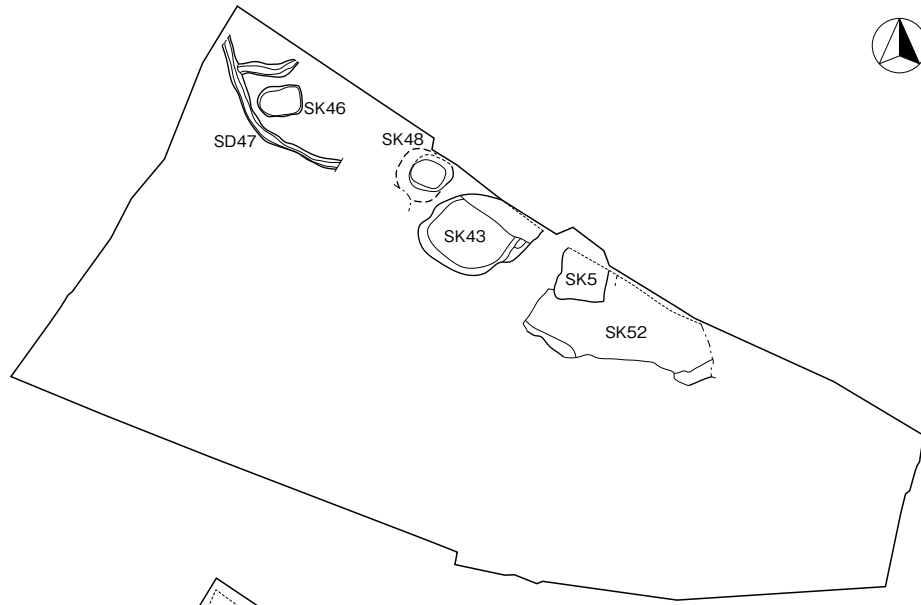
#### E面 (10図)

17世紀中葉を下限とする。SK51は比較的大型の土坑である。SK55は「加賀藩邸・駒込邸地境 軸2」である。

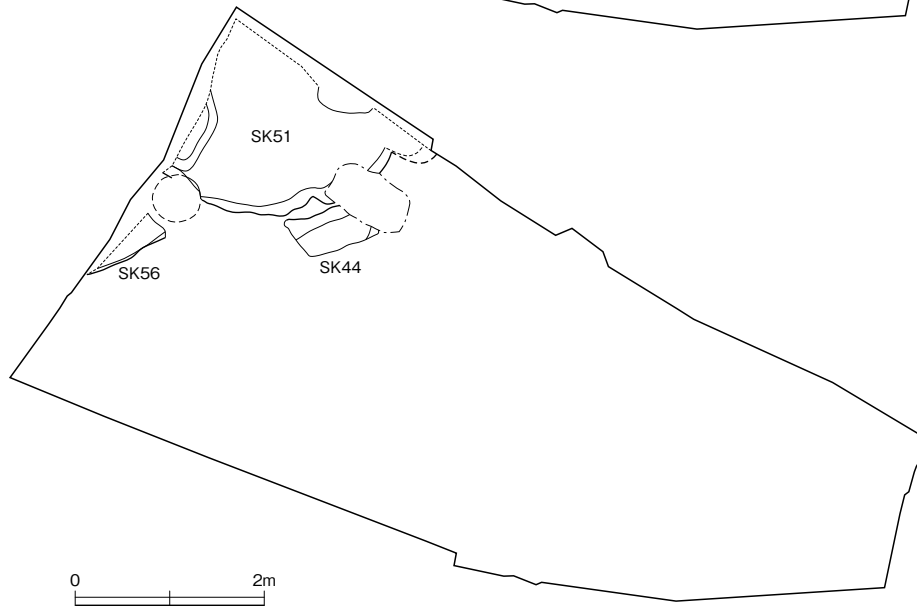


9図 変遷図(1)

D面



E面



9図 変遷図 (2)

## まとめ

調査地点の大部分を占める SK6 が掘削されていること、遺構軸が複数存在していたため遺構の関連が分かりにくくなっていた。しかし、絵図、明治時代以降の地図を検討することによって江戸時代の土地利用状況、明治時代から現在に至る造成と土地利用状況を確認することができた。調査地点は駒込邸と台地に囲まれた狭い敷地に位置する。遺跡と絵図の検討から A 面・B 面の遺構は、図番号 3「前田本郷御屋屋舗図」(1761-1771 年) 以降の土地利用状況を示している。C 面・D 面・E 面の遺構は崖下に施設が建設される前の図番号 1「江戸御上屋敷絵図」(1688 年?) の土地利用状況を示している。加賀藩邸で台地上で検出する遺構の軸は「御殿空間の軸」「詰人空間の軸」に分かれるが「谷御仲間小屋」「谷御境目小屋」は上記の軸ではなく、弧を描く地境に沿って「く」の字に配置されている。「育徳園の池排水」を挟んだ北側の区域も台地と地境に囲まれた区域で、「御茶水一番」「牢屋」などの施設が地境に沿って建設されている。以上から、台地と地境に囲まれた敷地という狭い土地を有効利用するための建物配置が行われていることが確認できた。

調査地点は加賀藩邸と駒込邸の間にある谷に位置する。この谷は農学部生命科学総合研究棟地点で弥生地区圃場から始まることが明らかになっている。弥生門の裏側を調査した共同溝地点の調査ではこの谷に接続する支谷を検出した<sup>(註5)</sup>。農学部生命科学総合研究棟地点の調査で、加賀藩邸と駒込邸の間の谷は現在も雨水が集まる立地条件であることが、2001 年 10 月 10 日の集中豪雨から明らかになった(11・12 図)。駒込邸では雨水処理のために藩邸を北西から南東に縦断、砂層まで掘削した道(SR1)を造成。他の道は道(SR1)に接続、道(SR1)に雨水が集まるようになっていた。道に集まった雨水は砂層まで掘削されているため地下に浸透し、処理しきれない雨水は不忍池側と根津神社側に排水された。以上から道(SR1)は区画と排水を兼ねた施設と推定した<sup>(註6)</sup>。今回の調査地点は駒込邸の状況と明治 16(1883)年の等高線から、駒込邸側からの雨水、「育徳園の池」の廃水能力を越えた場合雨水、台地上からの雨水が流れ込んだと考えられる。

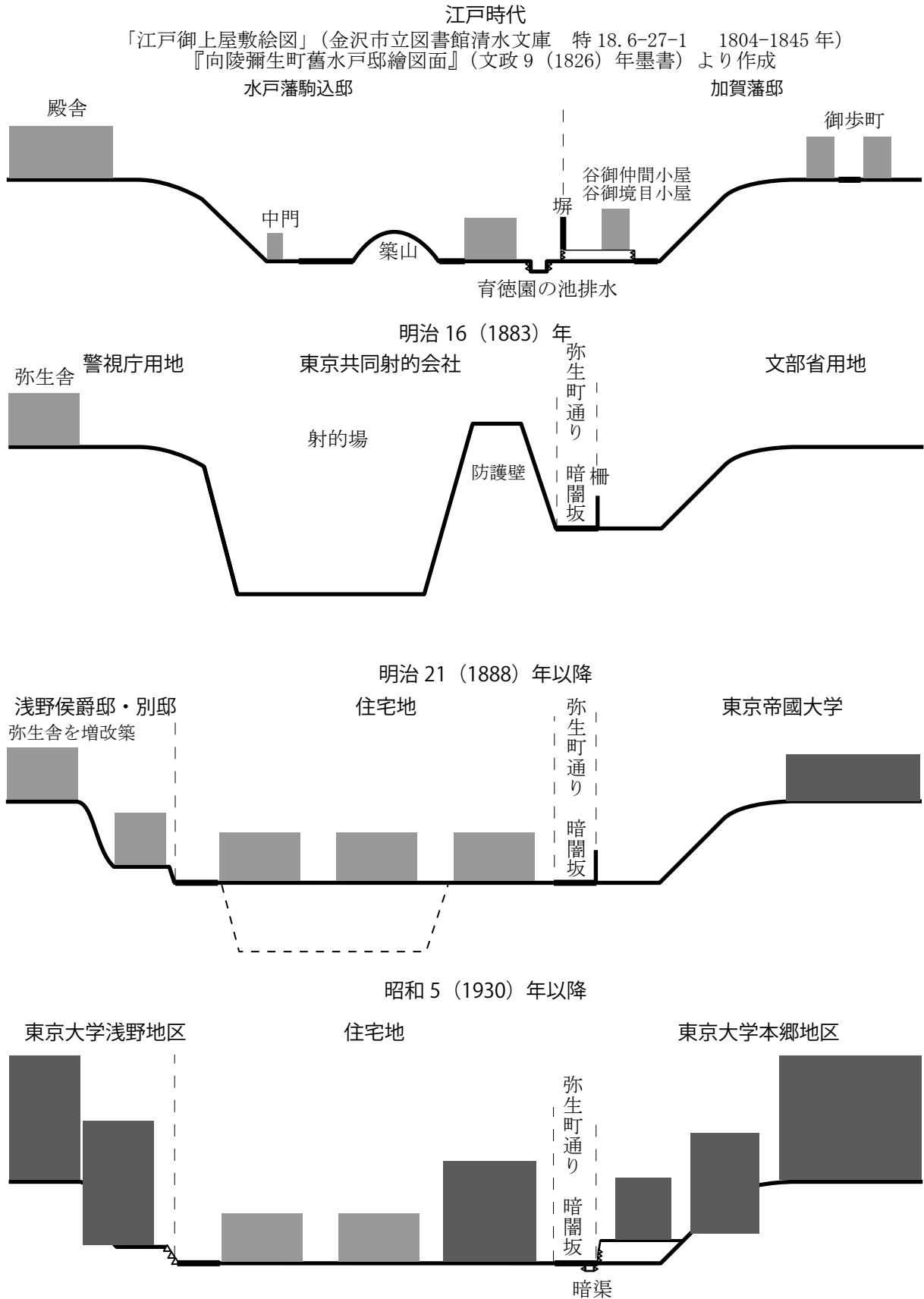
以上から A 面で検出した石垣 SB1 は建物の嵩上げによる雨水対策工事と推定した。加賀藩邸では雨水の集まる洪水が起きやすい狭い敷地を利用せざるをえない状況が読み取れるのに対し、隣接する駒込邸では対照的な土地利用が行われている。台地上に主要施設を建設し低地に雨水処理と邸内の区画を兼ねた道を造成。藩邸南側の表門から「中門」に至る雨水の集まる谷地形を、道と庭園に土地利用することによって土地の有効利用を行っていた。加賀藩側がこのような雨水対策をしていたことから、駒込邸側に流れ込む雨水は大量であったと考えられ、両藩の間で雨水処理に関する取り決めがあったと推定される。



11 図 農学生命科学総合研究棟地点 SR1



12 図 同地点 SR1 の水没(2001 年 10 月 11 日)



13 図 江戸時代から現代までの谷の変遷

次に江戸時代から現在までの調査地点と周辺の土地利用状況、造成と雨水処理について検討する。第13図に江戸時代から現在までの谷の変遷を模式図にした。

#### 江戸時代（文政9（1826）年）

図は「江戸御上屋敷絵図」、「向陵彌生町舊水戸邸繪図面」より作成した。雨水は駒込邸を縦断する道に集められ地下に浸透、処理しきれない雨水は藩邸外へ排水される。加賀藩の雨水は「育徳園の池排水」を通過して駒込邸側の水路を通過して排水される。

#### 明治16（1883）年

図は「明治16年陸軍参謀本部測量元図」より作成した。加賀藩邸側は「文部省用地」、駒込邸側の台地（現、浅野地区）は「警視庁用地」で警視庁の迎賓館といえる「弥生舎」が建設され、射的会の表彰式、法律勉強会などに利用された。谷には「東京共同射的公司」の射的場がある。警視局が上野に明治7（1874）年に建設した射的場が移転したもので、上野の岡の公園化、勸業博覧会開催によって代替施設として向ヶ岡弥生町に建設された。射的場は、明治9（1876）年に建設を開始し、明治10（1877）年1月、小銃射撃演習を開始する。西南戦争終結後、警視庁の射的場が警視庁用地から宮内省用地になり「東京共同射的公司」の射的場となった。射的場は谷を掘削し掘削土を防護壁としている。工事の詳細については明確でないが、5月から開始されたと考えられる工事が年末までかかったのは、谷地形を掘削したことによる湧水の影響、雨水が集まる谷地形のために工事が難航したと考えられる。射的場中央に長方形の池が掘削されているのは、地下水対策と現在の浅野地区側から流れ込む雨水を処理するためと考えられる。「弥生町通り」は雨水が射場の防護壁によって堰き止められるため「言問通り」から流れ込む雨水と文部省用地側の雨水は「弥生町通り」へ流れ込んだと考えられる。

#### 明治21（1888）年以降

向ヶ岡弥生町側が浅野家の土地となり、台地に「浅野侯爵邸」、「浅野侯爵別邸」が建設される。射的場が埋め立てられ浅野家が管理した借家等が建設され住宅地となる。防護壁が削平されたため「弥生町通り」は「暗闇坂」ではなくなる。宅地化に伴い何らかの雨水対策が行われたと考えられる。しかし、『三四郎』には「弥生町通り」について「下駄の歯や、靴の底や、草鞋の裏が奇麗にでき上がっている。車の輪と自転車の痕は幾筋だけ分からない」とある。当時の道路事情は「弥生門通り」に限った事ではないと考えられるが、漱石の『三四郎』の記述から道路はぬかるんでいたと考えられ、雨水処理は明治16（1883）年の状況からそれほど改善されていなかったと考えられる。

#### 昭和2（1927）年以降

調査地点周辺の東京帝国大学側の台地の下に盛土が行われ、「弥生町通り」側に土留めの石垣が築かれる。現在、「弥生町通り」の大学側は暗渠になっている。東京都下水道局によれば現在、雨水は下水道に集められ隅田川に排水されている。

調査地点が位置する谷は、射的場建設と移転に伴う射場の埋め立てによって宅地化する。しかし現在も谷地形のままである。そのため雨水が集まるという立地は変わらない。現在、文京区根津・千駄木地域は洪水被害の多発地帯のひとつで、東京都は洪水対策のため千駄木・弥生地区の雨水を収集・貯蔵するための管渠と雨水調整池の整備を行っている。弥生二丁目の下水道ではないが、弥生1丁目



で1992年5月から1993年4月まで、東京大学弥生地区から地震研究所前、日本医科大学、団子坂通りに至る区道で延長約907mの区間で下水道管渠の工事が行われた<sup>(註7)</sup>。一定規模以上の降雨が生じた場合に内径2.2mの貯水管を兼ねた遮集管渠に雨水を収容、東京大学の野球場北に位置する雨水調整池を経て下流管に放流するもので、遮集管と雨水調整池とで合わせて10,000m<sup>3</sup>の雨水貯留が可能となっている<sup>(註8)</sup>。2001年10月10日、弥生地区の圃場に位置する農学部生命科学総合研究棟地点は集中豪雨により、地表面から約1.5m（道SR1は検出面から更に約5m掘削）掘削された総面積1,800m<sup>2</sup>の調査地点が水没した<sup>(註9)</sup>。弥生地区の雨水は地下に浸透することなく低地に位置する調査地点に集まったため洪水が起きた。江戸時代も現在も雨水が集まる場所という立地は現在も変わらないことが確認できた。気象庁気象統計情報によれば2001年10月10日の東京（北緯35度41.1分・東経139度45.6分）の総降水量は、186mmで、東京都が対応を進めている1時間50mmの降雨に達していない。しかし洪水は起きた。管渠と雨水調整池の雨水処理は弥生地区に関しては機能しなかったのだろうか。2011年から2012年に東京大学が行った東京大学（弥生）農学部3号館西側他舗装改修工事で排水溝の整備が行われた。この工事で雨水処理の問題は解決されたと考えられる。弥生地区には圃場、並木があり、森が残っている。圃場に大量の雨水が流れ込むのと並木の周りを突き固め舗装するのは実験作物や樹木にとって好ましくないのではなかろうか。また、弥生地区の自然が保全されるのは農学研究者の研究環境と周辺住民の住環境にとって決して悪いことでは無いと考える。

調査地点の土地利用状況と現在までの造成と雨水対策を検討した。現在の土木技術は江戸時代の技術とは比べ物にはならないし、それによって災害発生のリスクは低下したとされる。しかし、文京区弥生では、弥生門から町へ流れ込む雨水が問題となっている。明治時代以降本郷地区の雨水対策は江戸時代以下と指摘できる。江戸時代の造成と自然とのかかわりを考えると学ぶ所は多いのではないか。

#### 【註】

1. 夏目漱石 1998『三四郎』集英社文庫第8刷 pp.26-27
2. 宮崎勝美 1990「第1節 加賀藩本郷邸とその周辺」『山上会館・御殿下記念館地点 第3分 考察編』pp.5-46
3. 昭和2（1927）年の図面では調査地点周辺の印刷が不鮮明なため工事が行われたか確認ができないため、図面上、盛土が終了している「昭和2（1927）年から昭和5（1930）年までの間」とした。
4. 調査地点の位置する加賀藩邸と駒込邸の地境の復元はこれまで課題となっていた。文京区弥生の南端、表門があった部分で門の間口の距離、「弥生町通り」開削以前の加賀藩邸側の台地について現地調査と絵図の分析を行っている。今後、当地点の成果と現在進行中の調査と合わせて復元図作成を行う。
5. 年報共同溝の報告
6. 原祐一 2011「第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告 東京大学本郷構内の遺跡農学部生命科学総合研究棟地点発掘調査報告 第4章 農学部生命科学総合研究棟地点の成果」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報7 2007・2008年度』pp.158-169
7. 柳尾政男、前田教昭、福本福幸、関本昇 2000「施工後7年を経過した下水道ECLトンネル 東京都下水道 文京区弥生・千駄木付近下水道」『トンネルと地下 358号』vol.31 no.6 pp.51-56
8. 前田正博、高相恒人、前田教昭、福元福幸、守山享 1993「ECLで密閉型シールドに本格挑戦 都下水道・文京区弥生一丁目、千駄木一丁目間付近枝線工事」株式会社土木工学社『トンネルと地下 273号』vol.24 no.5 pp.7-15
9. この日の集中豪雨について、津口裕茂、榊原均 2005「2001年10月10日佐原・鹿島に豪雨をもたらしたレイ

ンバンドの構造と維持機構』『天気』2005Vol.52, No1 で分析されている。

**【参考文献】**

- 建設省国土地理院所蔵・(財)日本地図センター複製 1984「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』
- 原祐一 2009「向ヶ岡弥生町の研究－向ヶ岡弥生町の歴史と東京大学浅野地区の発掘調査の成果－」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区I』pp.281-323
- 原祐一 2011「第1節『向稜彌生町舊水戸邸繪図面』の解説と描かれた施設の検討」東京大学埋蔵文化財調査室編集発行『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 東京大学本郷構内の遺跡 教育学部総合研究棟地点 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』pp.138-144
- 皆川典久 2012『凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩』株式会社洋泉社発行
- 東京都下水道局ホームページ <http://www.gesui.metro.tokyo.jp/kurasi/kurasi.htm>



報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき いがくぶふぞくびょういんじゅへんでんせつびとうちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院受変電設備棟地点							
副書名								
巻次	12							
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	原 祐一（編）、大貫 浩子、石井 龍太、小林 照子（編）							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成 24 年 11 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内 の遺跡（本郷台 の遺跡群） 医学部附属病院受 変電設備地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 ほんごう ちょうめ 本郷 7 丁目 3 番 1 号	13105	47	35° 42' 52"	139° 45' 48.	平成 12 年 2 月 5 日 ～ 3 月 31 日	300㎡	医学部附 属病院受 変電設備 棟新営の ための事 前調査
所収地点名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本郷構内の遺跡 医学部附属病院受 変電設備地点	武家屋敷	近世・近 代	石垣、礎石、地下室、 井戸、土坑など	陶磁器、土器、瓦、 金属製品、木製品、 東京大学関連遺物（医 療道具・実験道具）				

---

---

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 12

東京大学本郷構内の遺跡

## 医学部附属病院受変電設備棟地点

2012年5月31日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室  
東京都目黒区駒場4-6-1  
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 (有)平電子印刷所

---

---